

宅邸ノ君松代喜本山家業流 町市余



君松代喜本山 町市余



君藏市息今氏藏汲黒小 村冲字町市余



君藏汲黒小 家菜漁村冲字町市余



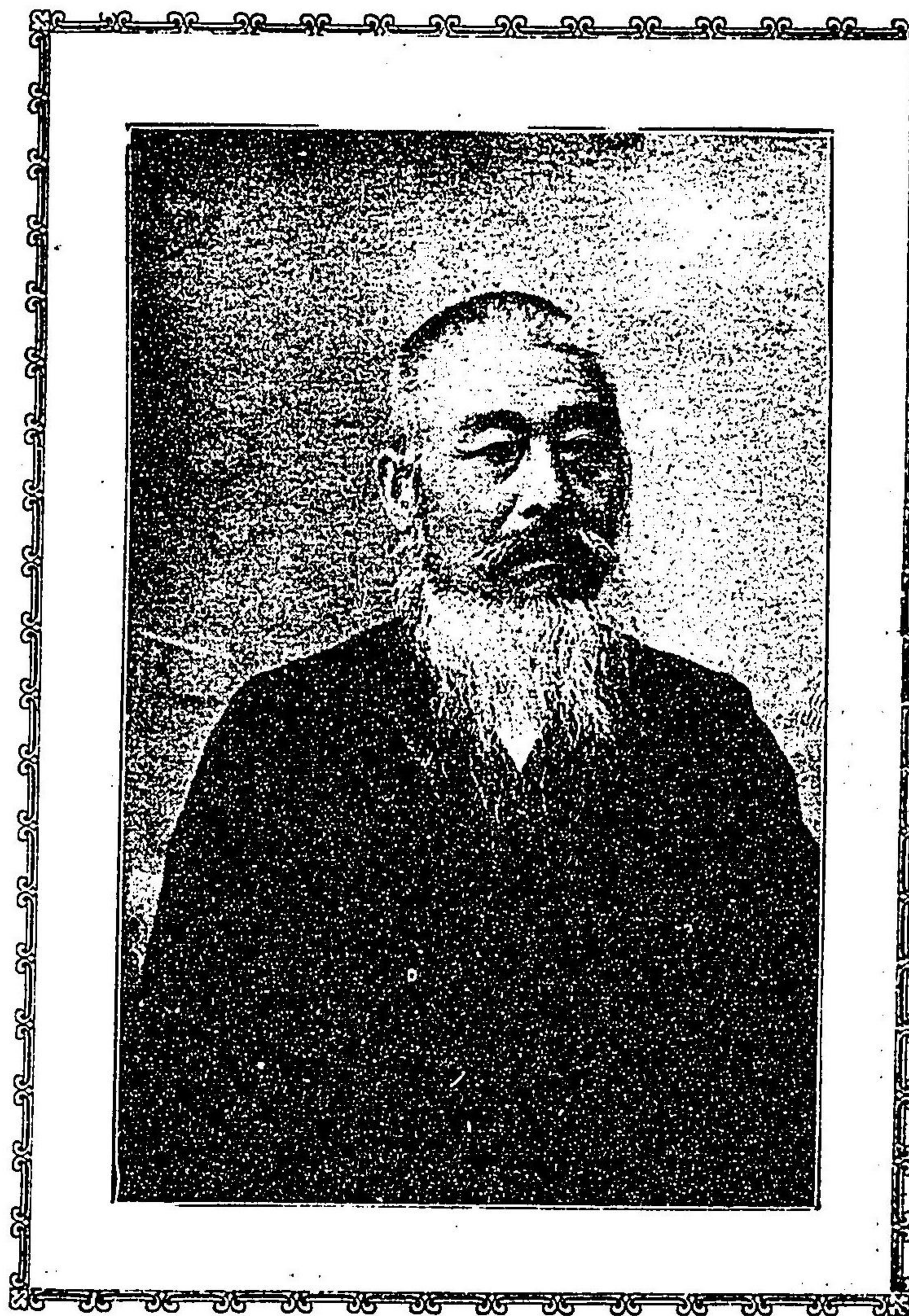
余市町 永全住職澤邊東開君



余市町 瀧家源村兵衛君



岩内町 橋本清吉君



岩内町 築瀬直精君



岩内港 醫學士 泉鐵太郎君



岩内町 濱喜三郎君



岩内町漁業家 武井政治君



古宇郡泊村漁業家 武井忠吉君



古宇郡泊村漁業家 四宮喜助君



古宇郡内冊村漁業家 佐々木末泊君



古宇郡孟村漁家 種田重治君



古宇郡泊村 金熊次君



君耶次豊口澤 家業漁村孟郡宇古



君作松井武 家業漁村内志興郡宇古



君吉幸川野佐 家業漁村内恵神郡宇古



君助庄口澤 家業漁村内恵神郡宇古



君助與藤佐 家業漁町國美



君助勇橋高 家業漁村內惠神郡宇古



南尻別村目名：平田敬信君

古
宇
郡

水
産
業
平
石
井
利
兵
衛

泊
村
百
〇
一
番
地

水産業

東島牧郡輕臼村

△阿部松之助

倉庫業

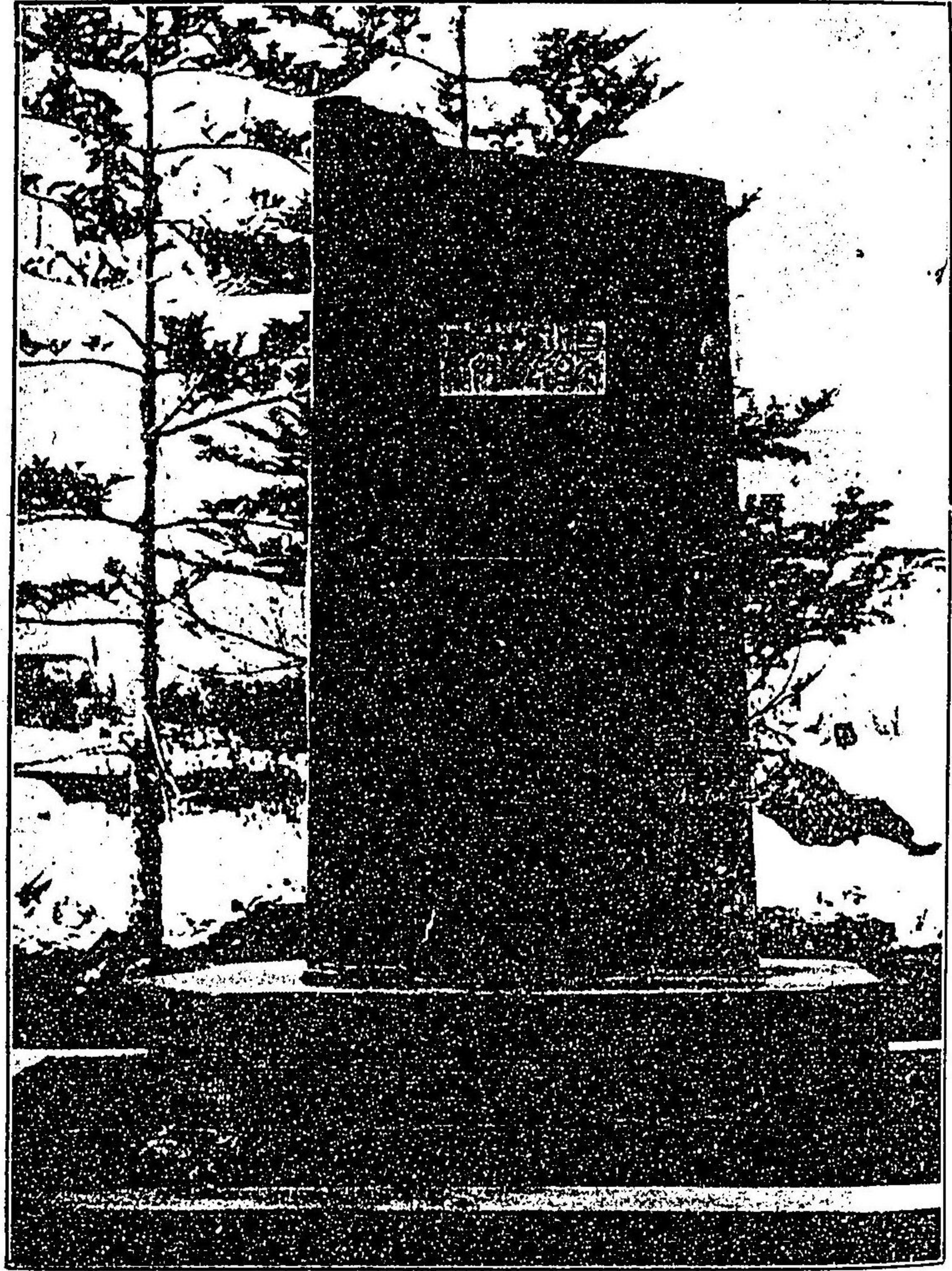
壽都港岩崎町

△阿部倉庫部

水産業 全田中吉兵衛

岩内郡

堀株村字茶津



南尻別村名農長、平田敬信ノ頌功碑

水産業



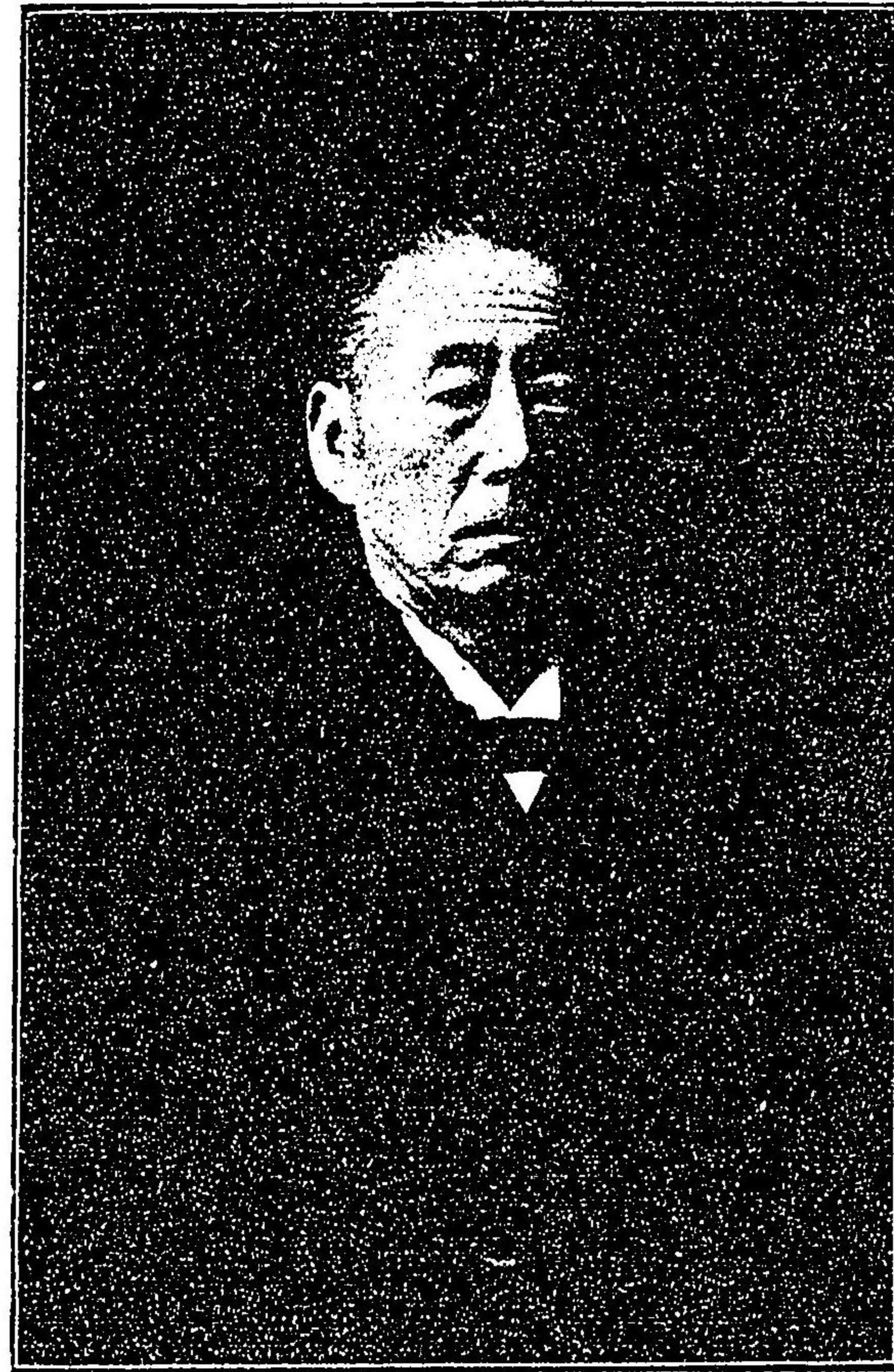
金澤長太郎

古宇郡

興志内村



君門衛右榮藤佐 員議台道村寒歌



君助之德上井 村内松黒



君内源井松 士議代前町都壽



君八善田中 家業漁町都壽



君衛惣與向帶 町都森



君吉佐町小 長々町都森



高橋英隆君 壽都町漁業家



高橋清吉君 伏村漁業家



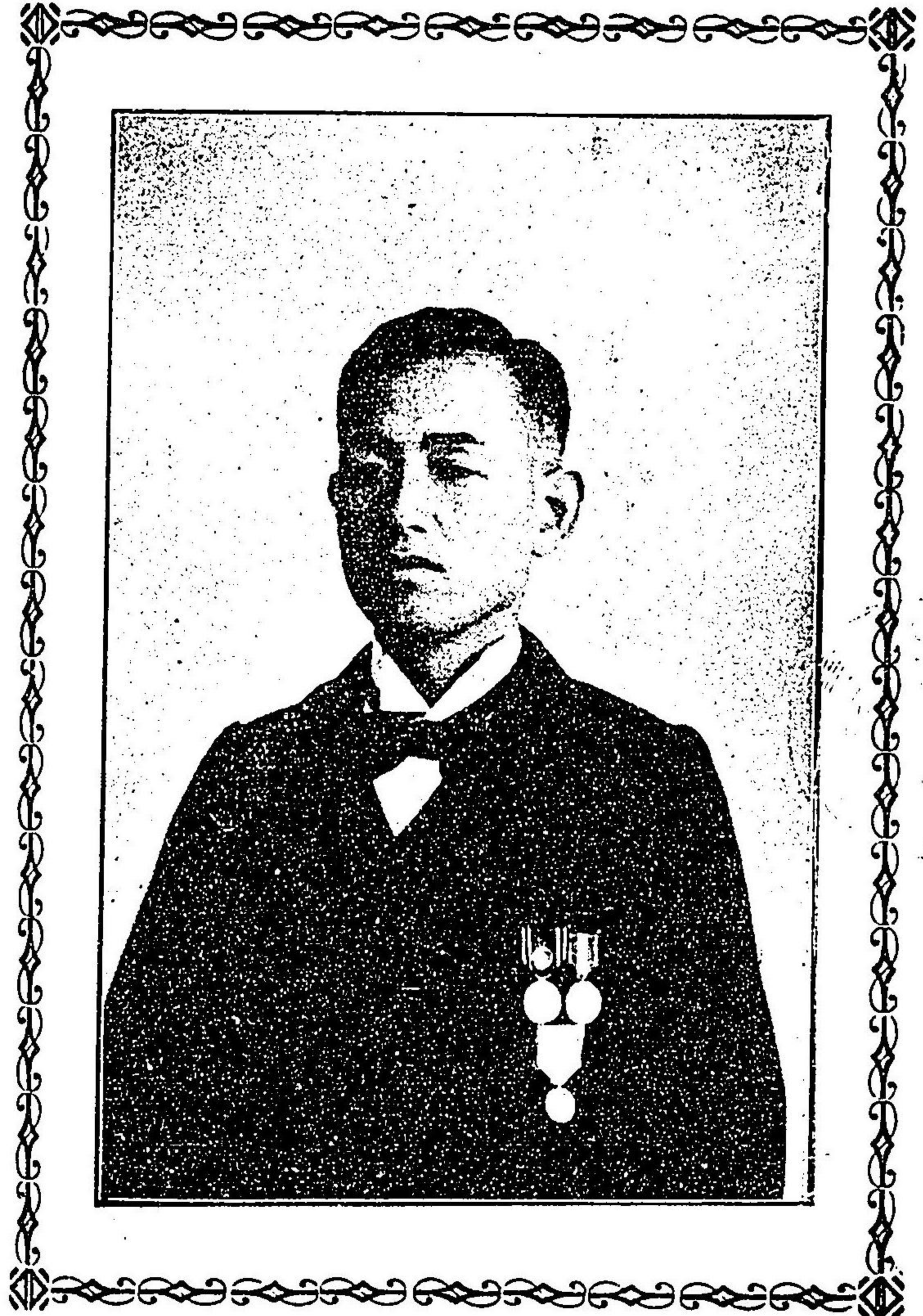
君藏松原桑 家業漁町部壽



君耶太德息令卜君八利谷種 家業漁町部壽



野村三郎 磯谷村字古丹

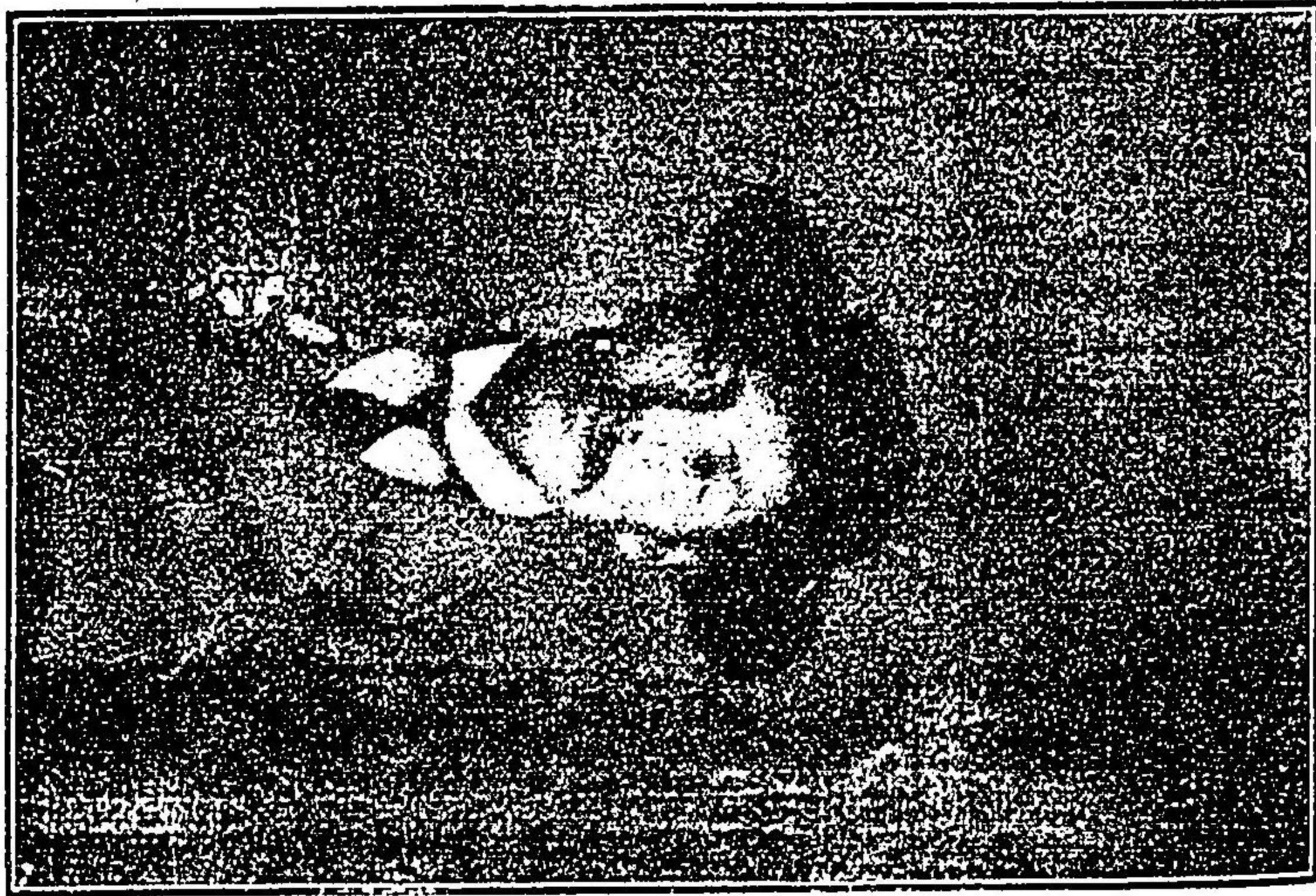


山川政吉 壽都町流業家

高畑道賢 醫師町國美



余市町 龜山重吉

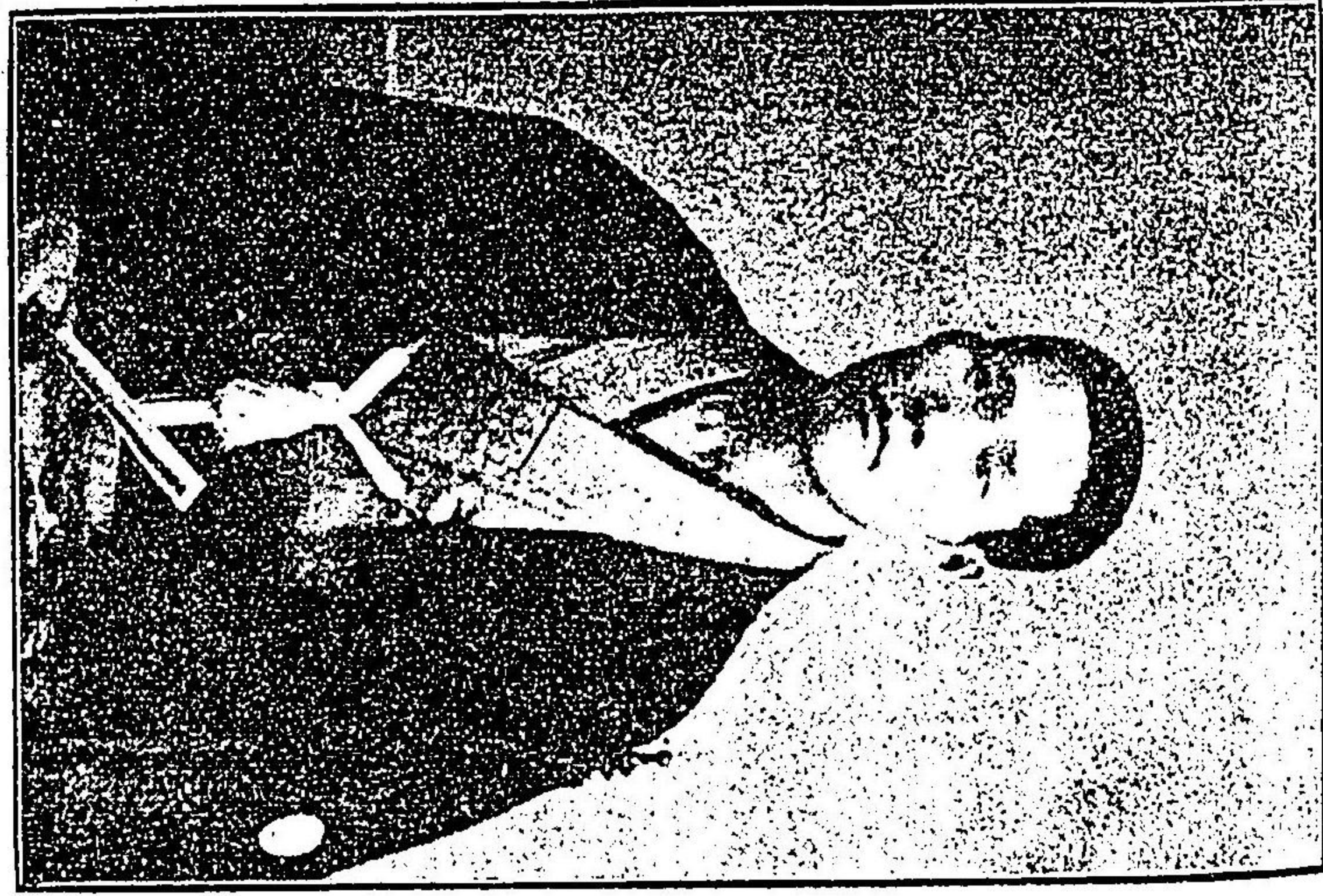


島牧郡輕白村 堤三郎君ノ家庭

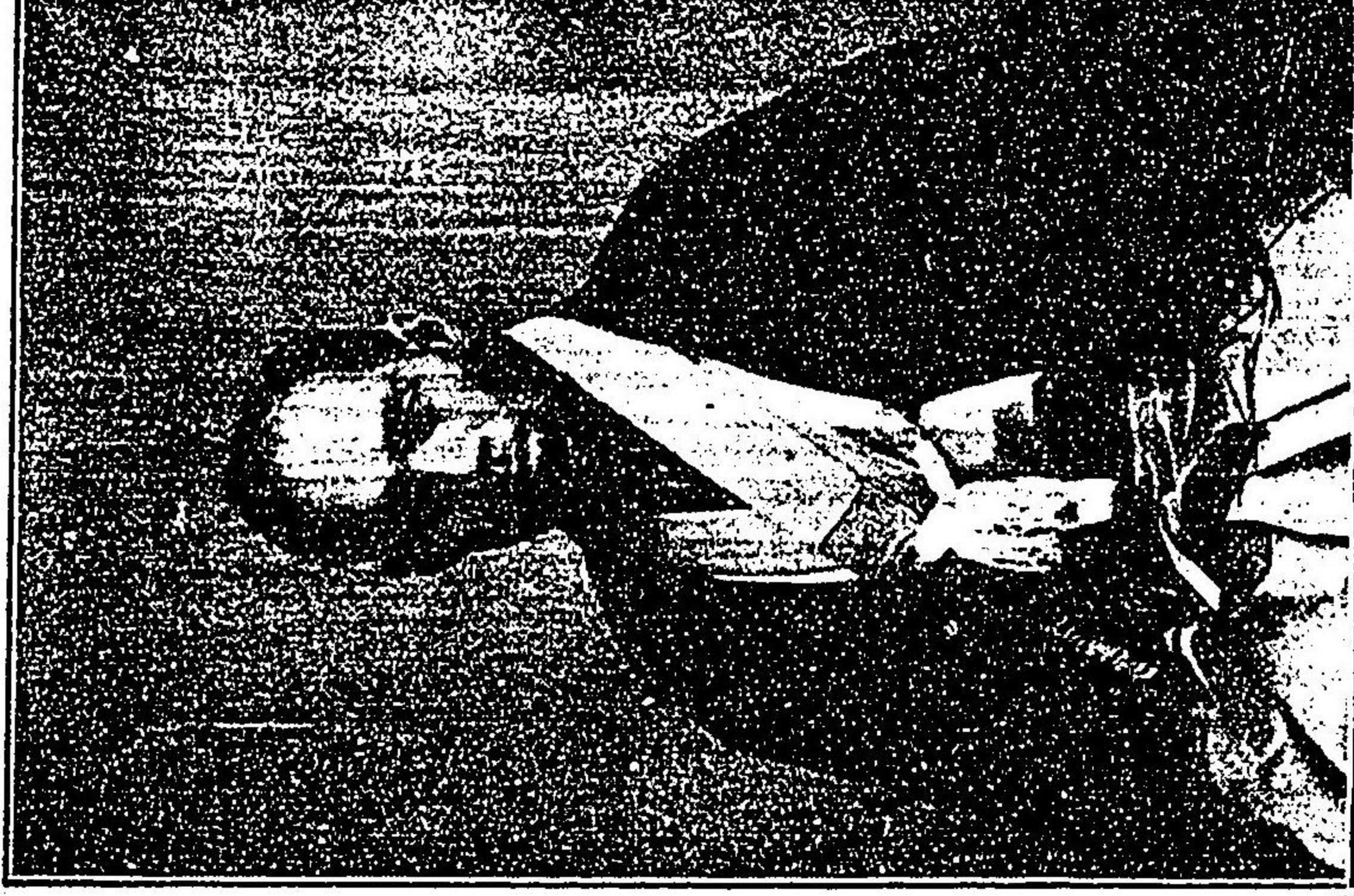
君職 島上 港内 岩



君八儀居申 町内 岩



君郎次島浦松 港内 岩



君治孝本山士護辨 町内 岩





岩内郡敷島村派業家 川村四郎君



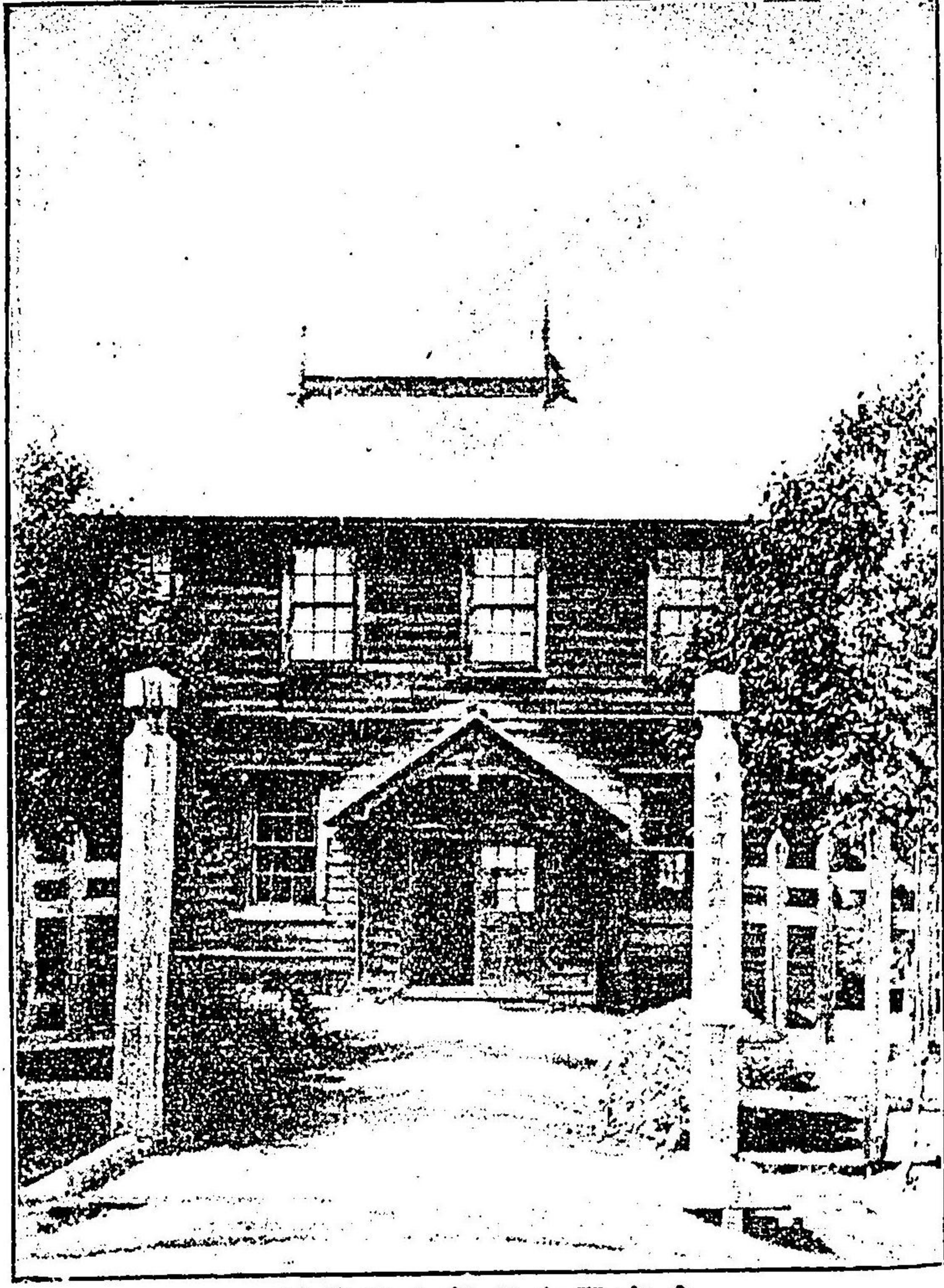
壽都町西田清松君



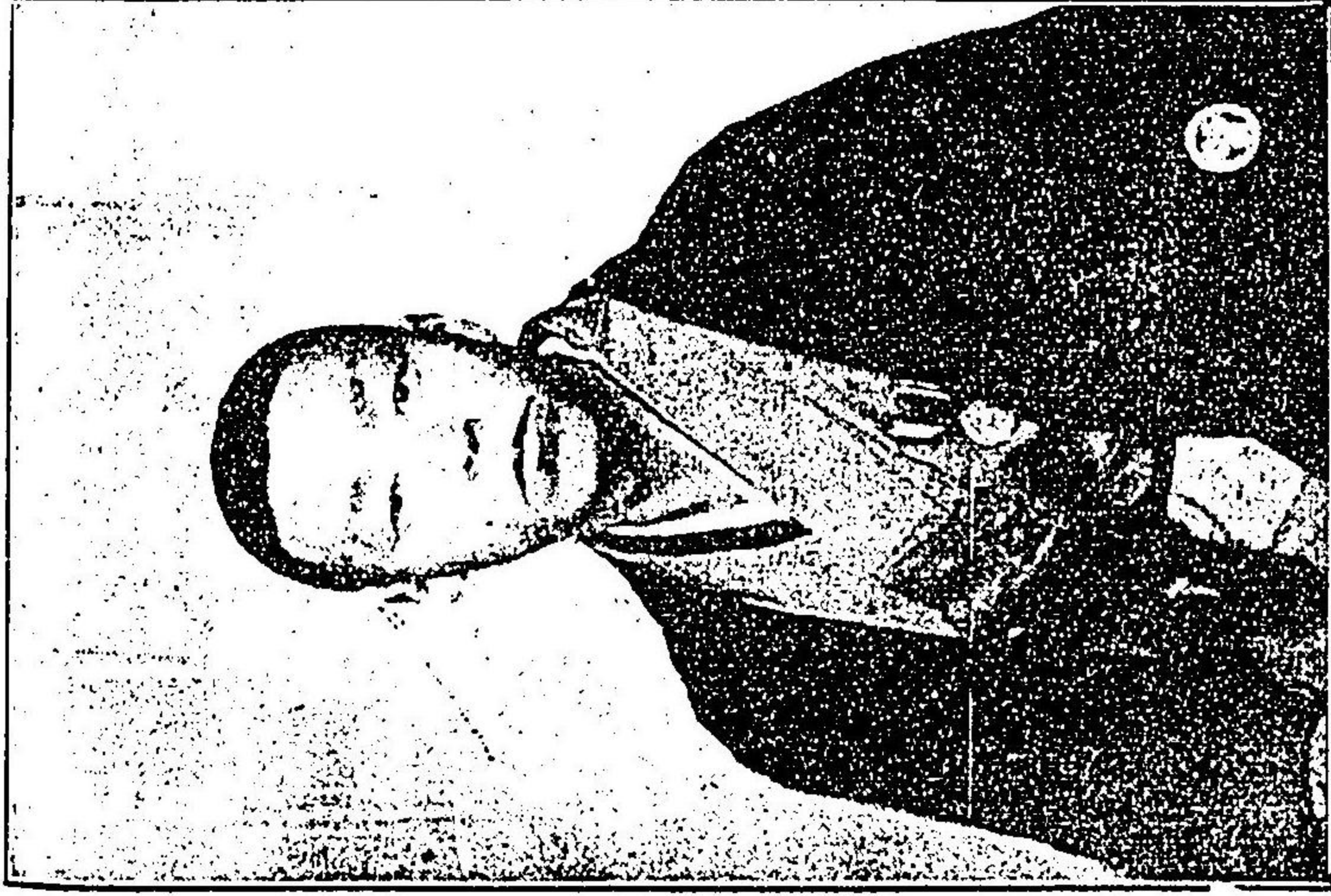
磯谷村字古丹 醫師原秀君



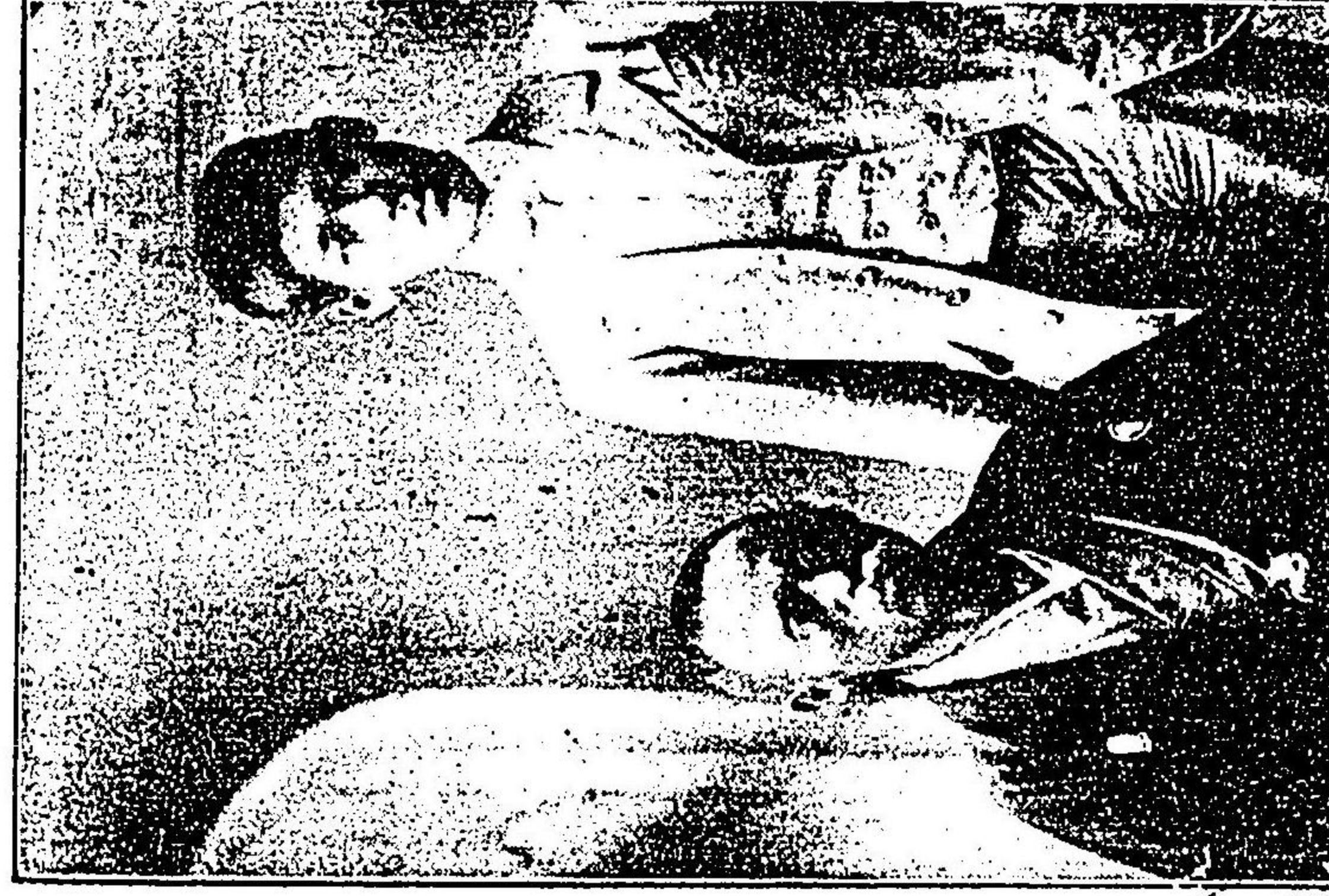
壽都町 伴太郎君



所務事合組産水郡市余

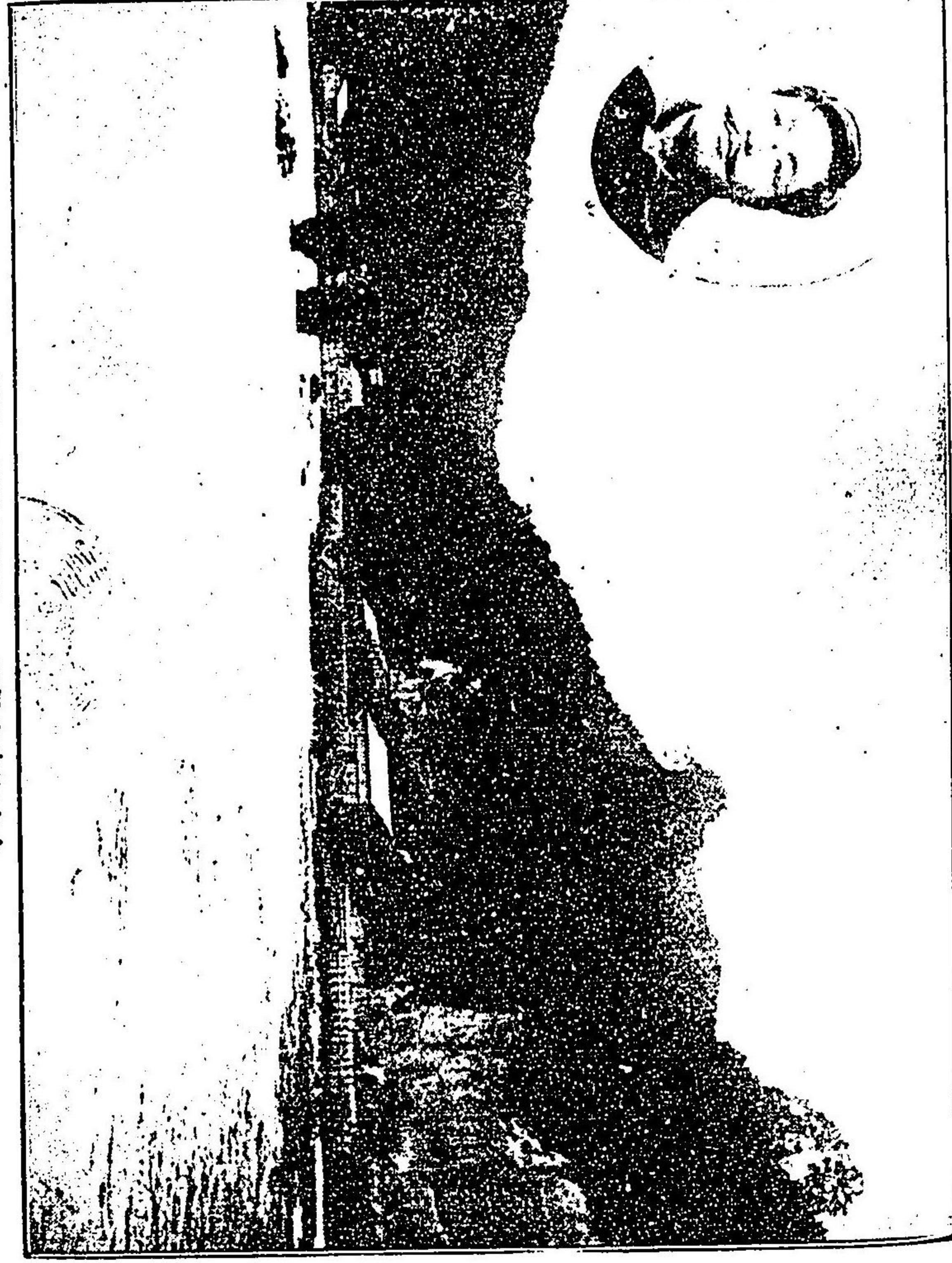
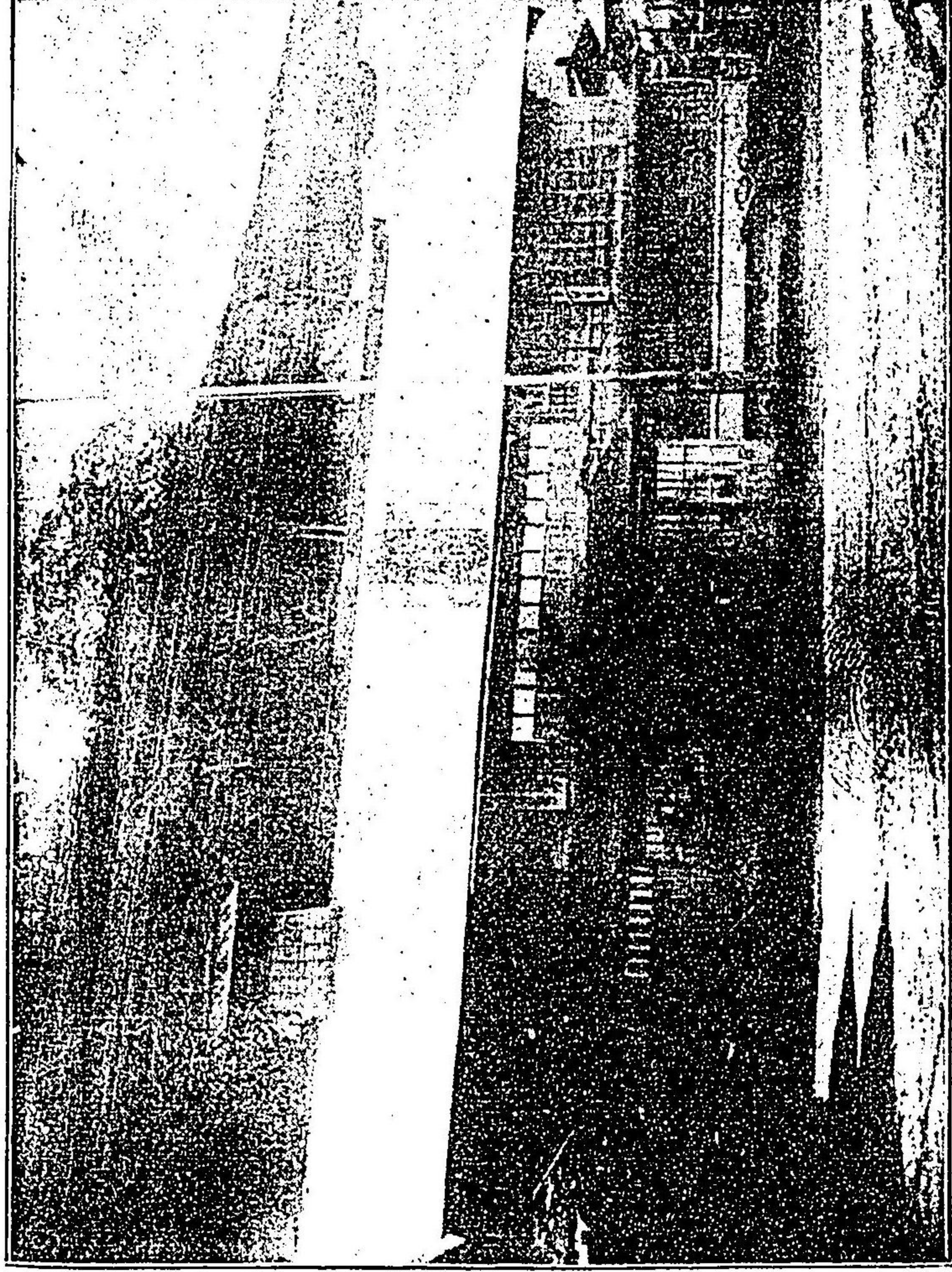


君藏幾津畔 長局便郵村越兩



息令卜君茂川安師醫 村谷磯

余市町二印 笠島商店



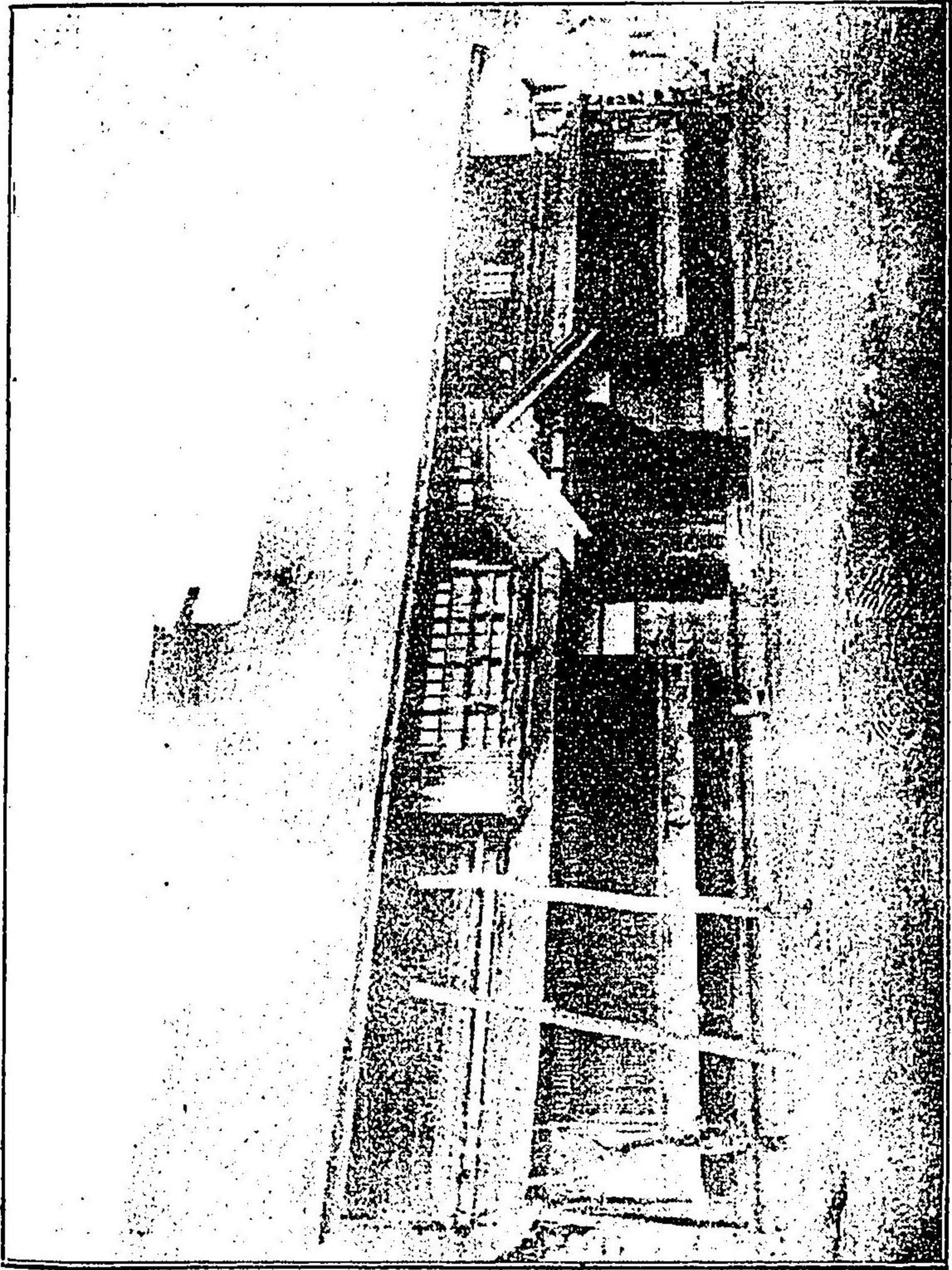
余市町字田平 猪俣雷道 漁塀

水産業

七田中福松

泊村

古宇郡



余市町源業家 横濱竹蔵ノ住宅

水産業

中 武井忠兵衛

岩 内 郡

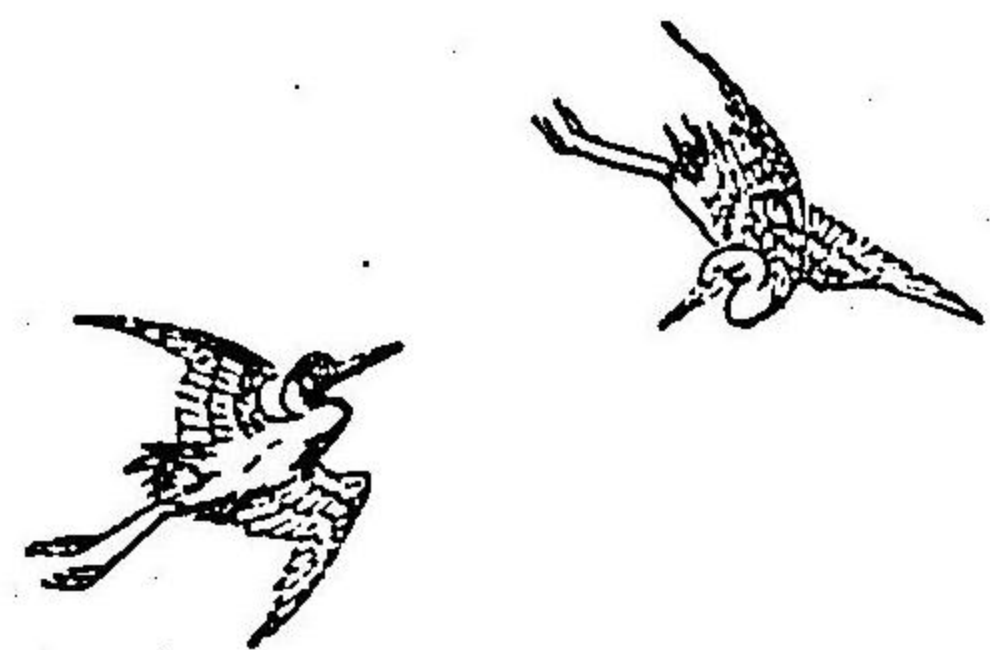
茅 沼 村

水産
業

力 渡邊角次郎

岩 内 郡

茅 沼 村



なるかな、噫、多幸多望なる後志國、本書掲ぐる處にして尙ほ足らざるもの多く補はざる可らざるもの多し、是等は更に再版の機を待つて其の完きを期せんなり。

水 産 業

由 吉 田 由 藏

古 宇 郡

泊村五拾五番地

●渡邊兵四郎君

(小樽區選出代議士)

小樽區選出代議士渡邊兵四郎君は小樽の元勳元老として知られ事實上小樽區の柱石たり水産家出身を以てして名聲徳望此の如きもの以て知るべし渡邊君の如何に偉大なる性格を有しつゝあるかを北海道と云はず我が日本に於いて漁業を以て起つもの幾萬幾に而かも代議士たるを贏ち得しも人幾干かある寥々たる曉天の辰星と云はんより寧ろ一手を屈するの數にたに達せず渡邊氏の漁業家たる身を以て小樽區選出代議士たり得しは異常なりと云は云へ又以て君の小樽區に盡せし功と勞とを察知し得べきなり渡邊翁は秋田の人萬延元年壯圖を抱いて本道に航し足を小樽に留め仕を小樽の名家山田家に求め同家に入り多年の精勵山田家の柱石たる位置を占む明治十一年同家を辭し獨立漁業に従事してより翁の斷乎たる果斷と絶倫なる精力とは次第に頭角を顯はし小樽の有志家として代表的人士を以て目せられ居を勝納町に卜するより時人呼んで勝納將軍と稱するに到れり蓋し翁の勇氣果斷手腕此の三者の小樽の發達に貢献したるの功に至りては眞に後昆を照すべきもの有て存ず、去れば其の徳望は翁をして小樽會議所會頭たらしめ道會議員たらしめて副議長として知られ全道水産組合聯合會會長たらしめ而して又小樽選出衆議院議員たらしむるに至れり今や翁出では國政に參與し歸りては小樽内外の重要事一として翁を煩はさるなく其の繁劇壯者尙は堪へざるに翁や老來意氣益々熾んに壯者をして瞠若たらしむ小樽の地内外の施設益々多からんとして渡邊翁益々健全なり小樽區の爲め眞に喜ぶべき也。

●寺田省歸君

(小樽區會議員)

區民皆な言ふ寺田氏は小樽將來の代議士と君の小樽に來り住してより歲月僅に十有餘年に過ぎず而して名聲と信頼を馳する此の如きあり思ふに寺田氏は人格の人なり、識の人なり古武士の典型たるに足るの人なり、幾多小樽の群雄一人氏に及ばざるは之れが爲めたるに外ならず區會に議長代理として知られ、事實上に於ける舊公民系の領袖を以て知らるゝが如きは未だ末なり氏には氏に對すの大なる將來あり、他なし區民の言ふ處乃ち是れ、氏安政四年五月を以て下總國相馬郡井野村に生る井野村は寺田家の祖先の開創せし地にして氏の先考伊兵衛氏に至るまで連綿十六代に達せし舊家たり氏長じて千葉縣師範學校に入り教育家たるの素を養ふ優等の成績を以て同校を卒業するや千葉縣に職を奉じ更に山形縣に轉じて育英の鞭を執り至る處名聲あり明治十七年京都府女學校教諭に任せられ更に京都府屬を兼ね廿年京都府高等女學校教諭に任せられ時に府知事北垣國道氏に其の才幹を認められ北垣氏並に榎本武揚氏の共有になる小樽に於ける土地の開創監督を托せられて廿三年教職を辭し、廿五年小樽の人となりてより歲月茲に十有七年小樽第一火防線以北の稻穂町が道路平坦市區整然として小樽繁榮の中心点たる今日を來せしもの一に氏經營の方たらずんば非ず而かも氏は名聞を好まず功利に淡くキリスト教を信じて操行嚴然其の人格の群を抜ける欲せずして徳望となり求めずして名聲となり遂に未來の代議士を以て目せらるゝ信頼を來せり氏の小樽にある聖哲の所謂涸れたるに水あるが如しと謂つべきなり。

●藤山 要吉君

(小樽商業會議所會頭)

要吉藤山君 小樽一流の紳商なり其の資産に於いて其の名聲に於いて藤山氏は確に好個の商業會議所會頭たり蓋し藤山氏は漁業家としては大漁業家なり農耕家としては大農場主なり回漕業者としては大船主なり其の店舗を汽船部漁業部農業部に分ち別に小樽区内有數なる鐵工場を經營せらるゝに於いては藤山氏一代の成効の如何に大なるかを知るべきなり乞ふ氏の成効の如何に氏の奮闘に依り氏の奮闘の如何に大なりしかを見よ、藤山氏嘉永四年七月を以て秋田久保田村に生る先考は古谷多兵衛氏藤山氏は其の第二子たり十七歳志を抱いて本道に航し福山の漁業家田中武左衛門氏に仕へ明治五年小樽信香町回船問屋藤山重藏氏の養嗣子と成り藤山を姓とす、重藏氏は福山の人にして明治の初年小樽に住し明治三年山田吉兵衛氏の委托に依り回船問屋を開始せしの人深く要吉氏の人と爲りに服し強いて養嗣子と爲す氏家を繼承するや銳意回漕業を擴張し明治十二年東北地方並びに大坂小樽間の航路を開き其の他天塩北見地方に對する航路の開始盡く氏の經營に成るものたり廿七年北見地方に於ける自己經營の漁場に資し一般公衆の利便を來さんとして汽船小樽丸を新造してより年々汽船を新造し幾多の命令航路に従事し全道沿海地並びに樺太に於ける各港に於いて氏所有汽船の笛聲を聞かざるなきに到る氏又力を公共事業に盡し喜捨寄附に財を吝まらず好く富豪の天職を解し名聲噴々たり今期會議所議員半数改選に際し會頭問題に行惱むや衆望期せずして氏に蟬集し會頭に推され現に其の職に在り氏の徳望想ふべき也。

●中谷 宇吉君

(小樽選出道會議員)

小樽區選出道會議員中谷宇吉君は堅忍不拔意氣熱烈の士なり君の道會議員の月桂冠を争ふて勁敵小町谷純氏と決戦するや君曰く敵陣を衝く其の中堅を突破するにありと爲し躍然自ら馬を進め世の多くの君の敗戦を豫期せしに拘らず驚くべき多數を以て當選の榮を得たるが如き以て君の熱烈なる意氣を見るべきに非ずや、氏慶應三年四月四日を以て徳島縣板野郡中喜來村に生る先考は乾平太郎と稱す氏八歳の時同郡撫養町中谷家に養はれて嗣子となる中谷家は米穀商を營み素封家として知られしも養父宇吉氏米相場に失敗し家産を傾く而かも養父の意氣確なる毫も之れが爲めに屈せず明治十二年本道に航し居を小樽にトし船業を開治し經營の功年々の收利鮮なからず家産少しく整ふや十八年氏を小樽に招致し氏をして獨立米穀商を營ましむ氏銳意斯業に従事し卒先本道農産物の京坂輸出を開始し得る處少なからざりしも偶々農産物價格の大暴落に遭遇し閉店の止むなきに到り遂に養父の專業たる船業を援け自ら草鞋を穿ちて卒先衆に先んじて船夫を督し風雨寒暑尙ほ草鞋を解かざる五星霜其の精勵想ふべきなり岳父病んで没せし後依然として船業を經營し小蒸汽を以て引舟用と爲せし氏を以て嚆矢とすと氏又力を公共に盡し幾度も區會議員に擧げられ會議所議員たるを贏ち得たり蓋し氏は政治に興味を有し自然に政治家たるの資格を養ひ得しの人なり其の辨舌必ずしも雄ならずと雖も、其の熱烈の意氣と其の熱心とは着々氏をして成効の人たらしめつゝあり偉なりと謂つべき也。

●河野正治君

(小樽區
會議員)

河野正治君は小樽區會の團將にして、又小樽區會に於ける清涼劑として知らる、人となり慷慨凜離裂帛の意氣躍然人に逼り不正を惡む蛇蝎の如く苟くも不正不義の存する處、之れを粉碎せずんば乃ち止まず去れば區會議場區當局を彈劾し區政施設の非を打つ盡く河野氏を煩はさざるなく其の清涼劑の名ある是れが爲めなり若し夫れ區會議場疎聳を捻つて不肖正治を口にして屹強なる九州辯を揮つて區當局を論詰するの處に到らんか何人も襟を正ふして傾聽せざるなく、何人も其の熱心に動かされざるなし従つて氏の一度區會議員に擧げられてより區民氏の行爲を多とし改選毎に大多數を以て選舉せらる、而して選舉民皆な曰く河野氏遂に區會に缺く可らず、吾人等は河野氏に依りて其の向ふ處を知ると、氏の區民に信頼せらるゝ此の如く大なるあり、氏九州の人安政二年八月豊後國東郡田染村に生る先考を河作氏と稱し正治氏は其の嫡出たり家代々農に兼るに酒造業を以てし、名聲あり、氏長して力を居村の公事に盡し村總代郡會議員等に擧げらる、明治廿三年本道視察の途に就き五月小樽に著してより天北沿岸並びに離島に漁利を視察し石狩原野に農耕の業を視察し居を小樽に卜してより幾多の事業を経營し次第に其の名を知られ遂に區公人として河野氏ならざる可らずと稱せらるゝまでの信頼と地位とを贏ち得たり氏や熱烈火の如きも又同情の念に篤く人の來りて急を訴ふものある救はざれば乃ち安せず其の知ると知らざるを問はざるに於いて、河野正治氏眞に是れ男子中の眞男子と稱すべき也。

●小町谷

純君

(小樽區
會議員)

小樽幾多群雄中智辯第一の士を物色す何人も小町谷純氏を推さざるなし然り小町谷氏は小樽群雄中異彩あるの士なり氏の辯護士として小樽に成効したる致富の途に湛能なる、而して又幾多小樽の群雄を凌駕して舊公民系一方の重鎮として推さるゝ等數へ來れば氏の人格風貌の髣髴たるものありて存せずや、思ふに氏の智辨の群を抜ける辯護士なる職務の然らしむる處なりとは云へ又氏の素養深く蕪積豊に平夕孜々として修養を怠らざるが爲めたらずんば非ず、吾人は小町谷氏の已に産を興し名を爲し功利兩つ乍ら之れを掌中に握り尙ほ其の修養に怠らざる意氣に服するものなり、小町谷氏の名聲依然として熾なるもの故ありと謂つべきなり氏信州下諏訪の人少壯夙に志を法律に寄せ之れが研鑽に怠らず東京法學院に入るに及んで苦學研鑽人後に落ちず遂に優等の成績を以て同院を卒業するや直に又辯護士試験に登第し首尾好く辯護士と成る是れを聞く氏の笈を負ふて東都に出づる固より豊なる學資あるに非ず其の苦學眞に衆目を驚すものありて存せしと云ふ氏の巍然として情に屈せず敢然として理性の人たる性格學生時代已に發揮せられつゝありしを察すべき也、明治廿七年小樽に辯護士の門を開いてより忽にして名聲を擧げ區幾多の問題に盡瘁して益々信頼を來し區會議員に擧げられ會議所特別議員に推薦せられ遂に道會議員に推され道會一方の雄將として知られ前回の改選端なく敵派の奇習に敗れたりと雖も、何人も氏の將來に矚目せざるなく氏にして若し意あらば又好個の代議士候補者として迎はらるゝや必せり。

●青木乙松君

(小樽區會議員)

小樽の富豪青木乙松君、資産百万圓以上を以て知らるゝの青木家、家は城の如く山の半腹に屹立し、名は雷の如く附近に聞ゆ、不知青木氏之れ如何なる人士ぞ、蓋し富豪として富豪たるの天職を解する乙松氏、區會議員として雄を一方に馳せ、重を舊公民派に爲しつゝ、あるの青木氏を傳へんとするに先ち、氏の養父吉太郎氏を傳せざるを得ず、青木家の致富今日あるもの實に先代吉太郎氏の力與つて太なればなり、先代吉太郎氏は能登の人、少壯志を抱いて本道に航し小樽船樹忠郎氏に仕ふ時に十九歳たり後ち獨立銀類を行商し小資を得て信香町に荒物雜貨店を開き次第に其の隆を來すや吉太郎氏の烟眼將來巨利を博するは漁業にあるを知り、年々收利を以て漁場を購入し潜に他日雄飛の素を爲す、果々年々豊漁を來し利潤又夥しきや荒物店を廢し有する處の漁場をも貸與し、漁業家に對する仕込を爲し、傍ら資金を貸與す吉太郎氏の青田に對するの見込なるもの算鏘神の如く一も見込を誤らずして年々の收利多く一代好く百万圓以上の資産を爲したるに於いて吉太郎氏は其に傑中の傑なるもの乙松氏又能登人にして本姓は隅氏明治卅一年傑物吉太郎氏に才幹を認められ其の女に配せらる吉太郎氏後克く家を守り守成に成効して青木家の門地益々高く其の力を公共慈善兩事業に盡し年々の喜捨少なからざるものあるも、乙松氏好く富豪たるの天職を解し、毫も吝色なきを以て名聲益々傳へられ、區會議員として重を一方に持し區内外の公事氏の盡瘁に待つ多く一人青木家の盛名を仰がざるものなし。

●村林已之助君

(小樽區會議員)

小樽の地一代にして産を興し名を爲したるの士固より少なからず、而かも後進者の摸範とし立志家の白眉と爲し、後昆に垂るゝに足るの士を求むる、吾人は先づ指を村林氏に屈するものなり、村林氏の權道を辿らず、正道を踏んで奮闘し、勤儉自ら奉じ、零細の資を苟くもせずして遂に巨萬の富を爲し、名聲と富と兩つながら贏ち得たるもの假令半世の閱歷に異彩なしとするも、吾人は村林氏を推して摸範的成効家と爲すものなり、氏の今日會議所議員として、區會議員として、幾多の公職を帯び、其の精勵比肩し得るものなしと傳へらるゝの一事、以て氏の成効の半面を語らずや、然り村林氏は精力家なり、而して奮闘家なり渺たる過去の一炊事夫今日の九定の大將氏寔に傳ふべきなり、氏安政五年三月五日を以て近江國神崎郡八幡村字川南村に生る先考は常五郎氏世々農を業とす明治四年十五歳の弱年を以て從兄傳藏氏と共に本道に航し足を小樽に留め氏は金曇町三宅龜吉の炊事夫として精勵せり、居る事多年、後ち從兄傳藏氏の家業を援け依然として精勵せり、明治十五年從兄と意を異にし入舟町に獨立木炭販賣店を開く、自來氏は獨立獨行の人となり奮闘數年其の利潤を以て履物商に轉ず、是れ氏が家運を開き福運を來し、入舟町に於ける九定とし云は、一人知らざるなきの今日を來せし端緒たりしなり思ふに村林氏の成効や奮闘に始終し、勤儉に終始す、後に事を爲さんとするもの村林氏に學んで其の堅忍奮闘の志操を養ふべく、村林氏に習ふて如何にせば大なる成効を贏ち得べきかを知るべきなり。

●京坂與三太郎君

(小樽區
會議員)

赤裸々の身を挺して今日の名聲と資産とを博し得たる京坂與三太郎君、其の奮闘的成效の如何に異彩あるよ、氏越中の人安政元年四月東蝦波郡東山見村に生る、先考は甚右衛門氏と稱し與三太郎氏は其の長子たり、家祖神社佛閣の建築師として手腕精巧及ぶものなく名聲聞國に聞ゆ、先考家祖の業を繼がずして農に歸し、兼るに米穀商を以てす、與三太郎氏家督を繼いでより偶々米相場に失敗し、家産を傾倒し恢復の策なきに至る、氏慨然として屈せず、思へらく北門の新天地以て我武を用ゆべきなりと、明治十九年四月小樽に航し同郷の知人にして有名なる沼田喜三郎氏の援助を得同氏經營の奥澤村に於ける水車精米場に入り其の經營監督に従事す、氏身を奉ずる勤儉に數星霜の辛勞好く數千金を蓄財す廿四年共成株式會社の組織せらるゝや、氏其の發起人となり、又株主となり、更に支配人たり、自來の氏は唯だ向上發展の一途あるのみにして家運益々隆盛に、其の餘力を石狩原野の開墾事業に濺ぐに及んで益々成效し、廿九年小樽製油會社を組織して取締役となり、又京佐加合名會社を興して酒造業を經營し以て今日に及べる等凡そ氏の渡道以來氏の經營發起に成る事業盡く成效し一も失敗に終らざりしが如き以て氏經營の才を知るべきなり四十一年區會議員に選舉せられ今夏大浦農商務大臣の小樽に來るや氏の邸宅は其の宿所とせられ大に其の宏壯の建築を稱揚されたりと云ふ、赤手渡道し來り二十有餘年の歲月此の如き大なる成效を博し悠々世に處して聲名あり、京坂氏も又偉なるかな。

●佐々木靜二君

(小樽區
會議員)

佐々木靜二氏は小樽實業界の元老なり、久しく商業會議所副會頭の任にありて其の手腕を稱せられしもの、以て氏の人となりを知すべきなり、思ふに佐々木氏の小樽實業界に立つて信用あり、名聲あり、徳望あるもの、氏の精勵と、氏の一諾を重んじ約を違へざるを其の經營の才とに據るものにして、氏社長たる共成株式會社の會社として全道一の配當額を爲しつゝあるが如き、抑も氏經營の巧妙なる結果たらずんば非ず氏加賀の人嘉永四年九月三日を以て同縣下鶴來町に生る、先考は辻市右衛門氏と稱し、氏其の次子たり、明治二十年佐々木家を繼ぎてより佐々木を姓とす明治十四年本道に航し居を函館に卜し回漕業を營み傍ら海産商を經營し大に其の名を博す十八年北海道共同商會に入り廿年同社札幌支店長たり、廿四年共成株式會社設立に際し發起人の囑托を入れて相談役と成り、同社成立するや支配人として業務を處理し卅年同社常任取締役となり更に専務となり、現に社長として同社を主宰し、同社の増資に他社の併合に氏經營の跡真に見るべきものありて存す氏は又初期以來の會議所議員にして前期副會頭に推され今期改選と共に辭任して常議員たり又區會議員に推され大多數を以て當選現に其の職にありて區會に重を持しつゝあり、其の他氏の開拓事業に力を盡して、盡く成效したるが如き氏は所謂模範的成效家たるの實を事實の上に示しつゝあるの人にして、其の名の籍甚たる固と當然の事にして、氏に對し之れを云ふが如きは寧ろ贅たるべく、吾人は小樽實業界の爲め氏の健在を祈るもの也。

●宮腰定作君(小樽區 會議員)

西哲富豪の天職を問ふ者に答て曰く、爾の隣人を愛せよと、隣人とは擴く之れを解すれば社會なり、豈に一部隣人の謂ひならんや、小樽區内富豪を以て知らるゝ、其の人に乏しからず、而かも克く富豪の天職を解し、弘く社會を愛するの富豪に至つて、果して幾千の富豪を數へ得るや、折花嘯月に千金を散じて顧みざるの富豪乃ち存す、邸宅の改築に十萬金を投ずるの富豪乃ち存す、弘く社會を愛し、普く隣人を愛するの富豪に至つては、寥々辰星の如し、此の如き小樽獨り宮腰定作氏の富豪の天職を解して一特色を發揮せらるゝ、あり意を強ふするもの豈に獨り吾人等のみならんや吾人は宮腰氏の幾多會社の重役として實業界に貢献せらるゝの功よりも、渺たる一小樽施療院の維持に力を盡さるゝを多とするものなり、其の秋田屋の名の噴々として區内に傳へられつゝある寔に故ありと云ふべし、秋田屋は氏の店舗の屋號なり、先代伊兵衛氏は秋田縣由利郡壠越村の人、幕政時代已に本道に航し西川貞次郎家に仕へ廿歳にして高島郡に於ける同家支店支配人に任せられ廿七歳獨立厩屋に漁場を開き、年々の收利少なからず、後ち又力を農業に濺ぎ上川地方に大農場を經營し、嚴たる宮腰家の基礎を築く、先代没後定作氏諸事經營の衝に當り、年々資産を増殖し聲名今日あるを來せり、氏今や區會議員に推されて區會一方の雄として知られ、力を慈善事業に濺ぎ、財を寄附し、財を喜捨して幾多の慈善事業を援け、毫も吝むの色なし、吾人は氏の如き富豪を小樽に得たるを以て小樽の面目と爲すものなり。

●正野玄三君と萬病感應丸(近江國蒲生郡日野町)

滋賀縣を知るの士にして正野氏を知らざる者なく又萬病感應丸を知らざる者なし、其の雷名時の天下を風靡する者將に其靈驗著大なるに因らざるばあらず、抑も本劑の基起を尋ぬるに元祿年間正野家の遠祖源七、時の大醫富潤丹水に師事たるに及んで其の瀧奥を究め九散を製し普く全國陬鄙の地に布く、偶々東北を歴遊し僻落醫藥に乏しきを助く非命の民之を施されて凡そ治せざるなし、後源七剃髮して玄三と改め禁裏に出入し正六位下に叙せらる、今の萬病感應丸を其始製する所たり後更に此二方は正徳四年正月を以て再び世に弘め世人競ふて需む、當初神農感應丸と名づけたりしも、世人萬病に靈驗著しきの故を以て萬病の二字を冠せり、爾來百九十三年の星霜連綿として久しきを重ね益々其名價を博せり而して其最も功驗を知らるゝは眩暈、昏倒精神疲勞、虫癥、腹痛、下痢、中暑寒、食傷、熱病、癩亂、瘧疾、吐逆、頭痛、心痛、脇痛、耳病、打身、腫物、毒虫害、下疳、挫き、胸塞、氣鬱、退屈、痔疾、口中諸病、疝氣中風、小兒驚風、小兒虫氣、胎毒、小兒腹痛、魚鳥中毒、流行病、感冒、産前産後の諸症にして克く今日の雷名を轟かしたる者は偏に他劑に卓絶する功能を特有するを証して余りあり、因に本道に於ける特約店は小樽區色内町於古潑川畔にある若林貞三氏商店なりと云ふ。

●若林貞三商店(小樽區 色内町) 營業の確實と商品の精良と信用の甚大とを以て隆名噴々超然樽都の實業界に卓越するもの若林貞三氏商店也店舗は區内唯一般販の巷衢衝宏壯の妙

見町通に在り、先づ官煙元賣捌を以て知られ藥種商を以て鳴る、店主若林君江州日野町の産頗る文明の商畧に通じ經營巧妙を極む、郷里日野町正野玄三氏の名藥萬病感應丸、正野萬應丸は第一の商品にして好評到る所靈驗を知られ、東京伴傳兵衛製富士縫日なし蚊帳浪花御すだけは品質巧緻と優美の名あり、今や營業愈盛大に繁昌日に増すものありと云ふ。

●丸万印成田糸店(小樽區 入船町) 成田綿糸店は小樽區内に於る有數なる綿糸店なり、如何なる綿糸と雖も備へられざるなく卸店あり小賣店あり而かも薄利を主とし良品を廉價に販賣するを以て信用名聲共に高し、店主成田八太郎氏は江州の人、明治廿二年小樽港町大三岡田支店員として來樽し吳服部製織部回漕部に歷仕し勤績十有餘年斯業の事一として精通せざるなし卅五年轉じて早見吳服店に入り益々斯業の研鑽に銳意す、成田氏本道に糸類專業者なきが爲の一般需要者の不便不利尠なからざるを認め先づ之れが試賣を爲し其の需要の度を知らんを期し卅七年住初町に獨立し糸類販賣店を開く、氏の企圖空しからずして一般需要家の利便を來し業務隆盛を極む、氏益々之れが發展を企て、翌卅八年入舟町量徳寺前なる現住地に店舗を移し、専心其の成業を期す氏手腕の敏機を見るの妙計畫着々成効し、年々の發展進歩、遂に區内有數なる綿糸店として知らるゝの今日を來し、卸店小賣店を兩立せしむる現時の隆を來せり氏販賣の糸類の良品たる四十二年小樽商品陳列場に陳列し審査の結果進歩一等賞を與へられたるが如き以て其の一般を知り得べし、成田氏夙に本道機業の不振を嘆じ、本業に附隨する將來の計畫として道廳の獎勵しつゝある染織業に要

する材料機糸及び器具を購入し、商店内部に機業獎勵會を設け本道農家の一大副業として機業を盛ならしめんを期しつゝありと、氏の烟眼と敏腕とを以てす思ふに近き將來に於いて氏の企業の發展を見るや必せり、成田糸店の信用名聲と共に嘖々たるもの一に氏此の如き要意に出るものにして決して偶然にあらざる也。

●山二印馬場吳服店(小樽區 港町) 港町街角に於ける有名なる吳服太物商を馬場吳服店と爲す店頭取て装はざるも其組織の堅固なる合資會社を以て成り三十六年三月の組織に係る、本社は岩内に在り、會社代表者馬場榮吉氏は商界鏘々たるの人、久しく商機を習得し商略に通ず、其顧客に對する親切を以て今日の隆盛を博したる所以の者は、一に氏が奮勵にあつて存す。

●天印信善屋株式店(小樽區 相生町) 公債株式現物賣買、金融仲立信託業、定期米賣買の業を起して成功し本道實業界の雄物を以て目せらるゝ者は中村精治氏の經營する信善屋株式店と爲す氏は信州松本の人、嘗て東都兜町に公債株式の業に手腕を磨く、其本道の人となりしは明治三十四年、當初一睨樽港の形勢を視察し其の未だ現業の完全たらざるを知るや直ちに斯業を起して一意専心業務の擴張に務め其間幾多の辛酸を嘗めたりしも日露の戰役あるに及んで國庫債券の到る處賣買取引の頻繁を見るに到り家業日を逐ふて隆盛に赴き現に一ヶ年の取引公債に於て十有餘万圓の巨額に上り更に札幌南一條西二丁目支店を設け、加ふるに米穀取引仲買の業を以てす、氏由來義に厚く目前の僅利に迷はず將に文明的

商人の襟度を有するの人、其隆々や旭日の如きもの故なきに非ざる也。

●中△印向井吳服店(小樽區 稻穂町) 本道の各地、吳服太物商多く洋物商又枚舉に違わらずと雖も其基礎の堅固にして盛大確實、走童と雖も敢て知らざるなきは將に是れ小樽稻穂町第一火防の上街に聳立する向井吳服店也、營業の種目としては洋物洋小間物吳服太物類を以てし支配人大江氏の敏腕と店員一同の奮勵とは四時顧客を絶たず、常に産地の撰擇に留意し百方精品を求むるの結果一も其流行に遅れず、誠に樽港流行の華源也、本道廣しとするも流行の本源を以て任ずるもの何れにありや、中△商店の名噴然として斯界を風靡するもの洵に故ありと云ふべし。

●丸ヨ石橋商店(小樽區 奥澤村) 醬油味噌の醸造を以て區内に隆出するものは第一に石橋商店を推さざるべからず店主石橋彦三郎氏江州彦根の人、其經營の巧なる畫策圖に當り商機宜に適し丸ヨ醬油の名價旭日の如く、隆々聲望年と共に加る、店舗は奥澤に僻す、醬油の芳烈醇味は人口の膾炙する所醸造高一年に一万石を超ゆると云ふ其盛大知るべきのみ。

●日本製銅硫酸肥料株式會社小樽出張店(小樽區 堺町) 本店は遠く岡山に在り、其支店を現所に置かれて以來其販路益々擴張せられつゝあるものは一に本店が尤も最新なる改良法を撰んで精造すると支店主任秋山氏が商營の巧妙なるに因らずんばあらず、苟も耕耨の業にあるものは之れを同會社に購はざるを愚なりとなすもの洵に故ありといふべし

●井桁印井筒堂油店(小樽區 眞榮町) 舶來化粧品の粹を蒐め良好の化粧用油、香水石鹼の

類に富むに於て其名噴々たるを井筒堂と爲す開設日淺しと雖も店主橋本君經營畫策に巧なるに依り今日の隆を來し近來其發賣に係る八丈島産純椿油の芳薫を以て其聲價更に厨一段を加ふべしとぞん。

●山二印藥種店(小樽區 花園町) 同店は店主東條喜太郎氏の營む所、和洋各藥種を始め化粧品染料品等を販賣す其價格の廉なると品良なると勉強とを以て店則と爲す其營業振自ら卓越して幾多同業者間に名氏籍甚たり。

●山二印ビヤホール(小樽區 入船町) 東條喜太郎氏息の經營する所、諸般輕便迅速を旨とし居は新らたに入船町通りの新築に係り西洋料理の美味を以て歌はる、加之和式の座敷を設け懇厚を旨とすれば今尙上流紳士の出入するもの絶えずやに聞く。

●丸松印松岡靴店(小樽區 色内町) 誠實勉強薄利を旨として顧客の便を圖るは松岡靴店の精神と稱すされば苟も之れを穿つものは先づ同店に需めざるべからずと爲すもの蓋し店主松藏氏の信用あるに因る所以にして店頭は色内町街衢の中央にあり營む種目は馬具和洋革擊劍道具器械用調革の類をも含む其品質の堅牢意匠の嶄新にありては區内無比と稱せらる

●一ヨ印佐々木漬物店(小樽區 色内町) 小樽で一ヨと言へば三つ子も知るなる漬物店、店頭常に顧客の絶えざるは勉強の徳也、店主佐々木篤藏氏は秋田の人、商ふ漬物一として純良ならざるなく、販路は遠隔に亘り區内支店は妙見町、花園町、地方に於て樺太、夕張、旭川、札幌等にあり主人の氣立よろしきと信用の大なる其安價日と共に盛々たり。

●德光太次郎君

(小樽郡部選
出道會議員)

德光太次郎君は余市に於ける富有なる漁業家なり、明治三十七年第二期道會議員選挙に際し、小樽支廳管内選出道會議員として當選してより、第三期の改選、再選の榮を擔ひ、現に其の職にあり、小樽管内七郡の地、有爲の士に乏しからず財力あるの士又少なしと爲さず、而かも道會議員を選出するに當つて一人氏の陣前に馬を進め得るの士なきに於いて氏の重望勢威も又熾ならずや、吾人は氏の道會議員として海派の重鎮たるを知る、議場壇上獅子の吼を爲し、舌端風を生じ、口角泡を飛す的の辯論は、氏の得意とせざる處なりと雖も其の好く策し、其の好く勤むる處、流石に海派の重鎮として其の聲名に背かず氏は漁業家として本成效家なり、政治家としては畏敬すべきの人なり、小樽管内選挙民の其の選を渝へざるもの偶然にあらざるなり、思ふに道會議員の選出區域や、所謂陸派に廣く、海派に狭くして、道政を議し、漁政に及ぶ何等水産上に智識經驗なき、山間原野の選出議員が往々にして、水産上の施設を左右するあり否な事毎に海派議員を壓して跳躍を恣にし、道政の缺陷云ふべからざるもの有りて存す、氏の之れを慨し之れを嘆するや久し、是れ何等名聞を好まざるの氏が、道會に出で、諤々の議を咨まざる所以なるに於いて、德光氏の抱負も又大ならずや、氏江差の人、文久三年三月を以て江差町に生る、本姓は小黑先考嘉右衛門氏と稱す、嘉右衛門氏の阿兄德光喜太藏家を爲して嗣子を得ず、大次郎氏の次出なるを幸し、養ふて嗣子と爲す、自來德光を姓とし以て今日に及べり、氏養父に従ひ余市に住して

より孜々として養父を援けて漁業に従事す明治十一年養父病没せられ、氏家督を繼承してより漁業の傍ら商業を營み、米穀其他荒物業を經す、氏の多能多才なる二業を經して毫も其の施設經營を誤らずして、年々の收利、德光家の基礎をして萬代不易ならしめ、遂に富豪多き余市の地に於いて、屈指の富豪として知らる、現在を來せり、斯くして氏は家を爲し産を興すや、力を公的事业に盡し、余市町の摸範町村として知らる、の完備を來せしもの氏に負ふ處少なからずと云ふ、殊に力を水産上の發達に漲き、卅三年漁業組合頭取に當選し、卅六年余市水産組合長に當選してより組合事業の一として、メ粕製造荷造の検査を勵行したるの一事は、余市郡水産家の等しく多とする處たり、氏年々凶漁の水産の發達を妨ぐる大なるを嘆し、メ粕製造荷造の検査を勵行し、海産物市場余市メ粕の聲價を高めんを期し漁期來れば斯道の専門家を招聘し、メ粕製造の良否を品臨し、其の検査を勵行せしかば、果然余市メ粕をして海産市場噴々たる聲價を保たしむるの聲譽を來せり、其の他鱈の改良に、鱈大謀網の獎勵に、將た漁業家に對する副業の獎勵等、比年の不漁に拘らず余市郡の漁業家多くは其の打撃に平然たるもの氏の組合長として畫策宜しきを得るの結果に外ならず、氏又力を農耕の業に盡し、赤井川農業合資會社を提唱し、大地積を得て、團體移住者を移し、着々成效し、赤井川村の開發氏の力又多きに於いて德光氏は眞に傑中の傑たらずや、吾人は德光氏の多才多能に服するものなり男子出て、は一道の道政に參與し入つては一郡の生産發達に力を盡す、男子の面目德光氏に至つて始めて完からずや。

●猪俣安藏君

(余市町
漁業家)

猪俣家は余市の豪族なり、余市の名を知る者にして、猪俣家の聲名を知らざるの人なく猪俣家を知るの士にして、余市を知らざるなし然り猪俣家は富豪多き余市郡中の大富豪にして、聲名實に余市郡に傳へらるゝのみならず又七郡地に傳へられて嘖々たり、山碓町街頭巍然たる宏壯なる建物の、猪俣家萬代不易の事實を語るを見るの士、誰れが猪俣家創業の其の偉なるを連想せざるものあらんや、況んや猪俣家の資産の一代にして興されたるを聞くに於いて益々其の偉なるを想ふべきなり一渺たる行商人より身を挺したる先代安之丞氏の今日の猪俣家を爲したる歴史を尋ねれば是れ立志傳中のローローなり、英雄は天之れを生ず、後人學んで得べからずと雖も、安之丞の堅忍自重不拔の意氣、不撓の精神に至つては、後人學ぶべく、採て以て後昆に教ゆべきなり、若し夫れ後人の余市史を編するものあらんか、巻頭を裝ふる士は蓋し猪俣安之丞氏歟、吾人は殊に氏を傳して趣味を感ずるは安之丞氏の令閨さん子刀自の賢明なる事是れなり、大なる成効は多く賢婦人の援助に待つてふ至言を事實にしたるさん子刀自、安之丞氏幾多の失敗困憊裡、其の慰籍者はさん子刀自なりしなり、窮乏裏克く家政を整へて安之丞氏をして後顧の憂なからしめしはさん子刀自なりしなり、已に産を爲す内家政を處理し財政の調度を圖り好く子孫を教育せしはさん子刀自なりしなり、安之丞氏の没後猪俣家の柱石となり、猪俣家の今日を來さしめつゝあるもさん子刀自たりしなり、刀自今や老を告ぐると雖も、其の鏗鏘たる余市婦人會長として

余市婦人を指導し、佛を信して喜捨に篤く、余市の西本願寺派たる大乘寺法龍寺乘念寺の寄進其の半ば、之れを刀自の手に待つと云ふさん子刀自眞に傳ふべきなり、是を聞く先代安之丞氏は新潟縣刈羽郡岡川町の産と、壯齡廿二歳にして余市に航し、さん子刀自を迎へて一家を爲し、鮮魚輸出を企つ、不幸風波の爲め輸送船全部を失ひ、大打撃の許又起つ能はざるの傷痍を受けしも安之丞氏屈せず、身を挺して越後國産品を行商し、風雨寒暑意に介せざるもの、如く精勵多年家兄定吉氏安之丞氏の堅忍苟くも辛勞に撓まざるの意氣に腹し、四千金を貨與して資本金たらしむ、安之丞氏多年貯ふる處に資を合し、直に海産商に従事す、是れ猪俣家の今日を來したる端緒たりしなり、自來安之丞氏の炯眼着々商機を逸せず年々巨利を收むるや、直に又漁業を經營し、遂に嚴たる家礎を築き成せり、氏や自己の成効と共に力を公的機關の設置に盡し、明治十三年已に余市に電信局を設けしめしか如き一に氏盡瘁の力たるなり、其他余市銀行の設置の如き、將た余市開墾株式會社の創立の如き盡く氏の力に依らざるなく、余市の地の夙に其の名を全道に知られたる安之丞氏の力多き結果たらずんば非ず、斯くして氏は富豪として余市の天に立ち、事の苟くも余市の發達に關する事業の設備は、又毫も其の財と力とを吝まず、氏の已に白玉樓中の人となれる今日尙ほ威名の嘖々として傳へらるゝもの以て氏の人格を偲ふべきなり、現代安藏氏は安之丞氏の令孫たり、明治十八年呱呱の聲を擧げ長して新潟縣商業學校に入り、同校を卒業するや歸家父祖の業を繼承し嚴として家門を辱めず猪俣家好嗣子ありと可謂也。

●中村源兵衛君

(余市町 山碓町)

余市前々町長中村源兵衛氏、勳七等中村源兵衛君、氏は余市一派の紳士なり、漁業家として、將に農耕家として、抑も又幾多銀行會社の重役として、聲名七郡の地に噴々たり、余市の町政の、模範自治を以て知らる、中村氏町長時代の治蹟、此の名を博せしものにして、余市町民は永く、氏の町政に盡せし功勞を忘れざるべく、氏の名又余市の地と共に不朽なるべし、中村氏嘉永四年二月を以て檜山郡江差に生る、家代々漁業家たり、氏明治六年居を余市に轉じ、依然として漁業を經し建網敷統を督す、明治十四年郡總代に擧げられてより、余市郡漁業組合副頭取、水産物營業人組合納稅委員、余市銀行監査役、小樽銀行取締役赤井川開墾株式會社取締役、余市町會議員、札幌聯隊區徵兵參事員、小樽稅務署所轄内所得稅調查委員、余市水産組合副組長、余市町長、北海道銀行監査役等に歴任し、明治三十七八年戰役の功に依り勳七等端寶章を授けらる、中村氏は此の如き幾多重責あるの任に歴任し、余市の代表的人士として、一人氏に服せざるなし、其の余市町長として卅七年就任するや、町民の悅服、氏の施設、爰に模範町村たるの實を擧げ、余の威望、支廳長と雖も如何とも爲す能はず、偏狹なる時の支廳長森重某の氏の威望を惡むや、氏慨然其の職を去れりと雖も、余市町政の何等の壓迫を受けず益々模範自治の實を擧げたるもの、一に氏の施設宜しきを得たる結果に外ならず、余市町民の中村氏を多として、其の人格を湛ゆる故わりと云ふべく、中村氏の名聲鮮甚たる寔に偶然たらざるなり。

●山本喜代松君

(余市町 山碓町)

余市郡内に於ける實力ある少壯有爲の士を求む、人皆言ふ山本喜代松氏ありと、萬目に見る處、十指の指す處、山本氏眞に是れ少壯有爲の士、家に巨萬の産あり、爲さんと欲して爲されざるはなく、畫せんとして、畫せられざるはなし、而かも氏の如何に炯眼にして事業經營の敏なるかを見よ、吾人は氏の漁業家の出を以てして、亞米利加歸りの新智識本業の傍ら牧畜業を經したるの敏に服す、而して規模の大、余市郡有數なる牧場なるに至つて將來發展の隆期して待つべきなり、思ふに山本家や先考福松氏創業の難に成効し、現代に至りて守成の難に成功し、更に發展したる者にして、尋常富家と自ら其の選を異にす先代福松氏は檜山郡の人、弘化四年正月五日を以て上の國村に生る、十五歳祖父庄五郎氏に伴はれて余市の地に漁業に従事してより、年々余市に出稼し、廿二歳余市の地に轉住す福松氏英邁にして大志あり、區々たる刺網漁業者に甘んせんは其の志に非ず、余市に永住の居を卜むてより辛苦精勵零細の資も苟くもせずして他日雄飛の基と爲さんとし勤儉貯蓄以て其の志を養ふ、明治十年多年の辛苦空しからずして遂に行成網一統を經營するの機運を來せり越へて翌十三年又二統を増網し、其經營の巧、年々の收利多く、山本家の基礎漸やく成る而かも福松氏、小安に甘せず益々經營の歩を進め、廿二年三統を増網し、着々其の功を收む、廿八年利尻郡本泊に角網三統を購ひ之れを經營すると同時に、居村の漁網も盡く角網に變更し、爰に太漁家たるの實質を爲し、大泊の騰貴と共に巨然たる産は興され

たり福松氏又力を公共事業に盡し、明治廿八年總代人に選ばれてより、改選毎に選舉せられ自治制施行と共に町會議員に當選し名聲籍甚たりしも、惜い哉天年を此の勇邁なる福松氏に假さず卅五年十二月病んで東京病院に没せり、喜代松氏英邁此の如き父の膝下に養はれ、幼にして穎悟、余市高等小學校を出つるや明治卅年直に笈を擔ふて東都に出て海軍中學校に入校し在學二年不幸腦を病んで歸郷し札幌に出て根守病院に入院し治療を得て卅三年九月札幌農學校林科に入學し、大に學ぶ處あらんを期せしも、不幸又も病魔の犯す處となり退學の止むなきに到る、去れど喜代松氏の雄圖之れが爲めに耗せず更に亞米利加原野に牧畜業を視察せんを企て、三十四年七月亞米利加に航し加州に留學し研鑽の傍ら牧畜業を視察し、啓發する處少ならず、而かも不幸は依然として君の身邊を去らず越えて卅五年十二月天涯異郷の客舎慈父病没の飛報に接せんとは氏の痛恨想ふべきなり、卅六年二月歸朝し、卅六年十二月函館要塞砲兵隊に入營し在營三年、四十年三月先考の遺業を繼ぎ漁業に従事するの傍ら、全力を畜産業に濺ぎ余市澤町奥に巨費を投して土地を買収し牧場を經營す、現在有する處の内外國種牝牛二十一頭種牛二頭牝馬一頭たり、別に養鶏業を兼ね着々豫定の計畫を遂行し將來の蕃殖を畫しつゝあり、喜代松氏年齒尙壯にして而立の齡に達せず、而かも其の烟眼なる、本道漁業の將來を慮り、其の不漁に備へんが爲めに牧畜業を経し將來の發展を畫す、何んすれど夫れ遠識にして先見の明に富む斯くの如きや福松氏の後繼者として喜代松氏あるもの謂つべし此の父にして斯の子ありと歎すべき哉。

●小黒濱藏君

(余市町沖村
湯内漁業家)

余市殿様の稱ある小黒濱藏君、大資産家として將た大慈善家として、克く散し能く恵む其の殿様の稱ある偶然にあらざるなり、是を聞く小黒氏經營の湯内の漁場や、世に千石場所と稱せらるゝの好漁地にして一統千石を漁すべく、如何なる年と雖も、不漁に見舞れたるの事實なしと、小黒家の資産年々に膨脹したるもの、寔に此の如き金庫を有するか爲めなり、而して小黒氏の慈善事業に萬金を散して吝まざるもの、吾人は眞に小黒氏心事の玲瓏殊玉の如く清きに敬服するもの也、氏安政三年十月を以て檜山郡五勝手村に生る、先考山藏氏勇邁にして又義侠家を以て顯はる、文久年間余市沖村に小黒藤右衛門氏の漁場を監督せんか爲めに移住してより、精勵大に時人の稱揚を博す、明治十三年獨立漁業に従事してより年々大漁を博し收利少ならず、明治十八年由藏氏病没せらるゝや濱藏氏起つて遺業を繼承し、同時に業務の大擴張を行ひ、着々經營の歩武を進む、積善の家餘慶あるものか抑々又先考由藏氏の餘德に據るか、一ヶ年として不漁を來さず、年々の大漁一郡克く氏の漁獲に及ぶものなきに至る、氏更に利尻に二統を新設し居村經營の網敷を合して十餘統の多きに達し、年々の純利三萬金を下らざるに於いて小黒家の富有故ありと謂つべきなり然れども氏か年々公共事業慈善事業に散する金額も又多大なるのみならず小黒家の一門にして氏に因り衣食するも數戸を算すと聞く氏又余市町會議員に列し、町政に參與して名聲高く、人皆呼んで余市の殿様と爲す然り氏は確に余市殿様たるの資格ある人士なり。

●小黒市藏君

(余市沖村湯内漁業家)

小黒市藏氏は小黒濱藏氏の長子なり、明治十八年沖村に生る、市藏氏富有小黒家に生れ所謂銀鞍白馬の貴公子たらんとするも、將た當世ハイカヲ的の生活を爲さんとも恐らく意の儘たらんも、氏が天賦の性格は、父祖傳來の資産を力とするを屑しとせず、力を水産の發展と魚網の改良とに盡し、漁期來れば身を漁夫の群に投じて漁撈に従事し、又身の富家に生れたるを知らざるもの、如し、何んぞ其の心事の偉なるや、氏十六歳にして仙臺商業學校に入学し、螢雪の苦四星霜、十九歳優等を以て卒業し直に歸郷父業を援く、蓋し氏の商業學校に入りたるもの漁業家と雖も魚類を製作して販賣するの限り、商業上の智識なからざる可らずてふ信念に基すと、達眼と云ふべきなり、斯くして氏は漁村の人となるや、實地に當りて着々漁業上の智識経験を積み啓發する處少なからず、鯉漁の年々不漁に陥れるに對し、採々以て不漁を補填するに足るの漁業なからざる可らずと爲し、鯉漁を企て、大謀網の使用を試みしも失敗に終れり、氏は此の失敗を以て、漁夫の不熟練、並ひに大謀網の網口に欠点あるが爲めなりと爲し、之れが改良を企て更に又試用せしに果して好成績を得たり、蓋し本道漁夫は江差地方の片潮流に教養されたる者多く、余市地方の如き潮流急激なるに處して之れが應用を爲し得るの才なし是れ氏が大謀網網口此の改良に腐心せし所以なるに於いて、市藏氏は純然たる水産改良家にして又發明家なり、新進の智識と、年壯の銳氣とを以てす、氏や將來の好水産家、小黒家好嗣子ありと謂ふべきなり。

●猪俣雷道君

(余市町中村漁業家)

猪俣雷道君は余市漁業界の新智識なり、漁業家としても有爲の人材として知られ、將た余市の豪族猪俣家の別家として重せられ、興殖資産、門地此の三者を以て噴々たる名聲を馳する余市郡の地、獨り君あるのみ、思ふに雷道氏の今日あるもの、氏の卓絶せる識見の力にして、氏に對しては必ずしも其の門地を云ふの要なし、寔に門地の高きに依りて、産を爲し名を爲したるにあらざればなり、吾人は本道の漁業界、其の漁業家の多くの舊套に眠り新智識ある新進家の少なきを嘆する久しきものなり、焉んぞ知らん余市水産界に有爲の材雷道氏を見んとは、本道水産界の爲め意を強ふせずんば非ず、雷道氏本姓は井上、明治十年を以て忍路郡忍路村井上家に生る年齒僅に入歳、越後國刈羽郡宮川町猪俣家に養はれて嗣子となる、小學校を出るや、直に中學に入り、更に笈を東都に擔ひ、早稻田専門學校に入校し、螢雪の苦を積み優等を以て同校を卒業し、同窓の多くは仕官し若しくは會社に入れるに拘らず、氏は實業界に實務を擧んを期し、直に郷里に歸り、同志と共に勸業會社を組織し、機業に勸農に殖林に産業の發展に貢献し、名聲籍甚郡會議員に推され、其の他幾多の公職を帯び、頗る聲名を郷黨の間に馳す、明治卅九年余市町大字沖村出定平に移住し猪俣家の別家として漁場を督し、漁網數統を経營す、氏の新智識を以て漁業に臨む實地の経験を積むと共に、經營益々歩を進め年々の漁利少なからずして大に水産物改良に爲すあらんを期す、氏たるもの本道漁業界の爲め自愛せざる可らず。

●笠島義雄君

(余市町)

笠島義雄氏は余市の名流なり、否な眞に名流として知らるゝのみならず、余市の元老として威望及ぶもの少なし、由來余市の地たる所の開發の古き丈け夫れ丈け名門名流に乏しからず、時に町政に對し意見の杆格を來すが如きの時、各々執つて相譲らず、之れか裁決又頗ふる難し、而かも笠嶋氏の威望隆々たる氏の裁斷する處、多くは異議を云ふものなし、然元老として余市に重せらるゝ此の如くに篤し、蓋し氏の資性謹嚴公直にして、毫も私心を挾まざるに依る、余市の地の自治制施行後摸範町村として知らるゝに到りしもの、氏等の如き人士五四を數ふるに依る、笠島氏の力も又偉大なるかな、氏松前の舊藩士、嘉永四年を以て江差町五勝手村に生る、先考は小黒嘉右衛門氏にして、氏其の次出たり、七歳にして笠島家に養はれて嗣子となり、笠島を姓とす、明治十一年居を余市に轉じてより、徳光家の後見を爲す十八年間の久しきに亘れり、明治廿九年廻船問屋を開始し傍ら海産商を兼ね、更に漁業を経す、年々の收利、巨萬の財は積まれ、其の公共事業に盡し、余市の發達に貢献したるの功は元老として威望並ぶもの少なき今日を來せり、令息貞治氏は明治十四年の出生、札幌農學校に入校し同校を卒業して農學士の學位を授けられ、東北農科大學助教諭なりしが、余市町長其の人を缺き、後任の選定、町會議員を二派に分れしは、事漸やく選定難に陥るや、衆議忽ち貞治氏を町長たるに決せられ、貞治氏現に余市町長たり本道町村多しと雖も新進の農學士を町長に仰く獨り余市の地あるのみ笠島家の榮可想也。

●横濱竹藏君

(余市町)

少壯にして有爲、漁業家としては、其の經營の巧を稱せられ町會議員としては余市町會一方の雄として重せらるゝの横濱竹藏氏、吾人は横濱氏の少壯の身を以てして、余市に知られ、余市に重せらるゝ此の如きに服するものなり、思ふに少壯にして人に畏敬せらるゝは難し古人も又曰へり少壯名を爲すは一の不幸と、蓋し慢心其の逸に安ずるを戒めたるもの而かも横濱氏の余市に起つ、謙讓克く衆に下り、博愛下に接し、而して好く爲し難き名をなしたるに於いて、氏の人格の偉なる想察すべきなり、横濱家の先代は檜山郡江差の人幕政時代より余市に出漁し、年々之れを繰返せしも、明治二年漁場受負の制度廢せられ各人自由に漁場を得るに至るや、直に余市に移住し以て漁業を経す、去れど當時其の力の微なる、一刺網を経するに過ぎず、然れども氏先考の勇邁なる、其の不撓の意氣を鼓して將來の發展を畫し年々の收利零細の微だに苟くもせず、辛酸十餘年、遂に建網を營むの隆を來し動すべからざる横濱家の基を樹つ、斯くして年々の收利擧げて之れを擴張費に投じ數年ならずして建網數統を経する大漁業家たるの位置を贏ち得たり、竹藏氏經營の巧と才と是れ先考の衣鉢を傳ふるものならずんば非ず竹藏氏明治九年を以て生れ、幼にして敏捷諸般の學を修め、長じて父業を援け漁事に精通す先考没後依然として經營を怠らず、着々其の歩を爲し横濱家の名益々籍甚たり明治卅八年町會議員に選舉せられてより、其の選を渝へず現に其の職にありて町會一方の雄として重せらる氏の前途も又多望なる哉。

●佐藤與助君

(美國郡漁業家)

北海水産界幾多の名士に乏しからずと雖も其の名の不朽に傳へらるゝの士を求むるに到つて誰れか人材の缺乏に長嘆の聲なからざらんや、而かも積丹半島地、二個の俊傑を去嘯せしめき。一は角網の發明家故齋藤彦三郎翁、他は水産改良家として知らるゝ、美國郡の佐藤與助翁たり、吾人は佐藤翁の本道水産界に名を馳せ其の雄を以て知らるゝの餘りに籍甚たるを怪まざるなり、大漁業家は乃ち是れあり、大資産家は乃ち是れあり、大經營家は乃ち是れありと雖も、等しく漁業家中水産物製作の改良進歩に腐心して功勞多き佐藤翁の如きは乃ち稀なるに於いて、翁の名の噴々たる誰れか之れを怪むものあらんや、漁業家として翁は只た美國の地に漁業を經し、更に樺太の地に漁業を營み、身は美國町會議員たりと云ふに過ぎずと雖も、過去水産物の改良に與へたる指導の功勞に至つては遂に没すべくもあらざると共に、永く我本道水産史に傳ふべきなり、其の他佐藤翁の漁夫に同情し、漁夫を優待し其の方法を事實に講じつゝあるの一事、他漁業家に對し、摸範的事例として示すべきなり、去れば漁民の翁を尊重するの甚だしき、一度翁に使役されたるの漁夫は、毎年必ず來りて翁に其の使役されんを乞ふて止まざるに於いて翁は漁業家の真髓を得たるの士と謂ふべきなり、吾人は本道漁業の年々衰退し、比年の凶漁益々水産改良の聲を高からしめ事實又、水産物の改良より漁業家の悲境を救ふの外良法なきの今日、翁の益々健全に水産物改良に熱中し、幾多の良法、其の指導を吝まざるを望まざらんば非ず。

●澤邊東開師

(余市町水産師)

余市琴平町に於ける永全寺は余市郡内最古の名刹にして其の建立實に文久二年たり、同年大庭祖英和尚余市町に一字創立の許可を函館奉行より得、越へて三年澤町に開基す、林家の先代長左衛門氏其の基礎を開き、二千五百坪を以て境内と爲す、自來法燈衆庶を輝し寺運益々熾んなり、明治十二年市街新築の時に當り、換地を琴平町一番地に賜ふ、其の移轉を了し、廿二年十月に及んで現時の堂宇庫院等盡く新築の工を終ゆ、同寺の隆運此の如く移轉新築の工を完ふせしは一に現住澤邊東開師の力にして其の功や真に偉大なりと謂ふべきなり、東開師弘化四年九月一日江戸に生る父は千葉縣の士族飯塚信義氏、嘉永五年十月上野國新巻村徳巖寺佛山和尚に就て得度す時に師僅に六歳、安政元年同國白井村雙林寺道錦禪師の常恒會に値て入衆安居し、佛山和尚に隨侍修學す、更に北海道福山龍雲院道堅和尚に隨侍修學し明治元年陸中黒石村正法寺良天和和尚の常恒會に於て立職し、同二年十月龍雲院花堅和尚の室に入つて嗣法し、同四年十二月一日余市永全寺に住職と爲つてより今日に及べるものにして遠近師の高徳を仰がざるなく、善男善女の歸依頗る篤し、師今や高齡に達せりと雖も鏗鏘として意氣壯者を壓し説教に講話に其の善智識を教へて倦まざるを以て師に渴仰するもの益々多く、永全寺の法燈光り益々炳に、小樽支廳管内七郡地に於ける古刹として其の名益々高く、一人師に心服せざるなし、永全寺の今日を來し、寺門の益々隆なるもの、之れを東開師、一人の力なりと云ふも敢て溢美の言に非ざる也。

●金澤玄外師

(余市町大乗寺住職)

余市大川町に於ける大乘寺は、金澤玄外師の建立せし曹洞宗派の寺院なり同寺は始め曹洞宗説教所と稱せられ、微々たる説教所に過ぎざりしも主任金澤玄外師熱心布教傳道に盡して奮闘精勵幾多の困難に堪へ、其の熱誠は遂に衆庶を動かして、善男善女に歸依多きと、余市附近農村の發達戸口の増加は、茲に信徒の増加となり、幸にして百戸以上の檀家を得たりしかば玄外師は説教所總代人廿有五名と協議の結果、茲に寺號名稱の必要を熟議し、卅六年春本堂建築に着手せしむ、日露の開戦は事業中止の止むなきの不幸となり、時局の終熄を待ち、平和克復と共に直に建築を續行し本堂、庫院、玄關盡く新築の工を了し、卅九年十月九日金龍山大乗寺の公稱認可を受け同月十七八兩日施主猪俣さん子より本尊釋迦如来文殊大士普賢大士三尊佛を奉納せられて盛なる入佛の祝典を施行せり、本山建築に要せし費額八千圓餘盡く檀信徒諸有志の寄附に成れるに於いて金澤師の高徳も又偉太なるかな師明治元年四月廿日を以て、肥前國南高來郡小濱村に生る、明治十一年十月同郡西有家村龍泉寺住職豊田無著師に就て得度し、十八年九月より廿一年八月迄越後龍昌寺前住職田村大機師に隨侍行脚の証明狀を得、廿七年余市郡琴平町永全寺に安居し翌廿八年八月大川町に曹洞宗説教場を創立し、苦心慘憺幾年の辛勞衆庶の歸依を來し、遂に大乘寺を建立し、四十年四月曹洞宗務院より可法地の公認可証を得同日大乘寺住職たるを認可せられたるものにして、玄外師に高德衆庶の歸依を得ずんば焉んや大乘寺の建立を來さんや偉なる哉。

●齋藤慈明君 (法華寺住職)

師は青森縣南津輕郡黒石の産、齋藤榮太郎氏の四子たり、齡十歳にして佛道に歸依し、當時弘前本行寺の住職たりし協日熙僧正に就て教化を受く、超へて明治十六年第十二區秋田中教院に師事する歳あり、一意専心宗旨の玄理を講究して倦まず、更に進んで東都に上り専ら力を布教に致し、京都岡山等の各地を變歴し後法學館寮に學ぶ、偶々京都柿本町一音院に招致せられて住職となるや夙夜經文を誦して教導に盡し、草莽の民衆を導いて安心立命の道を開く、されば宗下に群る者多く、法燈燦然として寺門日に隆盛を極むるの折柄、三十一年檀徒の歓迎を受けて余市に移り法華寺を托さる、爾來同寺の爲め精勵大に檀信得堂宇に修築を加へ、今や寺名噴々として郊外に振ふ、師また識博く、學和漢に通じ殊に漢詩を能くす、今左に君が物せられし一節を録して其風韻を偲ばん哉。

訪征露從軍松森上人

投鉢高僧從遠征。

丹心許國三軍士。

洋水浪收浮短艇。

誰知露虜遁逃後。

山川踏破幾千程。

誠意捧君百万兵。

奉天雲盡望長城。

敢吊忠魂答 聖明。

●**即信寺龜谷教惠君**(余市町) 即信寺は余市に於ける尤も沿革を有す、寺門は明治四年十月寺號公稱を受け三十有餘年の星霜を閱す善男善女の歸依信賴益々加はり法燈燦然として輝く、先代住職龜谷自門師越中國下新井郡新庄の人、師錫を當時に駐めし時は恰も微たる一廢庵に過ぎざりしも師慨然として起て之が回復の難局に衝り、治蹟を擧ぐ當代の住職龜谷教惠師安政三年山形縣東村上郡成生村に生る、廿年余市の人と爲り、廿六年七月より現寺に住職たり、萬節卓操にして高望高く人衆の渴仰する者、愈々多し。

●**寶隆寺久野良周君**(余市町) 蝦夷と呼ばれし文政年間の創立に係るを以て本道を通じ尤も古刹の名あり、住職は開祖仙海氏より君にして三代、累代の高僧精意布教に盡瘁し、寺門噴々として昇り法燈衆庶を輝して宗下に群る信徒愈々多く現時二百有餘の檀徒を有す、師は大和國吉野郡下市の人、安政二年を以て産る、明治八年來道余市に留つて以來十五年現寺を托さる、温厚にして宗教百般の識を究め夙に高德の名あり、今境内數百株の林檎を植ぬ、傍ら栽培に心を傾けて實るを樂しむ、嘗て開拓使、苗木を海外に仰き這寺に配與したるものなりと、而して歳々生果五六万斤を超ゆる者、累代の住職の丹精に依て然る也、本樓は四十年八月祝融に見舞れ、現今之が建設の計畫中なりと云ふ。

●**山つ印大村由太郎氏**(余市町) 西海岸に於て最も古參の一人、土地と盛衰と共に依然漁業界の泰斗として衆望を負へるを大村由太郎氏と爲す、先づ土地の沿革を知らんと欲せば君の事蹟を見る方備にして其正確を失はず君は檜山郡石崎村字萱吹の産、年十歳

にして余市に航し、爾來星霜一日も倦む事なく朴直にして徳望並ぶものなし、今や古稀の齡を超ゆる事一歳、其壯豪なる壯者を凌ぐの慨あつて存す、聞く君の父丑太郎氏亦六十有餘の壽齡を重ね、今尙山水を友として老後を養ふ、人と交つて温厚篤實、好んで公擧の業に盡瘁するもの多しと稱す、曠もしい哉。

●**丸又キ印奥寺徳太郎君**(余市町) 余市の名望家として亦屈指の漁業家として指を屈する者は先づ第一に君を推さざるべからず、君は慶應元年の生れ江差の人、明治初年大志を抱いて余市に居を占め爾來幾星霜、克く衆庶の名望を博す蓋し多才機敏にして決斷の勇に富み慈善公共の擧は其好む所、人と交るに仁あり禮あり人と約して信あり義あるの長所に敬服する所以に外ならず、常に營む所肥料販賣にあり。

●**角大印井上林次君**(余市町) 少壯にして俠骨あり、達識にして同情の義に厚き君は、公共の事擧に盡瘁し所謂強者を挫て弱者を援くるの美風を有するの人、嘗て角三猪股の支配人として令聞を博し節儉を守り温良にして街らはず四十一年獨立して漁業を營むに當つて衆望愈々厚く比年好漁よく余慶を遺して今日の地位を占めらる、君の郷土は近く余市郡仁木村にあり舊姓を工藤と名乗りしも故あり現姓を繼ぐ、嗚呼君たるや土地の重鎮として功績を擧るのみならず、余市の爲め誠に嚮望すべき有爲の人材たるを失はず。

●**余市病院**(余市町) 余市港に於ける病院にして宏壯の美觀を撰まば第一に余市病院を推ざる可からず、一匙の閃く所九死の病者を厄褥の内に起たしめ人命を救護する者幾

万人、蓋し當院治術の精妙に頼る、院長與水榮雄君温厚高潔の美風を備ふ、郷里は山梨縣北巨摩郡安都王村の人、安政二年代々醫業の家に生れ幼にして出藍の名あり、後醫學の淵奥を極むるに及んで廿一年、招致されて余市公立病院長たり、卅四年是れを私有に改め益々好評噴然たり、副院長久保忠資君亦職に篤く學博く名高し。

●高畑道賢君(美國町醫師) 名高く、識博く、術に汎く、經營を有するの醫師は先君なるべし、資性温良恭儉にして高潔の風に富み、患者の信頼を厚す、君は會津若松の藩士、弘

化二年の産れ、今や古稀の齡を重ねるも壯者を凌ぐものあり、明治十年札幌に渡られ、後開拓使時代に於ける古平公立病院に在勤三年、招かれて美國派出所に轉じ、公擧に盡瘁す地方の人士徳望を慕ふもの愈々多く、遂に公立病院たらしめて在る事十年、美國に移り、明治廿三年斯業を開く、今や遠隔百里の地より當院に診を乞ふもの益々倍し、日に盛大を加ふと傳ふ。

●一魚印共親舎(余市町大川町) 由來本道は冬期を通じて魚菜鳥類等の缺乏を告る者往々あり此機に乗じ暴利を致さんとす不徳奸商の輩出を慨し創立せられたる者、即ち共親舎也、着業は明治三十年、長に北海實業界の泰斗阿部勘五郎氏を推す、君は地方有力の士頗る大志を抱き非凡の才を備ふるの人、其經營よろしきと、其基礎の堅固なる本道有數の裡屬するものあつて存す、蓋し衆庶の歡迎のうちにあるもの十有餘の久しきに在り。

●共成株式會社余市出張所(大川町) 是は之れ廿六年五月小樽本店を分離して創

設せられたるもの和田幸輔氏現支配人たり、而して其名聲高き所以の者蓋し氏の人爲に依らずんばわらず氏明治十一年蝦北樽港に生聲を擧ぐ長するに及んで樽港商業に適するに推知し實業の人たらんとして共成會社に入る、爾來の勉勵は言はずも哉瀧川、札幌を轉々して再び歸社後卅六年余市支店開設と共に遂に擧げられて支配人と爲る、其人材や想ふべき也

●曲吉柏崎酒店(余市町大川町) 銘酒「二見」「朝日川」を店頭飾つて敢て誇らず、徐ろに算盤を弄するの人は店主柏崎源太郎氏なり、店舗は十七年來の星霜に堪ゆ、亡父吉藏氏の經營に爲りしもの、吉藏氏秋田縣由利郡松崎の人、十二年秋單身本道に渡り、克く同業を風靡して令名を謠れしも卅七年遂に他界に入り現主代つて經營するや訓して曰く誠實、勉強は商界の虎の巻なりと其心や嘉すべし。

●大平成徳君(余市町山田村) 唯見る蕭麗たる一老士、一度談すれば風生、壯者を凌ぐの概あるもの是れ成徳君大平氏なる乎、郷里は秋田縣由利郡代々龜田の藩士に生る、遠く安政四年の人たり、其長するや薰陶に志し郷里小學に教鞭を執る事多時、後十二年遠く本道の人となり田園に塾す、今や古稀を超ゆる三、却て日に健康を加へ、汲々果樹の栽養に従ふ其業や明治十四年時の開拓使遠く海外より苗木を輸入して獎勵せられたるに起し連綿として今日に及ぶ、現下一歳の生産實に數十万斤を超ゆる者、偶然に非らざる也。

●吉川病院(余市町大川町) 國手として院主として名望高く地方に頗る信頼を博し克く仁術の所以を知るの士は吉川省三君なり、君は函館の産、明治十年の生にして性極めて温良幼

にして斯業に志し、三十二年名古屋醫學專門學校を卒る、其醫界に名を知られたるは翌年
余市公立第二病院副院長として患者に接せしに因り、緻密の診療敢て病根を誤るなく、巧
妙の手術克く病根を斷つ、超へて翌春、此地に共濟病院を創立するに當つて其信用愈々昇
る後之れを吉川病院と改め、偶々日露の役あるや、卒先三等軍醫の故を以て砲煙彈雨の間
に往行し、其歸るに及んで今尙院長たり、副院長今村省哉氏亦斯道に精通し技能亦斯道に
冠たり明治八年愛知縣岡崎に長じ、性極めて質朴和順、小兒も敢て探脈を辭せずと云ふ。

●高山多吉君(余市町 山田町)

氏は殖産に熱く耕業に従ふこと多年、初來山田村に居棲し舊
家を以て推さる、而して實志に富み徳望を備へ嘗て本道特産たる苹果の栽培に志し、或は
植む或は移し心碎焦慮幾星霜其改良に盡瘁し現今一ヶ年の生産にして十萬斤余を算するに
至らしめたるの功や當に此地のみならず本道果樹業界の名譽たり息吉五郎君亦父の性を享
け幼にして其道に腐心し今や長者を凌ぐべき手腕を有すと、君にして此息あり家運の繁榮
を來す、芽出度しと云ふ外他に言なし、萬歳なる哉。

●定方醫院(余市町)

名聲赫々として世に傳る定方醫院は院長定方錦郎氏か其職に熱
く其學に博く其術に尤も長じたる徳望家なるに因る、而して君は雲州の産、世々松平の藩
士を以て名あり、其醫界に現る、や斯學の蘊奥を極め治術に熟達し醫界稀に見るの人材を
以、目され病者の診を乞ふもの門前に市を爲す、然して君に慨氣あり薄命を憐んで自ら樂
む、宜なる哉當院の日に増々隆大に赴くなる事や、氏の履歴を擧げば實に下の如し。

明治廿五年東都に出て雲州御殿醫北尾某の門に入り修むる事二年、齡二十一才にして醫
術開業試験に合格し開業醫となる、卅六年本道に航し増毛病院に聘せられ勤務、後余市
十全堂醫院に聘せられて院長となり、四十年八月を以て開業す、尙軍籍にありては三十
一年海軍省軍醫候補生を命せられ、三十二年佐世保病院に勤め、三十三年正八位に叙せ
られ、同一月海軍省軍醫に任せらる、因に君は産科婦人科に獨特の技を有するとなり。

●伊藤隆治君(余市町 山田町)

君は壯少にして識博く學また高し、故に常日人に推されて余
市青年會長たりしもの多時其徳望愈々顯れ業に篤く敏活なるは定評の存する所、會津藩士
の家に生れ、六年にして産聲を擧ぐ廿七年同村に移住し、亡父の遺業を繼承するに及んで
専ら心膽を萃果の栽培に努め、今其生産收むる所、歳々數万を超ゆるものありと、而して
君は現に余市町會議員として又力を余市町の公學事業に盡し貢獻したる功勞尠からず。

●北一印照井鮮魚卸商(余市町 大川町)

店主照井正吉君は盛岡の人、正義と廉直と信義と
を以て商術の方針を過らず、營む所の商業は鮮魚卸商を主とし加ふるに蒲鉾、生繭の買入に
従ふ、余市廣しと雖も現今、君を措て他に肩を並ぶものなく、其販賣の手廣なる事、東京
信州鹽釜より秋田方面青森の間に取引し盛んに是れが需要供給に便ならしむ、蓋し今日の
繁盛を致したる所以は一に君か生命たる誠實勤勉の賜に依らずんはならず、聞く君か本道
に來航せられたるは廿一年四月にして、明治六年は生を享けられたる時なりと。

●三宅權八郎君(余市町 山田村)

君は代々會津藩士の家に生れ、弘化二年の産にして齡を重

ぬる事今や六十有五、明治五年郷里若松を去つて來道現村に居をとり、在る事卅有余年、地方第一の舊家を以て推さる、當初農を營んで山野の開拓に努め、後明治八年數多の林檎を移植して殖産を計り、近來更に善其の乳牛十頭を飼育し息君をして牛乳搾取業を經營せしむ、今や年々の收果四五万斤を超へ、財貨日に豊しと稱す、家運進達推して知るべし。

●曲丸印今兼次郎君(余市郡沖村字湯内) 君其營む處は水産業にして専勵勉強敢て他事を顧

るなし、資性到て温朴質素情深く事を聞くに其耳を澄し物を談するに實を口にす、正直一片の人として徳望高し、君の産地は青森縣北津輕郡小海村にして、來道以來水産業に従ひ今日あり。

●川俣友次郎君(余市郡山田村) 君は専念殖産を圖りつゝあるの人、早くも本道名産たる林檎の栽養に志し、明治八年來山田村に廣漠たる苹果園を起し夙夜精勵以て培養に他意あるなし、勉強は幸福の母、財殖は、産固く一家繁榮を極むるもの萬歳なるのみ、而して君は安政の産代々舊會津の藩主其生れたるは江戸の地、本道に渡りしは明治二年、超へて四年は君か現地に居をとりたるの時也。

●キ 印川内藤次郎君(余市郡余市町大平字沖村) 北地屈指の人望家の一人たる川内氏は温厚篤實にして好で公事に盡瘁するの美風あり、而して君は郷を對島國松嶋郡福山町大字炭津村に有し明治十一年の誕生なり、先代藤次郎氏は此地蝦北の時代より茲に漁業を營み衆望の推す所今日の基礎を築く、當代の主廿九年父の遺業を繼續し其名噴然たり。

●水野音吉君(余市郡山田村) 君は此地永住の人其名を知らるゝ古く汎し、慶應三年、秋田縣山利郡本莊に産る、明治十七年、大志を抱いて渡道するや先づ現地に居を占め、園内に林檎數百株を植へて栽培に余念なし、生果歳々數万斤を超へ苹果の純良他に類を見ず、余業の傍乳牛九頭を飼ひ牧畜に努力す、噫氏の如きは當地方の偉人を以て稱するの適當也。

●抱山忠印國谷商店(余市郡富澤町) 實業家として名望あり有力家として奇才に富む者は國谷忠治君の人爲也、明治三年秋田土崎港に呱呱の聲を擧げ、二十七年北見國網走に移る三十一年余市に居を占め、超へて卅四年の候海陸物産米穀荒物商を營むに及んで忽ち名聲を博し商機を映き信用を博し、其隆々日に倍し今日に到る、繁盛の將來想ふへし。

●山大印澤田醸造店(余市郡川町) 精勵懇厚余市第一流の商店を以て目さるゝ者を澤田醸造店と唱す、經營の主澤田信次郎氏は岐阜縣加茂郡伊深村の産慶應元年を以て生る、其長じたるの地は武儀郡勇代村にして剛毅温良よく其徳望を語る、本道に航して先づ養蠶に志し、後運送業に替へて余市に移り卅七八年間北鐵會社材料運搬の業を獨占し衆他の羨望を致したるも後之れを徳光組に譲り、卅七年秋這業を營む、釀すは日、月、星の三種の醬油、加ふに曙と名乗る味噌を以てす、爾來好評を博して遠近の注文絶ゆる事なしと亦宜なり矣因に令息精七氏は膽振國狩太村字大曲に百万餘坪の牧場を計營し三十余頭の牛を飼つて牧業に熱中せりと。

●佐藤三平君(余市郡山田村) 君は園を耕して苹菓の栽培に熱心たるの風流兒、生を享けた

るは秋田縣由利郡龜田の農村、慶應三年の産、廿三年同志相携へて山田村に移住、先進高山氏等と業を共にす、一度斯業に従つてより朝出暮飯一日たるも等閑に附せざるの概は、よく衆庶の範たるべきもの、今や歳々の收産にして五六万斤に超ゆる一事、以て其勤勉を知るに足る。

●曲利印吉川吳服店(余市町大川町) 開店必ずしも久しからずして克く聲價を博し十目の指す所、十目の見る所其令聲を謠ふ、其所以の者は蓋し店主専ら安値を旨とし産地を撰擇して以て顧客に酬ゆる故に外ならず店主吉川氏町會議員の要職にあり、此店將來の隆豈に識者に俟たんや。

●百瀬葉千助君(余市郡山田村) 君は會津若松の藩士、明治七年の産にして代々耨業の家に長ず、後青雲の壮志を抱いて本道に航し札幌農學校に入つて斯界の深遠を研め、今現に農學士の稱號を戴いて熊本縣阿蘇農學校に校長たり、然して家は母弟の在りて苹果の栽培に努めて倦まず、今や數万斤の收穫を得つゝありと、君か現地に移住したるは明治四年亡父を清三郎と呼び君は其嫡男なりと謂ふ。

●一山キ印本間支店(余市町濱中町) 其營む所海陸物産を以し誠實沈着敢て商機を過るなきの士は店主本間清志君なり、君の産聲を擧げたるは近く明治七年越后國北蒲原郡藤塚濱に産る、長ずるに及んで深く商機に通じ故國に戀々するを欲せず、廿七年志を樹て、本道に航し、當初小樽に留まる、先づ其業を色内町四十一番地に營み、徐ろに算盤を執る事九年

其繁盛日に加るを榮とし超へて卅六年現時の箇所支店を下す、今や販路の廣濶なる内地一般の地に取り引し公庶の信頼全く厚し、噫々頭角老骨を凌ぐとは君の謂也、其名望も亦偉なるかな。

●富永信三君(余市町字黒川) 君は本道の特産林檎を栽培して殖産を主業とする人なり、果樹は卅一年の植付に屬し、十年の星霜を経過せるのみなるも、繁榮日に倍し生果年に實る者は君か専念斯業の發展を希ひ、一日の如く倦まず以て努力せるの賜にして、前途の啓發期して俟つべし。

●山安印笹井安太郎君(余市郡大江村字山道) 君は新潟縣中蒲原郡白根町の人、呱呱の聲を擧げたるは遠く嘉永五年に屬し性温良恭儉にして高潔の風に富む明治八年來道の當初郷里に吳服類の供給を仰いて、江余の間に其令風を知られ、遂に余市富澤町に移つて是等を繼續したりしも、今は大江村字山道の地にありて林檎の栽培に余念なしと云ふ、而して其得る所年々七万斤の上に超ゆるとは亦偉業たる哉。

●曲カ印江田菓子商店(余市町停車場通リ) 營業に忠實なれば必ず隆し、隆盛なれば益々勉むるは商家自然の法則なり、店主源太郎氏は岡山縣赤磐郡竹枝村の人、安政六年の元旦を以て産聲を擧ぐ、夫れ其の生を偉傑秀吉と共に受けたるの君は、其來歴にありて一起一伏將に立志編中の人たるを失はず、當初官途に志し十有余年の星霜に満ち、後坂地にあり定期に敗る、茲に奮然と壮志を抱て津輕海峽を横切り先づ石狩に止り現業を執る、其經營する

事十四年にして不幸祝融に見舞れ、蹉跎落魄、其間幾多逆難に逢遭して益々其所信を堅くし超へて卅七年年余市に來りて一貫現業を繼續して今日の隆昌を見る、將に是れ好個實業界の摸範たるべきの人也。

●曲子印金子善太郎君(余市町 字澤町)

氏は余市地方土木請負業者中に敏腕を以て鳴る、人為廉正方直斯業に精巧緻密の頭腦を有し嶄新にして進取の氣象に富む久しく輾都にあり支應道廳等幾多有數の建物請負したる杯氣風自ら衆と異なる、氏や同業者の先進にして熱心斯業の改良を計るもの多時、其狀恰も此蜂の頭角を包むに似たり而して君の郷里は越後國西蒲原郡吉田町嘉永四年の産にして、本道の地を踏んでより三十有余年公私の工事氏に依つて竣工せられたるもの算ふべからず吾人は其適當の褒辭なきに苦しむ。

●十全醫院(余市町 大川町)

余市沿岸百里の地、噴然として名望高く、患者の信賴厚博にして屹然其名を恣にする者は名醫清井正慰君なり君明治五年の産、夙に笈を東都に負ひ、銳意醫界の研究に努め、業成りて慈惠院醫學專門學校を卒業するや診療の妙と手術の巧は忽ち名を千里に馳せ、後余市に移り住んで該院を開くや門前忽ち病者續々として踵を接し隆々今日に到る、君亦三等軍醫の職歴を有せり。

●角文印板垣文藏君(余市町 大川町)

君は万延元年九月一日を以て新潟縣中頸城郡谷湊村大字丹原村三番地に産る、明治十七年本道に渡來し當初小樽區稻穂町廿七番地松田直次郎方に店員たる事二年酒釀業に従事せしも後牛乳搾取業の前途有利なるを覺つて約五ヶ年の

間乳牛を借受くるの約を爲し余市に居を下して斯業を營む、當時此地に這業を爲す者なく君以て大いに期畫を起して發展を極むる事五年に及ぶ、後斯業を茲に企圖する者前後を通じて五名を出て、勢ひ貪利の競争を敢てしたりしも君は平然として意に介せず薄利一合一錢五厘の廉價を以て顧客の殖多からんを期す、遂に他輩及ばずして相斃れ今や君のみ連綿として廿有余年間斯業を連續し、其飼牛今や廿有三頭を算するの隆盛を爲せり將に是れ商業巧妙に興る者にして何乎、聞く現今同地方に同業を企つるもの數戸に及はんとすと、然れども君は依然として重鎮たり、余市第一流の舊業家として愈々名高し。

●丸一印凱旋堂龜山重吉君(余市町 大川町)

宮城縣牡鹿郡石ノ巻町の人龜山重吉君は剛毅活潑其笑ふ時は兒女も近付き、一度矛を執つて長空を睨めば鬼神も亦恐れしむるの概を存す曩には國家の干城と成つて征露の軍に變戦苦闘殊功を奏し、今は退ひて菓子業に吸々たり誰か以て偉丈夫たらずとせんや、今其事蹟を尋ねんに君の産聲を擧げたるは明治二年同廿二年適齡の故を以て卒先撰れて近衛歩兵第四聯隊に入營、直に昇進上等兵となり善行證を附せられ下士適任證を授けらる、後累々憲兵上等兵と爲り、宮城憲兵隊第四分隊に編入の翌年清國金州民政部付を命せられ清國に赴任、勳七等に叙せられて曹長たりしも卅三年退職の後余市にあり警邏たる事少時、偶々日露の後に召されて第二師團指令部に從ひ鎮南浦以北の各地に苦戦し、其克復するに及んで青色桐葉章を授け四百圓を賜はる、君か經營する凱旋堂は此故に名附られたるものにして繁榮を極むる亦故なきに非る也。

●一ヨ印鈞賀商店(余市町) 店主鈞賀與三八氏は越中の人、明治八年、氷見郡加納町に産す、其本道に航したるは廿七年當初來、現地にあり、米穀荒物海陸物産の業を經營してより十有余年、所謂取引上の深呼吸なる者を解して商略に通ず常に店員に誨ゆるに勤儉を以てし顧客に接するに溫容、二六時中店頭行客の絶ゆるなき、與三八氏か商機に巧なる一般を知るべき也。

●羽二生賢藏商店(余市町) 米穀商の先覺者として巷間に名聲を博したる店主賢藏氏は新潟縣佐渡の人、嘉永四年代々耕耨の家に生る、明治七年漁舟を驅して江差に渡り吳服太物の行商を營む事三年にして祝融に見舞はれ失敗し超へて十七年現時の箇所米穀荒物農産委託販賣業を開始す勤勉よく今日の繁昌を招致したるもの偶然にあらず。

●高野醫院(余市町) 院主高野正三郎君は舊福島縣一本松の藩士、明治四年郷里に生る、幼にして斯道に志し出藍の譽高く、三十年東都濟生學舎を卒る後招かれて盛岡病院にある事二年、更に福島病院に聘せられ、超へて三十八年區立函館病院眼科部長として在院中、再び東京橋宮下眼科病院に招かる、在る事三年院長代理たり、四十一年五月其余市に開業するに當り名望忽ち傳へられ、仁術の譽遠近に鳴る、君も亦國手なる哉。

●又キ印西村商店(余市町) 店主西村亥之次郎君は商事に厚く極めて溫厚 其産聲を擧げたるは近江國犬上郡南青柳村開出の地、所謂近江商人遺風を抱いて常に顧客を迎ふ、廿一年米穀荒物の業を開いてより人望尤も厚く今や選れて町會議員の職を帯ふも偶然にあ

らざる也。

●大印山中商店(余市町) 廉實勉強は中山商店の特色なり、商運日に榮へ顧客日に倍するの故は中山久吉氏の商品仕入に留意し精勵克く他に超ゆれば也、商品は和洋銅鐵打刃物農具一切を以てす、而して支店を大川町に占め更に度量衡器の販賣をも兼ねたり、されば擴張日に進む、此運を握有するの主人は甲斐の國北巨摩郡篠尾の人、耕耨の家に生れしも、自己の長所を覺るに及んで商道に入り、明治廿八年余市に來りて金物商を營み、今や繁昌其極に達し本支店共に常に顧客の絶ゆる事なしと云ふ。

●曲二印小林商店(余市町) 港中屈指の商業家の一人たる店主小林長太郎氏は溫厚篤實にして獨人望あるのみならず其名噴然たり其營業振の忠實なる他衆の比にあらざるもの商人として懇厚よく顧客の愛に酬ゆ、商ふ所の海産雜穀にありては言はずも哉特約販賣に係る日星肥料アルカリ肥料の如き其當初親しく農家を訪ふて懇々其使用の法を説明して需供に勉めたる結果、今日の繁盛を極むに到る、販路の廣大なる岩内其他に特約店を有し益々需用を加へ、更に企圖する所ありと云へば日ならず盛大に赴くべきや必せりと傳ふ。

●角ヲ印松井十次郎君(余市町) 君は地方に於ける土木請負業者の雄鎮たり代々斯業の家に生れ幼壯にして開拓使農業機械勸業科に學ぶもの更に工業科に修むる事五星期夙に出藍の名あり、長するに及んで斯界の泰斗として牛耳を執り設計に巧妙を極む、其余市に卜棲したるは拾八年にして當時大工職を營み松井親分の名遠近に振ふ、君亦消防組頭の

名譽職を帯ふる事數年に亘り公共事業に盡瘁せる事尠ならず、今や斯界の熱心家として信用厚く挽材販賣荷物運搬衛生組合等の請負等一手に占めつゝ、同業者をして轉た羨念に堪へざらしむる者亦君の手腕なる哉、而して君は富山縣礪波郡東蟹谷の産なりと云ふ。

●山龍印原田商店(余市町 車場通)

原田商店の名は夙に遠近に聞こへて盛大の者とす主人

原田槌三郎氏斯業に鏘々たるの人、明治元年を以て島根縣出雲國篠川郡杵築町に生る、人と爲るに及んで清廉潔白、顧客に信用を博するを精神とす之れ顧客常に同店を愛し日に隆盛を見るの基也、其開業は明治三十一年商ふ者は米穀雜貨荒物農産肥料、されば近郊一般同店に用を達するもの多しといへば誠に同地方重寶の店舗といふべし。

●曲萬印宮原醸造店(余市町 大川町)

店主宮原卯三郎氏徐ろに算盤を弄して敢て利を逐ざる所即ち近江商人の遺風を學べるものか慶應三年滋賀縣栗田郡大寶村字蜂屋に人となる、

代々農に従ふ家に生れしも早くも實業の有爲なるを知つて廿一年一族を携へて出余、荒物を營む、更に現業に轉ずるに及んで斯業の一頭地を占めて下らず、夕張郡清水驛に支店を有す、商ふ種類、譽、露、壽の他に更に味噌を加ふ。

●曲キ印市川吳服出張所(余市町 宮澤町)

吳服太物洋物店として余市に於ける有名なる

を市川吳服店と爲す本店は越後國柏崎に在り、店主頻りに商機を尋得するもの多年、其取引の廣濶にして確實を特色とし、全道に亘りて販路汎し、其營業の商品精良と産地撰擇は尤も店主の心を傾けて盡瘁せる所なり。

●曲又印服部旅館(余市町 大川町)

四通八達の好地に居を構へ、余市有數の旅館を經營しつゝ

ゝあるは服部乙吉君の快腕に因る、君は佐渡國畑野村字三ノ宮の産、十七年本道の人となる一業尙難しとする今日にありて君は旅客を扱ふ傍商店部をも營むんで林檎問屋を開設し醬油卸賣を爲す、旅館の懇切丁寧は言はずも哉營業に於ける君の手腕驚くべきものありと謂へば隆昌日に倍するは偶然に非らざる也。

●丸太印時田商店(余市町 濱中町)

店主時田藤吉君は夙に商事に精通せるを以て知られ、勤

勉の二字を銘して販路の擴張を圖る、君の生國は遠く越後國刈羽郡石地町、明治十七年渡道して余市に居を卜し、海陸物産商を營むに及んで其敏腕愈々振はれ、隆昌月日と共に加はる。

●丸盛印北原組(余市町 大川町)

少壯にして地方公衆の信頼を擔ひ克く專勵他事を願ざるは

店主北原貞徳君の美風なり、其聞くに耳を澄まし其語るに口を實にす、正直は君の專有物にして其名望を謠る、生國は遠く新潟縣柏崎にあり、廿四年余市に來り、父の經營する所の弊業を繼ぐ、殊に君が双肩に擔ふ所の不朽の譽は、日露戰役の功に依つて賜はりし金鷄勳章にあり、勇敢加ふるに温厚の君、將來想ふべし。

●丸本印本間支店(余市町 大川町)

本間支店は商號を丸本と稱し明治卅七年此地に店を開

いてより誠實勉強の特色を以て鳴る、店主本間大吉氏專心商品の仕入に意を拂ひ一として粗惡不廉の雜貨を賣らず之れ同店の華なり本店近く古平にあり、本支店共に花咲く店頭は

二六時中春の如くにして顧客常に群ふ以て其營業振の一斑を窺ふべし。

●德光組運送部(余市町) 世俗運送店一流の貧屋と異り、懇切で迅速で曾て一度も顧客の罵を受けし事なしと主任德光桑藏が得意の鼻を高くするも偶然にあらずとなん。

●遠藤榮次郎商店(余市町) 知るも知らぬも余市屈指の實業家として先づ第一に指を屈する者は遠藤榮次郎氏商店也、氏頗る剛毅の情に富み蹉跎屈せざるの氣概は克く衆庶の模範として信賴篤きの人、嘉永五年鳥取縣西伯郡の農家に生れしも故國に戀々するを慾せず廿八年此地に渡り薪炭商を營む事九年、後現業を營むに當つて巧妙なる手腕克く氏獨特の方面に活躍し其隆昌見るべきものあり。

●丸二八鐵藥店(余市町) 余市廣しと雖も其藥劑の新鮮と商策の好妙を以て巷間に喧傳せらるゝものを丸二八鐵藥店と云ふ廿六年の開店に係り顧客日に厚く信用地に汎し。

●丸商印阿部送運店(余市町) 同業屈指の運送業者阿部源太郎氏の隆昌を説くに當り亡父勘五郎氏の蹟を逐ふの要あり勘五郎氏新潟縣刈羽郡高濱の人、赤裸の身を賤業に起して克く其効を收め酒造業を營むに當りて刻苦寸勵所謂越後商人の特色を發揮して勤儉貯蓄の財は今や阿部勘の名と共に巷間に汎し嫡子源太郎氏亦父の美風を受く明治十九年出余して暫く其業を輔け廿八年獨立して現業を營みしもの宜なる哉其隆盛店頭の繁忙行人の足を留むるものありと云ふ氏又別に海産商を營めり。

●山大印大關小間物店(余市町) 廣く天下の粹を集め流行の品一として顧客の空歸

せしむる例を知らずと主人大關氏の得意知るべし。
●吉崎醫院(余市町) 君は慶應五年青森縣北津輕郡五所川原に産る、少壯にして斯道に長じ四十一年三月余市に移住し内外科専門醫の看板を掲ぐ、懇切の治療巧妙の手術人の敬服する所君ありて此地回春の幸を得たる者算ふるを知らず。
●山上一印林商店(余市町) 林商店は物價廉低の故を以て巷間に膾炙せらる所、店主孫藏氏は明治十二年小樽に産れたるの士、當店の商品は廉價特色ですと店主は頑張る、斯くありて此店の隆盛見るべきなり矣。

●キ印野口運送部(余市町) 主任野口捨吉氏は慶應二年近江國愛知郡彦富村に生る、性頗る快活進取の勇あり明治十一年單身本道の地を踏んで爾志郡乙部に塾居し漁業を營む事十年後石狩に渡り海産仲買罐詰製造の業にある事更に十年、超へて三十二年現時の箇所に卜棲するに當り罐詰業を繼續したりしも三十六年舊北鐵線の開通に當り百貨集散の秘策を覺つて遂に現業を營む、蓋し其獨得の經營にありて窺ふ不能、敢て他店の比には非ずとなん其重なる代理店左の如し。

丸米印北鐵輸送組 丸上上川運輸會社

二印北都組 丸々高畑運送店

何れも業務に熟達せると貨物取扱の親切とを以て傳へらる。

●北越商會支店(余市町) 小樽北陽商會の支店として創業幾久ならざるも信望夙に

厚く店頭常に顧客の市を爲す觀あるは北越商會余市支店の繁盛也、其營む者日本製銅會社の肥料を主として海產物産、繭生糸の賣買をも爲す、營業振敢て衆目を引かざるも其販路の廣濶なる遠く鹽谷銀山の方面に取引し、隆々日に厚し、往年管内の肥料販賣高にして、三万呎を越ゆると云ふ。

●富士山大印村松商店(余市町 停車場前) 村松商店は村松直三氏の經營する所、君は商業界鏘々たるの人なり常に機先を制して商畧圖に當り克く隆昌今日の礎を爲したる源を尋ねるに君は明治三年の生れ、廿七年郷里靜岡縣掛川町を跡に巴港に航し、幌都を経て此地に來り林檎商を營みしは過る三十九年爾來星霜を閱する事四、今や販路の廣濶なる海外浦鹽方面に亘り年々七万斤の輸出を越ゆると云ふ、近來亦繭の仲買をも兼ねるやに傳ふ。

●丸友印大久保商店(余市町 字宮澤町) 營業は所謂万至にして頗る信用あり主人友太郎氏勉強を唯一の守本尊として商賣の繁昌を來すに他意なし、營業は洋酒罐詰を以てし而も日に増し隆盛を見る、將に是れ當代の商機たる格を有するの君は山梨縣東八代郡石和町の人明治二十年を以て先づ函館に渡り、爾來各地を踏破する事六年、後現地に來るに及んで這業を營むや忽ち隆盛を極む、即ち是れを聞君に托し、劇場三友座を買取つて梨園の業にたつさわる、今や兩岐財殖にて寶倍し吾人は其祝贊に苦しむ。

●山や印後藤商店(余市町 富澤町) 店主後藤彌吉氏は磊落にして活氣あるの士、土地人呼んで豪傑と爲す、宜なる哉物に動せず事に恐れざるの氣概は衆庶の敬慕する所、常によく語

りよく談ず、營む業は米穀荒物を以てし廻船問屋をも爲す、其營業日に隆し信用日に加はる所以の者は氏の天性自然的に發揮せらるゝ所ならん乎。

●大正印小原商店(余市町 富澤町) 當町唯一の商店にして商畧に長けたるの奇才家は小原楠次郎氏商店也、其營業隆また隆、信用日に倍し繁昌其極を爲す所以の者は主人の手腕なり楠次郎氏越後刈羽郡宮川町に十五年を以て産る、超へて廿八年六月現地に來り卅七年海產雜穀、肥料問屋の看板を擧ぐるに到つて、一も顧客の怨念を買はず、同店の隆盛、他店と異なるもの偶然にあらざる也。

●岡田菓子舗(余市町 字瀨中) 菓子掛物類の美味を以て余市界限に鳴るを岡田菓子舗と爲す同舖主人は明治十五年新潟縣古志郡に生れ、幼少に斯道に熟達す廿三年余市に移り超へて卅二年の頃より斯業に従ふ隆盛日にあまねしとなん。

●横濱商店(余市町 富澤町) 米穀荒物雜貨商に兼ねるに海產商を以てし信實顧客の恩顧に酬いん事を考慮するの士は横濱豊藏氏商店なり君は石川縣江沼郡鹽谷の産僻村に生れて有爲の身を了るを潔とせず三十九年郷關を辭し當初小樽にあり後、來余現業を營む常に語つて曰く誠實と勉強は當店の特色なりと。

●山上印辻村樓(余市町 梅川町) 廓内唯一の大雛、辻村樓の先代を初五郎氏と稱ふ、青森縣大町の人、明治元年十八歳にして本道に漂泊、當初余市役場に奉職せしも後實業を營み更に十三年解語の花を植付て現時に到る、當主幸次郎氏又令名あり消防組長の任を帶ぶ嫺嫺

細腰、手折れる人の心に任すとか。

●曲庄印梅川樓(余市町 大川町) 心なき浪々の旅人さへ杖を留めて籬を覗く、小薩張りした一ト構へ、是れを曲庄印梅川樓と爲す、樓主谷坂庄助氏舊南部の藩士、弘化三年南部三ノ戸に生る、超へて明治三年津輕海峽を横切つて美國船湖に廻船問屋を開きしが後感する所ありてか現時の位置に斯業を營ひ、夫れ深酌低唱の妙味にありては既に定評あり。

●旗亭思君亭(余市町 大川町) 糸竹管弦の節面白く四時艶聲窓外に漏る、所之を思君亭増山竹次郎の旗亭と爲す、位置は停車場通りの好地を占め、江戸前庖丁の得意待遇の懇切に到つては粹客の歸途を忘れしむ。

●丸山上印青柳樓(余市町 大川町) 座敷の清酒、待遇の懇切、敢て貪る事なく奇羅を装ふ七輪の名花娟を競ふて吳客を迎へ、更に五名の弦妓裾を引いて之れを助く、されば青柳樓辻村支店の名、磯打つ浪の音より高し。

●角本印辻村支店(余市町) 余市辻村の支店、角本料理店は庖丁の美味を以て粹人に謠る店主の愛嬌は營業の資本にして日夕此樓に上る者夥し、主人本間茂郎氏の父は新瀉縣岩船郡の人、天保三年の産にして十六年渡道して漁業に従ひしも現主の相續するに及んで卅一年四月現業を經營す、爾來常に陽春花時の如く、將に一花園を見るの想ありとなり。

●山富印瀨田松菓子舖(余市町 大川町) 菓子製造小賣商として名聲を馳せ顧客門前に市を爲すと聞く瀨田松茂三郎商店は去る卅年の創業に屬し店主は函館の人、十年來孜々とし

て倦まざるを以て聲價高し。

●山七印新谷新聞店(余市町 車場通) 余市唯一の新聞賣捌店は新谷明治君の經營する所

を以て嚆矢とす君の郷里は小樽にして廿八年余市に來住し當初鑛産業に志して然別鑛山に入り技術見習として在る事三年、後荒物業に腕を磨きしも未だ此地に新聞賣捌をなすものなきを憾み直ちに現業を開いて今日に到る、君の營業に熱く、業に忠實なるはよく衆人の模範とする所、當初五十少許の購讀者より僅少の間に約一千有餘の顧客をかり得たる事蹟に徴しても知るべき也。

●山石印岩田菓子商店(余市町 大川町) 余市界限下戸黨の眷顧厚く菓子商として其妙を極むる者岩田八四郎店舖也、店主は維新の當初會津藩二百戸相携へて黒川村に移住したりし團體の一人にして十一年斯業に身を托ねて以來信用克く今日の隆盛を致す、近時又更に赤井川村に荒物貨物の支店を開始したりと云ふ。

●角大印本間旅館(余市町 大川町) 當港唯一の好旅館は夫れ角大なる乎、待遇の懇切なる千里の旅にあつて尙我家にあると異なる特色は本間旅館の専有なり、主人は義俠を以て地方に知られたるの人、名を大造と云ふ、新瀉縣畑野に生れたるは遠く安政二年にして明治六年小樽に漂泊し、住する事六年後鹽谷に在りて吳服商を營みしも超へて三十年余市に居を下し米穀荒物を商ひしも期する所ありて現業に移る、其旅客を迎ふるや懇切丁寧、再來の客をして其勉強に感せしむと云ふ又一奇の稱あり、旅館の傍薪炭を古平美國に送り西に

東に能く勉めよく商ふ。

●曲又支店待合所(余市停車場前) 余市の地を踏む者は曲又待合所を知らざる者なし、本道名物の林檎は其特意の商品、其風味の美なる一度味ふものは忘るゝ能はずとは齊しく稱ふる所、携へて停車場構内に捌いて遠旅の行客を慰む曲又の名を知るものは、余市を想ひ、余市を想ふものは名物林檎の味を追想せざるものなしと聞く。

●日野屋料理店(余市町大川町) 一寸手輕な所で一杯聞こし召すには此店に限ると頑張る要はなければども店主木山瞭吉氏は越後國蒲原郡沼垂町信濃川畔で生れた人、卅八年小樽に渡り堺町中村文治方に勤むる事三年、四十年夏八月余市に移住し獨立現業を起す夫れ料理の美味、座敷の清潔にありては野暮な筆者は言はずもかな。

●曲キ越中屋料理店(余市町大川町) 妓三名あり、常に愛嬌を湛へて醉客を迎へ、窈窕として三弦を弄す、二六時中弦歌絶ゆるなく、清瀟たる座敷、江戸前の風味、之れを愛して登樓する者盡となく夜となく千客万來三十五年十二月の開業以來、當家の料理ならでは引きも切らずの繁盛なり、而して栖原喜一郎氏の經營する所たり。

●山甚印安井商店(余市町大川町) 店主甚次郎氏忠直の士、夙に本道名物たる林檎輸出の有利なる見て現業に従ふ、商略を誤らず販路廣濶にして各地に取引し海外浦塩へ出荷するもの最も多しと聞く。

●丸松印松乃屋待合所(余市町停車場前) 位置を停車場前の適地に占め和洋料理に生蕎麥の美味を得意として行人に歌はるの家は松の家待合所なり、松田虎吉の經營よろしきと評判の粹味とは四十年七月開業以來隆盛を致す所以なり。

●丸兵印鮮魚商(余市町大川町) 三伏の炎熱人を腐すの時と雖も潑刺たる鮮魚店頭に躍るものは蓋し店主古本兵藏氏が手腕と信用を想はざるべからず氏萬延元年の生れ富山縣富山市小崎町の人夙に本道漁撈の偉大なるを覺つて渡道卅六年の候幌都に商す、後余市町に到り尙現業を繼續し今や廣く全道の輸出魚を一手に致し今日の名聲を博す。

●山ト印東陽軒菓子舗(余市町停車場前) 美術菓子掛物の風味を以て下戸黨に歌るの家は東陽軒菓子舗と爲す、着業は近く四十年十一月にして主人新村吉次郎氏は東都美術研究會長森田宗策氏に就て斯業の研究を重ねし人嘗て札幌にあり東陽軒を經營せしも後之を現地に移す其美味を謠るも偶然にあらざる也。

●曲市印佐藤待合所(余市町字大川停車場前) 其門構へ取て宏壯ならざるも旅舎として待合として行旅の客を悦ばしむるは曲市の特色なり、主人は佐藤常吉と呼び温順にして大度あり、開業以來りと共に隆盛を呼び高評を博取したるもの蓋し因る所なくんばあらず。

●曲玉印千代乃家(余市町大川町) 難波津に咲くや名花の曲玉に、浮いた同志が千代の家の深き契も奥二階、はんらく散る花の眺も同じ料亭の、將に是れ群鷄の一鶴、男子宜しく千代の家に赴くべしホ、敬て申す。

●梅津家料理店(余市町大川町) 蕎麥で賣出したるは梅津家也、其風味一度喰へば其味を忘

る事の出来ぬとは蕎麥通の均しく唱ふる所、日毎夜毎千客万來、粹客は此家に限ると評判高く、そばと云はず料理と言はず風味塩梅共に宜しく粹客此地方に料理店を撰まば先づ第一に梅津家を推さん哉。

●丸小印宮城屋料理店(余市町) 小薩張りした家の構へ食ふによく飲むによく、女將の愛嬌と仕出の迅速を以て名を賣るものは宮城屋なり、女將小杉かなめ氏は仙臺の人、卅七年の開業は其日久しからざるも樓中常に粹客のあらざるなしと云ふ。

●曲本印料理店(大川町) 天下の美祿を味ふものは先づ車を曲本に駕すべし敢て清酒たる門戸を装はずとも二六時三弦の樓中に湧く所抱へ藝妓の婀娜姿克く粹客を遊ばしむるものは坂本料理店なり店主利八氏青森縣下北郡大奥の生れ三十一年余市に移住して漁業差網、請負古物湯屋等を營みしが卅七年始めて現業に移る。

●近江屋旅館(余市町) 同館は余市停車場前の好位置にあり店主平田吉次郎氏近江國愛知郡稻枝村字彦富村の豪農に生る、幼にして烟眼人を靡かしむるの慨わり明治四十一年三月余市町に來住し獨起現業を開く、創業日淺きも客室の清潔と婢僕の懇切を知られ此地往復の行客競ふて同館に足を托ぐるもの其基因する所なくんはあらず偉なる哉。

●須貝醫院(岩内郡小澤村) 院主須貝庄太郎君は地方に於ける刀奎家を以て名あり父は源輔と謂ひ舊會津の藩主、明治初年同藩團體移住者の一人にして君は嫡子たり明治八年余市黒川に於て産る、卅二年東京に上り私立慈惠病院に就て斯道を修め、後招かれて萩原病院に

助手たり、卅六年四月北鐵工事建設機托醫を命せられて星野組間に勤め、後本村に來るに及んで卅八年四月を以て村醫に任せらる、以來其職に熱く地方人士の敬慕加り好評高しと言ふ。

●丸松印奥山商店(岩内郡小澤村) 小澤停車場前に店舗を占め奥服太物洋反物に雜貨を以て地方一般の需要を充たしつゝ、ある商店は是れ丸松印奥山商店なり店主宮作氏は新潟縣三島郡與板町に於て明治十年を以て生る、其本道に來航の後は小樽丸井商店に勤務す、後擧げられて瀧川支店支配人たりしが、卅九年十月現地に來住するに及んで退店、獨立して這業を開く、忽ち信用を高め、隆盛を倍し、今日の基礎を固めしとなん。

●山利印今井商店(岩内郡小澤村) 奥山商店と相並んで店頭雜踏を見るの繁盛を極むるものは今井商店也、商ふ者は米穀雜貨荒物の類にして供はらざるなく、商機に長じ奇才を弄す主人今井林之助氏は新潟縣刈羽郡批把嶋字岩上の産、文久三年を以て生る、世々耕耨の家を生れしも、人と爲るに及んで大志を抱いて本道に航し廿七年然別に蟄居す、其間常に商を以て渡世し後余市大川町に移つて信用を博したるも四十一年一月茲地に於て斯業に替ゆ、而して營業に於ける確實は他店の比にあらずと傳ふ。

●丸大印八木運送店(岩内郡小澤村) 確實と信用を營業の資本として専心顧客の便利迅速を期するを以て名聲噴然たる八木運送店は卅七年舊北鐵線の開通と共に置かれて後、累年歳に利を占め月に資を殖すの主人大四郎君は頗る文明的の商略に通じ濃厚を以て囃さる、

生國は會津耶麻郡山瀉村、明治十六年の人、卅六年本道に渡り山道驛にあり、後現所に轉じて始業以來營業益々發達し、後來將に矚目すべきの好運送店なるを失はず、主人の人材以て窺ふべき也。

●サ印三富運送店(岩内郡小澤村) 營業振は確實迅速にして貪るに非ず、世俗一般運送店の摸範を以て目さるゝ所は三富氏の營む運送店なり、君識博く理に明かにして所謂万至、敏活は定評の存する所、特に其獨特を以て誇るものは岩内及内地各驛の接續貨物取扱にありと。



●築 瀨 眞 精 君 (岩内町御鉢内町)

築瀨君は岩内港の元勳にして又元老なり、聲名夙に高く、嘗に岩内に於ける代表的人士として知らるゝのみならず、又實に古武士の典型として知らる、翁今や功遂げ名成り、老を閑所に養ひ、悠悠風月を友としつゝありと雖も、翁や是れ一代の名士、翁眞に傳へざるべからず、築瀨氏は舊會津武士、天保九年を以て若松に生る、先考は重吉氏と稱し、翁は其の嫡男なり、幼名は辰之助、不幸幼にして先考に死別し慈母に養はる、氏至孝克く母に仕へ、長じて文武の學を修め、又弓鎗の道を修め傍ら兵學に長ず、慶應年間藩主容保公に従つて上京江戸にあり、戊辰の亂、各所に轉戦苦闘し、僅に重圍を衝いて故國に歸る、同二年官軍大學會津征討の時に當り、翁小隊長を命せられ、藩兵を率いて白川口に防戦し勇名を博す、藩主恭順の後江戸に護送せられて謹慎申し付けらる、維新後開拓使の命を受けて本道に航し、開拓使少主典に任せられ、亞て大主典に進み、明治十五年岩内古宇郡長に任せられて治蹟頗ぶる見るべきあり、在官五星霜、明治十九年春官を辭し、居を岩内にトす廿三年岩内郵便局長を命せられてより、在職十有七年の久しきに亘り、岩内地交通の發達したる翁に負ふ處多し、卅九年職を嗣子捨次郎君に譲り、閑居風月を樂み又世事を顧ざるも、翁や是れ岩内地方公共事業の發達に力を盡すもの前後廿有六ヶ年、其の功勞の多太なる殆んど擧げて云ふの暇だになし、翁の岩内の元老元勳として重せられ、名聲嘖々、人皆な其の威を仰ぎ、等しく欲せざるなきもの寔に故ありと謂つべきなり。

●橋本清吉君

(岩内港
實業家)

岩内港の重鎮橋本清吉君、岩内港の本道西海岸の要港として今日の發達を來し、自治區として、摸範を以て推さるゝの施設を完ふし得たるもの、橋本氏に負ふ處尠なからざるなり、氏や漁業組合長としては組合をして全道無比の好組合たらしめ、汽船會社創立の發起人として岩宇二郡沿岸住民の不便を救ひ、銀行を合併せしめて地方の金融を滑にし、馬鐵會社の創立者として北嶺との連絡を完ふし築港の難問題に處して、遂に起工に着手せしむる等凡そ事の岩内地方の發展に關する必ずや氏の盡瘁を見ざるなし、氏能登の人安政六年九月珠洲郡長尾村に生る、本姓は小島氏、父を仙右衛門氏と稱し、清吉氏其の二男たり明治九年親戚橋本治兵衛氏の養嗣子と爲り自來橋本を姓とす、人と爲り濃厚寡言、君子人の風ありと雖も一度意を決して起つ實行せざれば止まざるの實行家にして、町會議員築港委員漁業組合理事長等に擧げられ、名聲籍甚世人皆な許して以て岩内の重鎮と爲すもの寔に氏の企つ貫かざれば止まざる實行家たるの結果に外ならず、自ら聲名聞達を好まず、功利の念に淡くして名聲斯くの如きもの、又以て氏の人格を想ふべきなり、氏の經營する處回漕店あり、呉服店あり、海陸物産委託販賣店あり、倉庫業あり、是等諸業一業と雖も經營の難きに、氏之を督し、諸業盡く隆盛を極むるもの、又氏經營の蹟を見るべきなり、個人としては諸業を經營して産を興し、家礎を堅ふし、公人としては幾多の問題に參與して聲名を馳す、岩内港に於ける橋本氏、傳へて以て木朽に垂るべきなり。

●濱喜三郎君

(岩内港
漁業家)

濱喜三郎君は岩内に於ける資産家なり、其の産を以て起つ、岩内地方富豪少なからずと雖も、濱家と匹敵し得る富豪や多からず、不知、濱家は如何にして致富今日を來せしか、先代喜三郎氏は是れ傑中の傑、濱家の今日あるもの一に先代喜三郎氏の力ならずんば非ず、先代喜三郎氏は能登國珠洲郡松浪村の人、嘉永三年齡ひ十七歳の身を挺して本道に航し、江差の漁業家吉田多助氏仕にへて、精勵六ヶ年安政二年古宇郡泊村に赴き、身を漁夫の群に投じて辛勞六ヶ年、其の精勵なる鯨漁終れば直に夏期の漁業に移り、秋期は鮭漁に、冬期は鱈漁に従事し、風雨寒暑意に介する處に非ず、勤儉自ら奉じ、克己以て業を執り、零細の資を苟くもせずして、六ヶ年の困苦得る處少なからず、一度江差に歸る、當時江州の商人増田利兵衛深く喜三郎氏の精勵勤勉なるに服し、資金を貸與して以て喜三郎氏の志を援く喜三郎氏深く其の徳に感じ、踴躍岩内港に出で、居を稻穂崎に卜して雜貨荒物店を開く、是れ濱家の致富今日を來せし素因たりしなり、自來經營着々其の歩を進め、漁業を營むに到つて益々成効し、明治元年米價騰貴し地方の細民苦難に陥るや白米十俵を施與して細民を救助したるが如き當時已に嚴たる家礎は築かれつゝありしなり、斯くして益々産を興し明治十七年商業を廢し、全力を漁業に漦ぎ遂に今日の資産を贏ち得たり、現代喜三郎氏は新進氣鋭新智識に富むの士先代沒後家を繼ぎ克く先考の志を守つて施設一も誤らず専ら資金を漁業家に貸與し、悠然として富豪濱家の面目を保ちつゝあり又傳ふべき也。

●泉 鐵 太 郎 君

(岩内港
醫學士)

後志國中小樽區を除き、他地方に醫師たるの門戸を張るの士にして醫學士の學位を有するは唯だ岩内港に於ける泉氏あるのみ、氏の名聲噴々遠近に傳へられ、門前市を爲すの隆盛を來しつゝある寔に偶然にあらざるなり、泉氏は江戸の産、文久二年四月本郷區春木町に生る、先考は東浦保定氏、代々幕臣たり、氏十七歳にして泉謙三郎氏の養嗣子と成り泉を姓とす、泉家は醫家にして謙三郎氏名醫を以て知らる、氏を養嗣子と爲したるもの其の家業を繼がしめんとてなり、氏其の意を諒し明治十九年第一高等中學校に入りてより、研鑽苦學群に絶し、進で醫科大學に入り、螢雪の勞空しからず廿四年十一月首尾よく大學を卒業し醫學士の學位を授けらる、卒業後直に醫科大學に勤務し、小兒科助手として、實地の研鑽を積む、廿六年岩内病院の好個の院長を求め、之れを醫科大學に乞ふあり、泉氏選拔せられ同年六月岩内に赴任し、岩内病院は茲に好個の病院長を得たり、自來勤績十ヶ年、其の起死回生の妙術と、懇切に至らざるなき一視同仁主義とは、大に岩内地方人士の信頼を博し、令名遠近に傳へられ、苟くも病む、來りて氏に診を乞はざるものなきに到りしも岩内町財政の案配は町立病院を廢せざるを得ざるに至れり、爰に於いてか地方有志切に病院を開かんを氏に懇願す、泉氏又其の乞を容れ私立泉病院を開設して以て今日に及べり斯くの如く泉氏の岩内に住する長く、地方人士の信頼年と共に積むもの由來偶然に非ず氏又岩内醫會長を兼ね、岩内の地此の好個の醫學士あり町民の安意想ふべきなり。

●武 井 政 治 君

(岩内町
漁業家)

武井政治君は、是れ模範的立志成効家なり、氏の失敗に屈せず、窮乏に撓まず、志を抱いて巍然たりしものは寔に後進子弟の學ぶべき示例ならずや、薄志弱行失敗に氣沮し膽落ち又再起の勇なきもの、須らく武井氏に學で可なり、武井氏は最上の人、安政元年三月を以て山形縣最上郡荒町に生る、武井家は一郡の豪農にして舊家を以て知られ、海主の特命に依り、米穀及び日用品販賣方を命せられ代々金正の任にありて一郷の尊信篤し、維新後も依然戸長に推され一郷を寄す、氏力を居村の發達に盡し、公共事業一として盡瘁せざるなく益々名聲を博す、偶々事業上の大失敗を來し、さしもの名門家産空しく蕩盡の厄に逢ひ、殆んど又起つ能はず、然れども氏屈せず絶叫して曰く人生到る處青山あり、行いて北門の新天地に子孫百年の基を開かんと、奮然本道に航す、時に明治十四年六月たり凍たる意氣毫も衰へざるも、囊中自ら錢なきを如何せんやの境、氏の札幌に入れるの日、一錢の資なく窮乏困厄交々來りて、堪ゆべくも非ず偶々同郷の知人遠藤氏に邂逅し旅金を貸與され岩内に赴き茅沼村の漁業家武井忠兵衛氏の家に入り漁場を監督す、十七年獨立漁業を經し自來家運を開き廿六年忠兵衛氏の三女を娶て武井家の分家として起ち以て今日に及べり氏今や居を御鉾内町にトし、堀株村に漁場を經し別に岩内探炭組合を組織し、長濱彦太郎氏を組長とし氏其の専務理事と爲つて事務を宰す、蓋し武井氏の失敗後無一文の身を挺して今日を來したるもの氏不屈の意氣に據るもの氏も又偉人物なるかな。

●岩雄登礦山事務所

岩雄登硫黃山は三井家の經營に成る本道有數の礦山にして磯谷虻田兩郡の郡境にあり海拔三千餘尺、事務所を岩内町に設け一ヶ年の採掘額十一万噸餘に達し、二千餘噸を製品す同礦山の發見は年代詳かならざるも安政年間已に採掘に着手し、函館奉行又岩内場所受負人佐藤仁左衛門をして採掘に従事せしめ得る處少ならず、明治の初年廢鑛に歸し、明治九年より又採掘に着手せしも微々として振はず十九年二月三井物産の之を讓受て經營に着手してより本道有數なる硫黃山として知らるゝに至れり、廿五年四月三井鑛山合名會社の創立と共に鑛區面積五十八万坪餘全部を讓受け更に製煉所を現在の位地に移し、廿七年に至り大に其の元釜を改造し、卅七年蒸氣製煉を擴張し卅九年更に汽罐並に製煉器械の増設に着手して竣工し從來より約二倍の製出を爲し得るより別に運搬機關を擴張し、架空兩線式鐵索を製煉所より宿内間に架設せり、同鐵索は製煉所に起り、海拔三千三百尺の燒山を通過し、岩内郡前田村字宿内に終るものにして、動力の水利を宿内に取り、鐵索の延長四万六千八百尺徑六分の網索を用い支柱四十五基を建て二百廿尺毎に籠一個を附し總計二百三三個を有し、實馬力は五十六馬力一回轉に要するの時間二時間半、一〇十時間にして六十噸を運搬し得ると云ふ、同山は斯くの如く其の設備完全にして鑛區又良好其の二層三層を採掘せんか、殆んど無盡藏と稱するも不可なし、輸出地は米國を主とす、其の硫黃の良質なる多く其の比を見ず、同山の發展我が鑛業界の爲め喜ぶべきなり。

辯護士 山本幸治君 (岩内町)

法理の濫奧を究むる已而ならず、經驗の識に富み一度口を開けば舌論雲を起すの概あつて存する者、將に是れ法曹界の快男子山本幸治君なりとす、君は江戸ッ兒小石川の産、明治十四年九月を以て生れ、小學の課程を卒るや某藥舖に身を委ぬる事一星霜、歲十有五に及びて更に順天堂求合社を卒業したる後、官海に俗吏たる事約三年、後頗る期する所あつて明治大學に苦學する多時、三十六年卒業の翌歲を以て判檢事登用試験に及第し、任を札幌地方裁判所に拜して檢事代理たり、時僅かに壯齡廿有三、翌歲東京地方裁判所に榮轉卅八年四月斷然職を抛つて野に下り辯護士と爲りし翌歲此地に門戸を構へ堂々法旗を翻がへして多年の濫蓋を傾けて職に従ふ、資性卓磊高潔の君、信頼益々倍し噴々の名時世を風靡するわつて存すと。

●上島 職君 (岩内町 公証人)

君は安政元年若松の産、會津藩士の家に生れ幼名を寅彦と稱す、長ずるに及んで藩塾々進館に學び文武兩道に秀づ、齡十五戊辰戰亂に際し城中に在て苦戰、明治二年十月家兄に伴はれて本道、後志國余市郡黒川に留り耕耨に従ふ、同五年五月時の開拓使創設に係る資生館に入寮、同七年選抜を受けて開拓使に職を奉じ十五年廢使置縣に際し司法省裁判所に榮轉、判事補又は檢事補に歴任、十九年官を退ひて北海道廳に奉職、郡書記、警部又は司法官たりしも廿八年三月退官、同八月公証人を命せられ根室區裁判所管内に噴名を博し三十

四年四月現地裁判所管内に移住し熱誠職務に従ふ君亦岩内町會議員たり岩内漁港築造委員たりと以て徳望や窺ふ可し。

●松浦島次郎君 (岩内町 町會議員)

君は慶應三年新潟縣越後國長岡市に産る、少壯にして京阪に漂遊し頗る苦楚を嘗むるもの多時、遂に本道に雄飛の基を開かんと明治廿九年決然郷土を躍つて本道に漂航し當初岩内に泊し、幾多事業に蹉跎落失、逆境に浮沈する事三星霜、後岩内ホテルを經營するに及んで漸く其名聲を謠はれ隆々を極む、後四十一年十月之を他人に譲與し金貸業を營んで數万の利を收むるあり、卅五年町會議員に選る、や其徳望愈々衆庶を風靡し、現時幾多同輩の間に介在して一角の頭領たり、卓論風生、辯舌流暢二十有頭顱の議員として後へに瞻着せしむるの慨あつて青年派政治界に鏘々たるの名聲を博せり。

●川村長四郎君 (岩内郡敷島内 漁業家)

君が祖先は石川縣能登國の産、代々豪族たり、而して嚴父亦長四郎と呼び十四歳にして本道に渡る、當初岩内郡敷島内に永住の居を下し漁業を渡世と爲す、君は氏が長男たり明治元年を以て現村に産る、長ずるに及んで父の遺業を繼承し、堅忍勤勉以て漁業を督し奮闘大いに殖産に努め漸次業務を擴張し家政隆々一族團欒して現時の繁盛を極む、後衆望の推する所となつて現村に總代たる事前後を通じて五回に及び、連綿として現時尙現職にあり村政を統制し民意を充たし其間公私の事舉に貢献する者尠からず、現下其職に兼ねるに君

が發起に係る岩内水力電氣會社の現取締として重用せらる。



●**濟生病院**(岩内町) 岩内町に於て嚴存する病院中最も基礎堅く治術精巧にして加ふるに設備の完全なるを以て名を恣にする者は先づ第一に濟生病院也、院長栗山英哉君は越前國坂井郡三國町の出身嘉永四年の人、夙に志を醫業に傾けて其濫奥を研め、東都博愛社病院に勤續する事八年、後三十年岩内に雄飛し一院を開くもの成あり、職に當つて學識く懇厚の治療、巧妙の手術克く患者を心服せしめ三才の幼童尙採脈を辭せず、後現院を組織するに及んで信賴を上下東西に博し名聲噴々として現時に到る。

●**二葉伊三郎君**(岩内町) 君は文久三年秋岩内郡敷島内新井田氏三男に生る、慶應二年二葉惣助氏の養子と爲るに及んで其遺業たる芝居興業を以て專業とし、其間幾多の困難を重ね其主管劇場にして祝融の厄を蒙る者前後二回、されど些しも屈するなく忍耐事業の發展を計り四十年七月現下橋町に本書巻頭寫真版の示すが如き宏麗なる劇場を新築し現下堂々陣を梨園界に張る、氏亦資性豪儔の風を備へ、選れて岩内消防組頭取、岩内町會議員たるの榮歷を持す。

●**金天印中居儀八君**(岩内町) 岩内港に於て海產物仲買商を呼ば、先づ指を金天印に屈すべし店主儀八君頗る獨立獨歩の精神を抱き曾て他人の助を仰がず苦闘して自ら樂しむ、聞く郷里は德島縣板野郡松島村字七條に存し慶應三年農家に生る、明治廿七年小樽に渡來し困厄を極め各所に放浪する事數年、其間幌泉に一星霜を越し、函館を経て岩内に漂泊するもの實に卅一年、後現業を荷ひて業務日に隆盛し、現下推されて町會議員たり岩

内魚市場仲買組長、魚商組合監査役の二業組長を兼ね自ら持する恭儉、謹直方正を以て令聲高し。

●**山又印本間作平君**(岩内町) 岩内實業界の泰斗本間作平氏は明治元年を以て新潟縣佐渡郡新町に産る、明治十六年須らく本道實業界に投せんと津輕海峽を横斷して歌棄に移住し荒物等の商を試みたる後、卅年現地に吳服太物商を經營するや天地相應と顧客馳せ群つて隆昌極りなく五年の後鷹臺町に醬油醸造部を設け、鶴印龜印松印の三種を精釀し芳名を千里内外に馳す、今や兩店相伴ひ繁忙日に増進する榮境に存す、更に聞く君は嘗て郷里にあり郵便局長の職を占め殖林事業を興し、官林を開拓して噴名を唱はれたるの人なりと。

●**山三印馬場合名會社**(岩内町) 其組織は合資を以て成り、江洲の人馬場榮吉君之が業務を監督す、支店を小樽に設け吳服太物の卸小賣を專業とし三十二年三月創業を起して以來、よく其活腕を振はれ専ら品質の撰良價格の低廉を生命として今日の隆昌を見る需給日に多く、社會に其名聲を博したるも、勉強の徳也、誠實の賜也、山三印の噴然たると共に日に月に其發展する事賀すべきなり。

●**下國齒科醫院**(岩内町) 院主下國翼君は舊松前の藩士東七郎氏の一子にして東都下谷區三筋町に呱呱の産聲を擧げし君は、一家と共に渡道し瀬棚に住する七年、十四歳東上して中學を卒へ後高山齒科院に學び、紀濟博士に師事する數年、二十五才にして歸道し

院を先づ江差に張る事少時、更に岩内に移し技術巧妙懇切を極む、宜なる哉、今や陸續診を求め術を仰ぐもの踵を接するの隆昌にありと、蓋し斯界得易すからざるの人材たり。

●梅澤醸造店(岩内町 稻穂町) 九平を商標とし松、竹、梅三種の醬油を賣出して其繁榮を恣にする所梅澤六兵衛氏の醸造店なりと爲す、精良美味は夙に顧客の識認する所更に改良に改良を加へて廉低の賣價は、日々遠近の注文陸續旺盛を極むるもの之を証する所、敢て他言を弄するは將に贅たらんのみ。

●一山印由利回漕店(岩内町 御針内町) 文明的に店務を整理し敢て期日の誤を不致るは店主由利理三松君の精勵なるに因らずんばならず、而して君兵庫縣城崎郡に産れたるは明治七年にして其來岩せられたは超へて廿八年先づ海産商に手腕を試みたる後、卅八年現業に指を染む、蓋し不屈堅忍の人にあらずんば豈に今日の成効あらんや欽すべき哉。

●力印柿崎政吉君(岩内町 御針内町) 當港幾多の運送業者の間に介在して新進の銳氣嶄然頭角獨高うする者柿崎運送店にして君は是が經營主たり、然して生は明治二年山形縣酒田港に享け、空しく僻在の地に老ゆるを欲せず、卅一年慨然本道に航す、當初小樽に居を相する事二星霜、卅四年岩内に移住、銳意運送業に心を砕いて苟も其約を誤るなく、今や機運熟して手腕の非凡を知らる、近來更に海陸物産商を兼ねて二業を經營し益々噴名を博す

●池田大盛堂(岩内町 御針内町) 營業は藥種、和漢洋書籍、洋酒、筆墨、新聞雜誌を以てし營業頗る殷盛を極むる者大盛堂商店と爲す店主池田庄次郎君安政五年の出生、大阪島上郡河

西の人たり、歳十五にして郷里木綿商に丁稚たる事六年、其間常に夢魂本道の地に飛んで戀々する事多時、遂に万波を蹴て郷天を發し、十三年六月樽港に荒物商するや翌年不幸祝融に罹りて失業し、後友人と計りて現地に藥種商の小戸を張り隆々を極むを折柄不幸再度の火厄に見舞はれしも毫も屈せず奮進遂に現時の大商店を造營して港中屈指の店頭を張り花客市を爲すに到る。

●北本蠶種店(岩内町 鷹吉町) 北本清重君は蠶種の販賣を以て專業とし國産の増殖に努むるの人、蠶種は何れも特種の系統を有し雄健たり、君は郷米澤の人、萬延元年を以て産聲を擧げ卅七年拓殖事業を本道に起さんと企圖し來道初來現居に永住爾來斯業に努力する多大現時自ら扶桑館を興して之が主幹となり或は蠶業傳習所を設け、汎く江湖に傳授して斯業の發達を期する等其勞や將に岩内のみならず本道興業界に貢獻する所甚大なるを了せん哉

●イ印岩内魚市場(岩内町) 夙に斯業に經驗を有する北友長之助氏主任として一切の業務を擔任し汎く本道各産地に取引を有す、其創立は明治四十年九月に係り、創業日淺きも益々盛大を加ふ聞くが如くんば更に之を林貞助氏の名義に附して株式組織に變更すべしと以て其隆昌の一斑を了すべき也。

●合資會社橋本回漕店(岩内町 御針内町) 岩内回漕界の開祖を以て自ら其氣風を高うし貪利的に亘らざるもの本回漕店の特色乎、取扱の確實、荷捌の迅速にありては言はずも哉、敢て聞く其創業は明治八年、海運王橋本清吉氏の企業に係り、其組織を變更し合資會社の

名稱を冠したるは實に四十年十二月なりと。

●山大印大島商店(岩内町大字 御鉢内町) 本道殖産上に至大の關係を有するは山大印大島商店なり其營業肥料を商ふにありて而も精品東京人造肥料株式會社の撰製に係り店主大嶋幾三郎氏改良進歩の道を研究するに余念なし尙店內には海陸物産委託販賣をも兼營せりと。

●井桁印南河旅館(岩内町 御鉢内町) 主人南河正行氏は斯業に卓識なる經驗を有する人士にして石川縣加賀國能美郡安宅町の産、明治初年渡道岩内港に漂泊し、先づ雜貨荒物商を經營して實業の神隨を極め、後明治六年現地に旅館を開始して多年の宿望を之に傾け、懇切を資本として南船北馬の旅人が行塵を拂ふ、以て隆々を恣にする所以なり。

●丸ト印池田小間物店(岩内町 御鉢内町) 況く三府地方に仕入先を有し薄利に顧客の便を圖るは池田小間物店の特色なり主人池田友一郎氏大阪府下三嶋郡の産、廿八年刀奎界に入りて名望を唱へられ同年醫師として渡岩神惠内病院に在勤する事少時、後慨然醫業を抛つて實業に歸し今日經營する小間物店を開業したる者、其企畫亦自ら異色を爲すの概あつて存す。

●岩内病院(岩内町 御鉢内町) 岩内の刀奎家中尤も卓識高潔の君士、日山信夫氏の經營する所岩内病院たり、君は廣島縣加茂郡の人にして明治三十八年此地に醫門を張り、其翌年更に岩内病院と公稱し自ら院主として診療に従ひ現下夙に患者の信頼を博せりと。

●丸五印丸五商店(岩内町 御鉢内町) 聞く其近年に礎を置き隆々今日あるもの一に信用勉強

に基く先づ吳服古着、太物洋服、防寒具毛織一切を以て店頭を飾り顧客需むるに任ず、主人は資性愛嬌を寶として商賣繁昌を致す、芽出度しといふより贅言を知らず。

●回陽堂佐々醫院(岩内町 橋町) 醫は内外に通じ療懇厚に術巧妙に克く仁術の所以を解する人院長佐々英達君は山形縣最上郡新庄五日町の産安政三年の人たり、家は遠祖三百年來、連綿醫を以て渡世し、君又夙に其蘊奥を研ひ後院を岩内に移し今日の繁榮を極むるもの亦偶然にあらずと云爾。

●三星印吉川材木店(岩内町 宇橋町) 良材、堅木に富むを以て名あり店主長兵衛氏新潟縣新發田町の人、安政元年出世、十八年本道札幌に渡りしの翌年岩内に移住、久しく官海に在りしも後實業に志し、廿七年職を抛つて現業に歸す。

●金精樓(岩内町 御鉢内町) 夜を徹して糸竹管絃の節面白く、料理の新鮮、手際の自慢、流石に遊治郎の絶ゆるなく此樓上に根を生ずもあり、咲き匂ふたる桃櫻、色も香もある大小拍手の嬋妍として舞ひ、窈窕として唄ふ是れ此樓の特色にして色は香でもつ香は色で持つ酒落にはわらず、而して樓主を本間喜介氏と申す。

●岩内見番(岩内町 御鉢内町) 風儀よろしきと美姬細腰に富み、歌舞の菩薩は同見の専有に屬し、金精樓主本間喜介氏の經營する所、現下四十有名の歌妓、何れも氏の意を体し、技藝を磨き、家業を精勵するを以て益々隆盛たる者宜なりと謂ふべき哉。

●武井忠吉君

(古宇郡泊村漁業家)

武井忠吉氏は古宇郡に於ける有數なる漁業家にして信用聲望共に岩宇二郡に高し、蓋し氏は誠實篤行の士なり、誠實以て人に接し、篤行以て世に處す、武井氏の聲名偶然にあらざるなり、看よ氏の家兄忠兵衛氏死亡後の宗家を督し十年一日の如く幼主を補佐したるの誠實を、天下此の誠實あり誰れか敬服せざらんや、武井氏の産を興し名を爲し、老に處して悠然たるもの、元の積善に酬ゆる應報たるや必せり、氏安政四年を以て岩内郡茅沼村に生る先考は忠兵衛氏家代々漁業を経し、氏其の次男たり、少壯青森に赴き、普通學を修め傍ら商業の見習を爲して啓發する處少なからず、而かも商業は其の志に非ず、氏天賦の膽大は家業を繼いで漁業を營むにあり、郷に歸るや銳意家業を援けて漁撈に従事す明治五年獨立分家後も、依然家兄忠兵衛氏を援けて漁業に粉骨碎身し、精勵衆を驚かすものあり天焉んぞ此の精勵の人を捨てんや、年々の收利家産次第に豊に大に其の驥足を伸すに足る乃ち一家を擧げて古宇郡泊村に轉じ漁場を創開す、時に明治十四年たり、自來氏の精勵益々群を抜き、誠實人を服さしむ、村總代人に擧げられ次いで又漁業組合頭取に選ばる、廿六年家兄忠兵衛氏病没し、宗家の嗣子尙幼家計を見る能はず、誠實篤行の氏は直に茅沼村に歸り、自己本家の後見を爲し、家門の榮を支へ、幼嗣子を補佐する十年一日の如く一人敬服せざるものなかりしと云ふ、氏今や岩宇二郡に於ける有力なる漁業家として知られ年々の漁獲數万石、資産名聲共に高きもの積善の餘慶、眞に欽仰すべきかな。

●田中福松君

(古宇郡泊村漁業家)

其の資産より云ふ、田中家は舊に岩宇二郡地に於て屈指なるのみならず、實に本道西海岸に於いて屈指なり、而して福松氏の操守の嚴にして謹慎なる、今も尙は封建時代の風習たりし結髪を失はず、人の呼んでチヨン爺老爺と云はれ、何人も古宇の田中福松氏たるを知らざるはなし、田中氏も又一奇傑なるかな、氏も勤儉自ら奉じ、粗衣に甘んじ質素を旨とし、一見數十万圓の資産家たるを察する能はざるも、事の苟くも公共事業に關するに於いて、萬金を散じて吝むの色なし、性行此の如きを知るに及んで氏や是れ傑中の眞傑なるものならずや、氏天保八年を以て、青森縣東津輕郡蓬田村字廣田に生る、安政元年家兄吉兵衛氏と相携へて渡道し姻戚岩内郡茅沼村武井忠兵衛氏の傭夫となり精勵頗る力む、忠兵衛氏其の力行に服し、少資を與へ氏等兄弟を獨立せしむ、氏等乃ち近海を航し回漕業に従事し小資を得るや、直に古宇郡泊村に受負人田村氏より漁場を譲り受け、兄弟協力漁商の二業を経せんとし、氏は漁業の衝に當り、家兄吉兵衛氏は依然大和船に乗じ、商業の衝に當り奮勵力行倦むの色なし然れども豊なる資本あるに非ず漁業は刺網を營むに過ぎず、商業は僅に轉賣して少利を得るに過ぎず、當時の難苦困憊眞に想ふべきなり、而かも氏等兄弟毫も屈せず奮闘益々力む、不幸明治九年家兄吉兵衛氏病で没す、乃ち商業を廢止し、全力を漁業に濺いでより年々の豊漁茲に家運を開き、自來星辰茲に三十餘年、遂に西海岸屈指の資産家たる今日を贏ち得たり、傑中の眞傑田中福松翁切に自愛すべき也。

●武井忠兵衛君

(岩内郡茅沼漁業家)

岩宇二郡地多くの武井家を見る、盡く資産家たり、而して武井忠兵衛家は其の總本家たり一門岩宇の地に顯るゝに於いて武井家も又榮なるかな、家祖忠兵衛氏は青森縣東津輕郡蓬田村武井三右衛門氏の長子、偶儻にして大志あり、天保九年岩内に航し身を漁夫の群に投じ、辛酸力行數年、小資を貯ふると共に岩内郡茅沼村に居を下し、依然として漁業に従事し、春夏の二期は蒼海に波濤と戰て漁業に従事し、秋末より冬期山に入りて積雪裏木炭を焼き、多年の辛勞空しからず建網を營むの隆を來し自來漁場を開く者二十餘ヶ所、經營着々年と共に成効し、某年大漁に對し漁獲實に三万石に達せし事ありと云ふ、以て其の盛大なりしを察知し得べし、是れより先き安政三年氏茅沼山中に石炭を發見し、之を幕府に上申し、幕府之を採掘し、氏又斯業に従事し利する處多く、武井家資産の膨脹管に漁業のみならず鑛業經營與て其の力を多しと云ふ、初代忠兵衛氏は斯くの如く、一代にして巨富を來せし英傑なりしなり、惜い哉明治五年病で没す、二代忠兵衛氏は先代の長子、先考の衣鉢を繼ぎ英邁先考に劣らず、達眼夙に漁家副業の必要を看破し、力を農業に盡し、岩内郡發足の地に二十万坪を開く、何んぞ夫、烟眼達識なる而かも天年を斯人に假さず、明治廿六年卅九歳を以て没せり、現代忠兵衛氏は二代の長子十五年を以て生る、先考没後年尙は幼叔父武井忠吉氏家道を補佐す、今や氏長じて嚴たる武井總本家の主、銳意家道を修めて其の門地を辱めず、而かも尙は春秋に富む前途想ふに多望なりと云ふべきなり。

●田中吉兵衛君

(岩内郡堀株漁業家)

古宇郡の奇傑として知らるゝ、田中福松翁の総顧問として福松翁を援け、日進月歩の趨勢に處し、此の老奇傑をして些の失態を來さしめず、田中家の勢威をして益々隆ならしめしは一に吉兵衛氏の力たるなり、奇傑福松氏と吉兵衛氏とは叔甥の間にして福松氏の吉兵衛氏を信頼する篤く、吉兵衛氏も又福松翁に盡して誠意溢るゝが如きもの、真に一美談たるを失はず、去れば岩宇地方の人士皆言ふ、福松翁を動かさんとせば、先づ吉兵衛氏を説かざるべからずと、以て其の間を窺知すべきなり、吉兵衛氏新進の教育を受け、新智識に富み獨立漁業を経するの傍ら、田中福松家の総顧問を爲す、精力の人にあざれば能はざるなり、意志の人にあざれば能はざるなり、氏が岩内郡堀株村一流の人士として重せらるゝ故ありと謂つべきなり、吉兵衛氏明治四年を以て青森縣東津輕郡蓬田村字廣瀬に生る、幼名は由松、明治十一年父に死別し、幼少の身を以て家を繼ぐ、明治廿二年本道に航し、叔父田中福松翁の許に身を托す、福松氏大に氏の才辯を愛し、漁業其他の監督を爲さしめ田中家の總顧問と爲す、氏精勵克く力め、福松翁の委托を辱めずして、其委托に奮勵する前後十ヶ年、卅二年堀株村茶津に獨立漁業を營んでより、氏の才幹は益々發揮せられ巍然たる今日の位置を來せり、蓋し氏の田中家に盡すもの前後十ヶ年、以て其の堅忍を見るべき獨立後成効して嚴たる一家を爲す、以て其の才幹を見るべきに非ずや、身は堅忍にして精力に富み、智に富み識豊なり、氏の成効故ありと謂つべきなり。

●川村慶次郎君

(古宇郡泊村漁業家)

川村家は古宇郡泊村に於ける知名の漁業家なり、其の功勞の泊村人士を益したる大なるのみならず又實に同村に於ける舊家たるを以て名あり、家祖慶次郎氏は青森西津輕郡岩崎村字大間越の人、勇邁夙に志を本道に寄せ、少壯江差に航し一商家に入り、親しく諸般の状況を視察し、更に航海業を企て、和船に乗じて本道各地を航海し、其の状況を詳にするに及んで、居を古宇郡泊村に卜し、漁場を開闢し始めて漁業に従事す、時に弘化四年たりしに於いて、其の渡道の如何に古かりしかを知るべきなり、斯くして氏は泊村に土着し、熾んに漁業に従事し、爰に川村家の基を樹て、其の居宅並びに倉庫の如き、實に慶應元年の建築になると云ふ、當時交通の不便より生ずる漁業家の難と不利云ふべくも非ず、其の堅牢なる倉庫を建設して、漁獲物を保護したるが如き、以て氏の烟眼敏才なりしを察知すべきなり氏又力を公共事業に盡し其山ノ上發足二村に於いて十萬坪の原野を開墾し、農民を移住せしめたるの功に至つては特筆せざるを得ず、長子久太郎氏又篤行を以て村民に重せられ、明治十三年選ばれて泊、盃、興志内三村戸長に任せられ、村治の衝に當り、幾多の事務を整理し、令名高かりしも、惜い哉十八年病んで没せり、現代慶次郎氏は所謂三代目にして明治九年に生れ、幼名は貞太郎、好く祖父の衣鉢を繼ぎ長じて家を繼ぐに當り、益々漁業を擴張し、居村の舊家たる門地を辱めず、又父祖の教に従ひ力を公共事業に盡して一日の安を欲せず、川村家の盛名をして愈々盛たらしむ、敬すべきかな。

●渡邊角次郎君

(岩内茅沼村漁業家)

渡邊角次郎君は、岩内郡茅沼村に於ける有志家なり、漁業を経するの傍ら、岩内炭礦合資會社の船運搬を一手に引受け公共心に篤きを以て令名あり、渡邊氏萬延元年二月を以て岩内郡茅沼の地に生る、先考角藏氏は江州の人氏其の長子たり、漁業を以て家計を経す、元治元年古宇郡那内村に移るや、氏父を援けて漁撈に従事し、漁夫に卒先して激浪怒濤と戦ひ、備に辛酸を嘗めて經營に苦心せしも、年々見舞ひ來れる不漁を如何とも爲す能はず家道次第に衰退し殆んど挽回の策なからんとす、而かも數奇渡邊家を去らずして、父角藏氏病床に親み、療養年を越ゆるも恢復の色なく遂に白玉樓中の人となる、角次郎氏痛恨嗟嘆殆んど心神を敗らんとす已にして、翻然悔悟嘆身を傷ふの親に孝ならず寧ろ奮闘家道を興すの亡父の靈を慰むるものなるを悟り、孜孜として家政を整へ經營に腐心し、年々の精勵と勤儉とは、將に倒れんとしたる渡邊家の家運を恢復し資産今日の名を爲す基を開けり思ふに渡邊氏は精力主義の人にして、奮闘家たるの素質あるの士、然らざれば家運を復し隆今日を來すを得んや、後に事を爲さんとすもの須らく氏の奮闘に省慮して可なり、明治廿三年往年の漁場たりし茅沼村に建網一統を開始し、岩内炭礦合資會社成るや、其の運炭解を一手に引受け以て今日に及ぶ令息角太郎氏、明治十八年を以て生れ、福井縣小濱水産學校を卒業後更に東都に遊學し、歸郷後徴兵検査に合格し、目下歩兵第廿六聯隊に在營しつゝありと云ふ、渡邊家將來の發展と進運期して待つべきなり。

●石井利兵衛君

(古宇郡泊村漁業家)

石井利兵衛氏は古宇郡に於ける人望家なり、氏の資性謙良自ら奉ずる質素にして、人に對する恩愛の情厚く、舊願に懇切なるが爲め期せずして衆望氏に歸したるものならん乎、氏安政四年九月廿日を以て陸中國大槌町に生る、家は一郷の豪族にして天下屋又は紀の國屋と稱す、先考は平兵衛氏と稱し、氏其の長子たり、先考任俠客を喜び士を愛し、食客常に家に満てりと云ふ、不幸にして維新後家道衰へ又舊の如くならず、先考意を決し本道移住を企て明治九年四月古宇郡泊村に於ける伯父石井金助氏を訪ひ、足を泊村に留めて漁業に従事す、平兵衛氏辛酸備に嘗め困憊に堪へ、明治十一年に到りて漸やく建網を營むの機運を來せしも當時ハ粕相場下落し、依然として經營頗ぶる難し、利兵衛氏十四年郷里を辭して泊村に父母を省し自來奮勵漁業に銳意し父を援けて家道の恢復を圖る、而かも幸運來らず、氏の焦心苦慮言語に絶す、去れど氏屈せず萬難と闘て經營の衝に當り父を慰めて奮闘群に絶す廿一年豐漁を爲し、聊か意を安するや父平兵衛氏病んで又起つ能はず、天壽如何とも爲す能はずとは云へ、氏の痛恨想ふべきなり、自來氏家を繼ぐと共に着々家政を整理し、負債償却の策を講じ、三四年を出でずして數千金の負債を償却したる其の經營の才又偉ならずや、斯くして年々豐漁は年々資産を増殖し卅年家屋新築に着手し、年を費す三ヶ年にして竣工し宏壯なる家をなせり、今や氏資産豊に徳望又高く過去の辛勞夢の如しと雖も、氏をして今日あらしめたるものは氏辛勞の結果なるに於て氏傳ふべき也。

●吉田由藏君

(古宇郡泊村漁業家)

古宇の地漁業家多しと雖も、其の成効の迅速にして、産を興し名を爲すの早かりにし於いて好く吉田由藏君に比肩し得るもの少なし知らず君の成効の速なりし理由如何、漁業界の事多くは天運に出つると雖も、又着眼の妙經營の巧に因る多し、吉田氏の成効の速なりしもの、知るべし氏の如何に經營の才に富み先見達識の人なるかを、吾人は本道漁業界に於ける人材の欠乏を嘆ずるものなり、今爰に吉田氏を得て寔に深く意を強ふせずんばあらず吉田氏は本道江差の人、安政五年十一月江差小平澤町に生る、幼名は幸吉、先考由藏氏夙に漁業に従事し明治の初年より古宇郡興志内村に於いて漁業を経す、然れども固と是れ渺たる刺網漁業に過ぎざるのみならず、先考常に眼病に悩みしを以て、氏は弱年十五歳より父を援けて漁撈に精勵せしと云ふ、明治十二年一時江差に歸郷し、依然漁業に従事し、刺網漁業を爲す十有餘年に達せしも、江差の地次第に鯨の來遊を來さず、打ち續ける凶漁如何とも爲すなく、前途知るに足るに至るや、氏奮然先考を奉じて、古平郡泊村に赴き、居るを同村に卜す、時に明治三十年たり、吉田家の今日巨萬の富を擁し、建網數ヶ統を経する大漁業家たるの實質を備へ得たるもの、實に三十年より今日に達する十二年間に於ける成効たるに於いて氏成効の迅速なる驚嘆に價すべきなり、卅七年父病没後山藏を襲名し以て今日に至る、氏力を教育の普及に盡し、學務委員に擧げられて令名あり、吾人は吉田氏成効の迅速なる一に氏經營の巧に因るものなるを知る、吉田氏も又偉才なるかな。

●西宮喜助君

(古宇郡泊村漁業家)

西宮家は古宇郡に於ける知名の漁家にして喜助君は古宇に於る新智識なり。西宮家の祖利三郎氏備儀にして雄邁頭領の才あり、弘化元年佐藤榮右衛門の受負漁場支配人を爲し同四年獨立古宇郡に漁業を經し、後古宇郡泊村に移轉し漁場數ヶ所を開き大に漁業を擴張す。安政二年江差五勝手村の漁民建網に反對して暴舉を爲し有名なる網切り騷動を演出せしより松前藩々令を以て建網を禁止し、漁業家の困憊其の極に達す、利三郎氏慨然建網禁止の令を解かんを期し、挺身函館奉行に訴願し建網禁止の不可を説き、遂に函館奉行を動かし解禁の布達となり、各郡の漁業家始めて蘇生す、封建時代此の如きは、事異敷に屬し、利三郎氏の名聲忽ち傳へられ、世人盡く其の功を湛ゆ、養嗣子彌吉氏は宮城仙臺の人、本道に航し身を漁夫の群に投じ、明治四年利三郎に使役せられて其の才幹を認められ、遂に養嗣子と爲つて西宮家に入る。利三郎氏は備儀彌吉氏は沈毅、斯くして經營着々其の歩を進めしも、明治十七八年の交、比年凶漁に見舞ふ、加るに海産物の時價下落するあり、西宮家の家産月に傾き負債又二萬金に及びしも彌吉氏巧に家政を整へ、其經營の巧西宮家をして又家運を恢復せしめ、資産家として知らるの基を爲せり、彌吉氏卅七年五十五歳を以て病没し、利三郎氏、九十五歳の高齡に達し四十一年瞑目す、現代喜助氏は花巻町の人堀田を姓とす卅五年廿三歳を以て彌吉氏の養嗣子となりしも西宮家を繼ぎ、新進の智識、經營の才、西宮家をして益々盛大ならしむ西宮家代々好嗣子ありと謂つべき也。

●金田熊次郎君

(古宇郡泊村漁業家)

金田熊次郎氏は、古宇郡泊村に於ける回漕店として、將た海産商として知らるゝの人士なり。氏安政五年六月新潟縣刈羽郡宮川町に生る先考は長右衛門氏、家代々海産商たり、明治四年發奮志を立て、本道に航し、北門の新天地に爲すあらんを期す、足を江差に留めて吳服商森氏の商店に入り精勵五年大に主人の信用を博せしも、氏の志は海産にあり、八年同店を辭し、貯ふる處の少資を以て海鼠鮑の仲買に従事し、十年小樽に出で、海産仲買に得る處少なからず、十五年更に故國の産物網等を販賣せんを企て、畫策着々功を奏し、全力を同品販賣に濼くに當りて偶々商機を誤り大失敗に見舞れ、盡く資金を失ふ、止むなく流浪漂泊の人となりしも、氏の意氣は益々熾んに毫も屈せず、行く／＼古宇郡泊村に赴き同村漁業家川村慶次郎氏の帳場として雇はれ精勵二星霜、十八年辛ふして同村に一家を構へ獨立生計の端を開けり、當時古宇岩内間漁船の航海なく、交通上の不便、眞に言語に絶するものあり氏深く之れを慨し、如何にもして此の不便より古宇の地を救はんと、大に汽船會社設立の必要を唱導し、之れを各村有志に計り、幸にして汽船會社設立の議決するや卒先回漕店を開く、去れど汽船會社の經營充分ならざるあり、氏奮然起つて更に有志を説き、廿三年遂に一汽船を新造し、之れを古宇岩内間の航海に専用してより始めて運輸交通の便完く、一郡の士其の利便に浴す、斯くして氏は多年の宿望たりし海産商を兼ね、多年の辛勞精勵遂に泊村有數なる商店として知らるゝ今日を來せり又偉ならずや。

●豊吉黙笑師

(古宇郡泊村法輪寺住職)

古宇郡泊村に於ける法輪寺は古宇郡に於ける隨一の古刹たり、開基梅本悦道師、文久二年時の寺社奉行牧野越前守に直願し古宇の地泊村に一字を建立せんを直願し、其の許可を得て建立に着手す、年を閲する十有餘年間、財を費す一万二千金、斯くして宏壯輪魚の美を極めし法輪寺建立さる、開基梅本師の功と勞と永く没すべからざるなり、自來法燈益々炳に寺門の隆年と共に熾なりしも、惜むべし明治廿一年祝融の災に見舞れ、一山を擧て烏有に歸せしめ、郡民聲を等ふして之を痛惜す、二代住職桑山晴雲師、深く本寺の烏有に歸したるを慨し、之れが再建を發願し、有力なる檀信徒を説き、身又親しく各地を奔走して喜捨金を募り、發願空しからず、同年直に再建に着手し工年を費す三閏年、遂に現時の堂宇を再建し輪魚の美敢へて舊時に劣らざるに至る、桑山師の功又長く傳ふべきなり、現代三世住職豊吉黙笑師は岐阜縣の人、元治元年同國山縣郡小倉村に生る、幼にして佛門に入り同國群布村智志院住職桑山月窓師に就て入衆修學し、善智識たるの素を養ふ、十九歳月窓師に従ひ、越後國北蒲原郡河東村新光寺に入り、益々佛典を研鑽す、黙笑師、智辨に長じ説教に巧に、一度獄裏囚徒の説教を企つるや、監獄布教師として其の業に銳意する卅年より卅八年に及ぶ、同年歩兵十六聯隊第卅聯隊の軍隊布教師として得意の智辯を揮ひ大に名聲を馳す、四十一年五月法輪寺檀信徒の招に應じ入寺三世住職たり、師入寺以來月尚は淺しと雖も、其の高徳は檀信徒の隨喜となり、遠近其の高徳に服す。

米穀 荒物

黒松内停車場前

澤田商店

吳服 太物

其他 雜貨

鐵道 貨物 全續

- 東京九木印三立社取引店
- 函館九和印和田組取引店
- 小樽○印栗山組取引店
- 小樽二印北都組取引店
- 小樽九二印西谷組取引店
- 同 九大印運送取引店
- 同北印北海運輸組取引店
- 札幌九北印運送取引店
- 小樽九イ印日本組取引店

黒松内停車場前

澤田運送部

米穀荒物
吳服太物
澱粉製造
日本肥料

目名停車場前

澤田出張店

店主 小林 藤作

各地接續

○印栗山組取引店

九和印和田組取引店

北印北海運輸組取引店

目名停車場前

澤田運送部

米穀荒物雜貨
吳服太物雜穀商

昆布驛

澤田出張店

店主 堀田 佐七

昆布停車場前

堀田運送部

各地接續
荷物取扱

本店 壽都大磯町



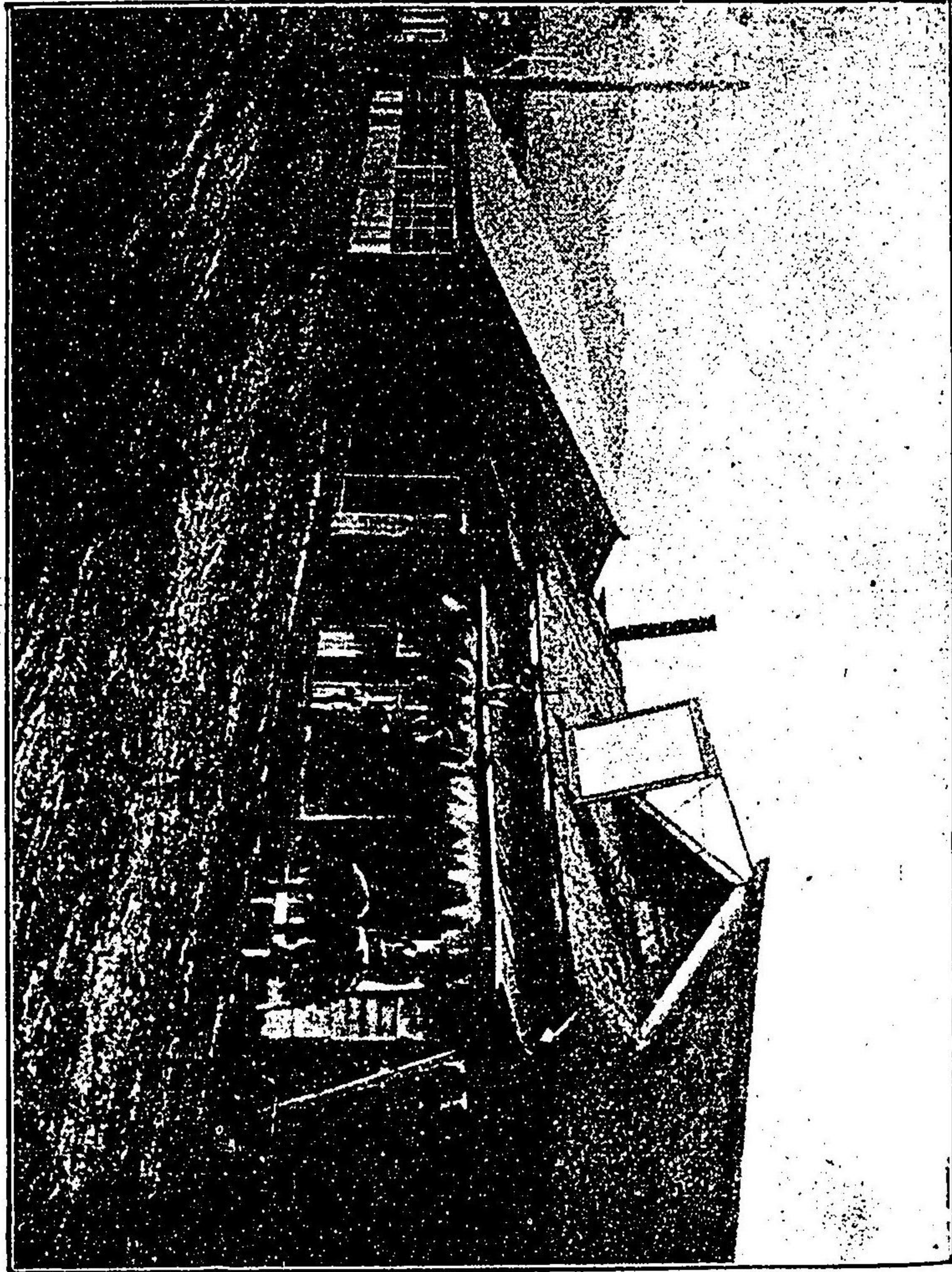
株式會社 壽都銀行

電話 (六番)

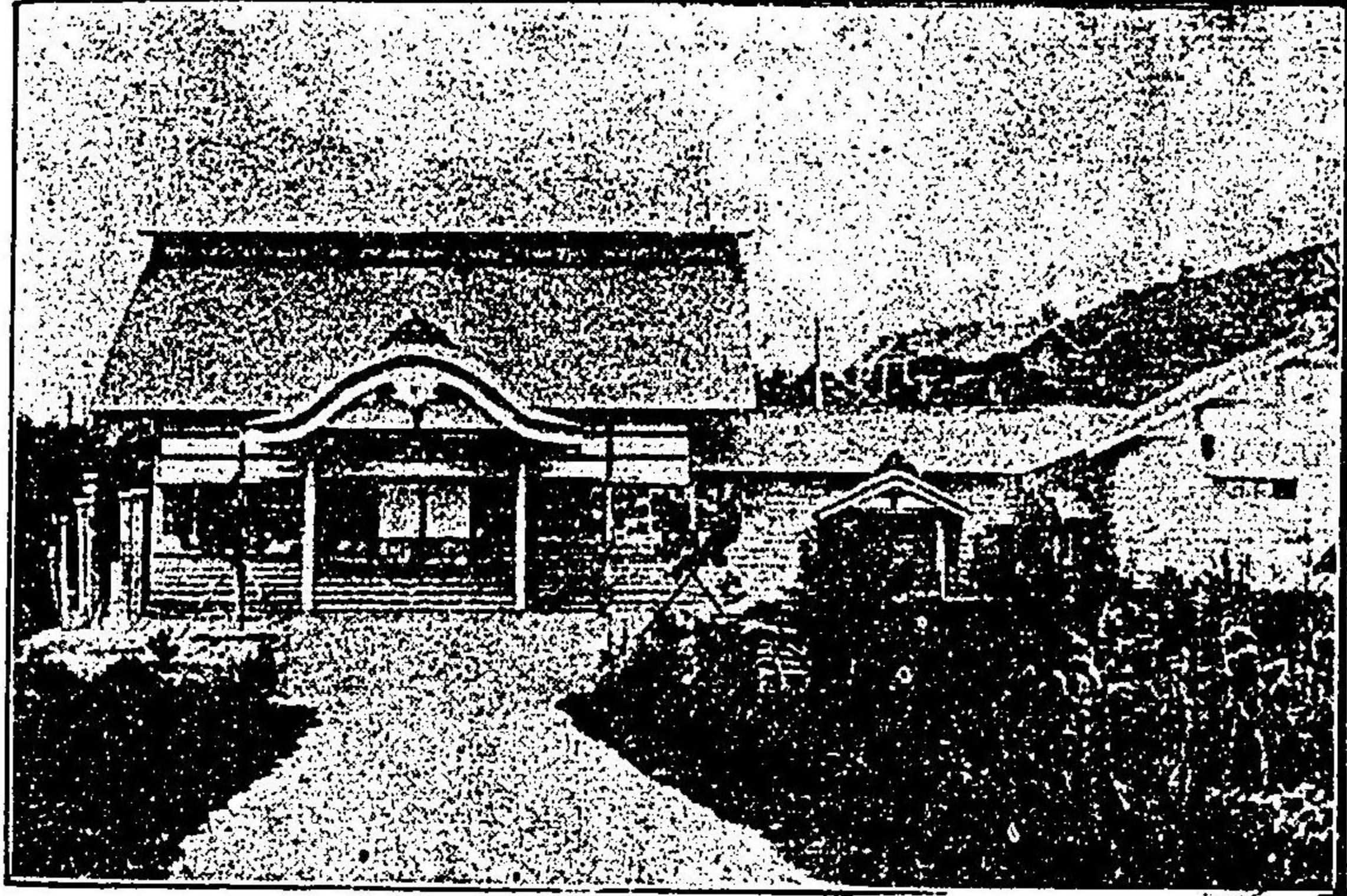
出張所 歌葉郡有戸

余市町字山碓町

水産業 一横濱竹藏



店子菓那太源由江 通塲車停町市余

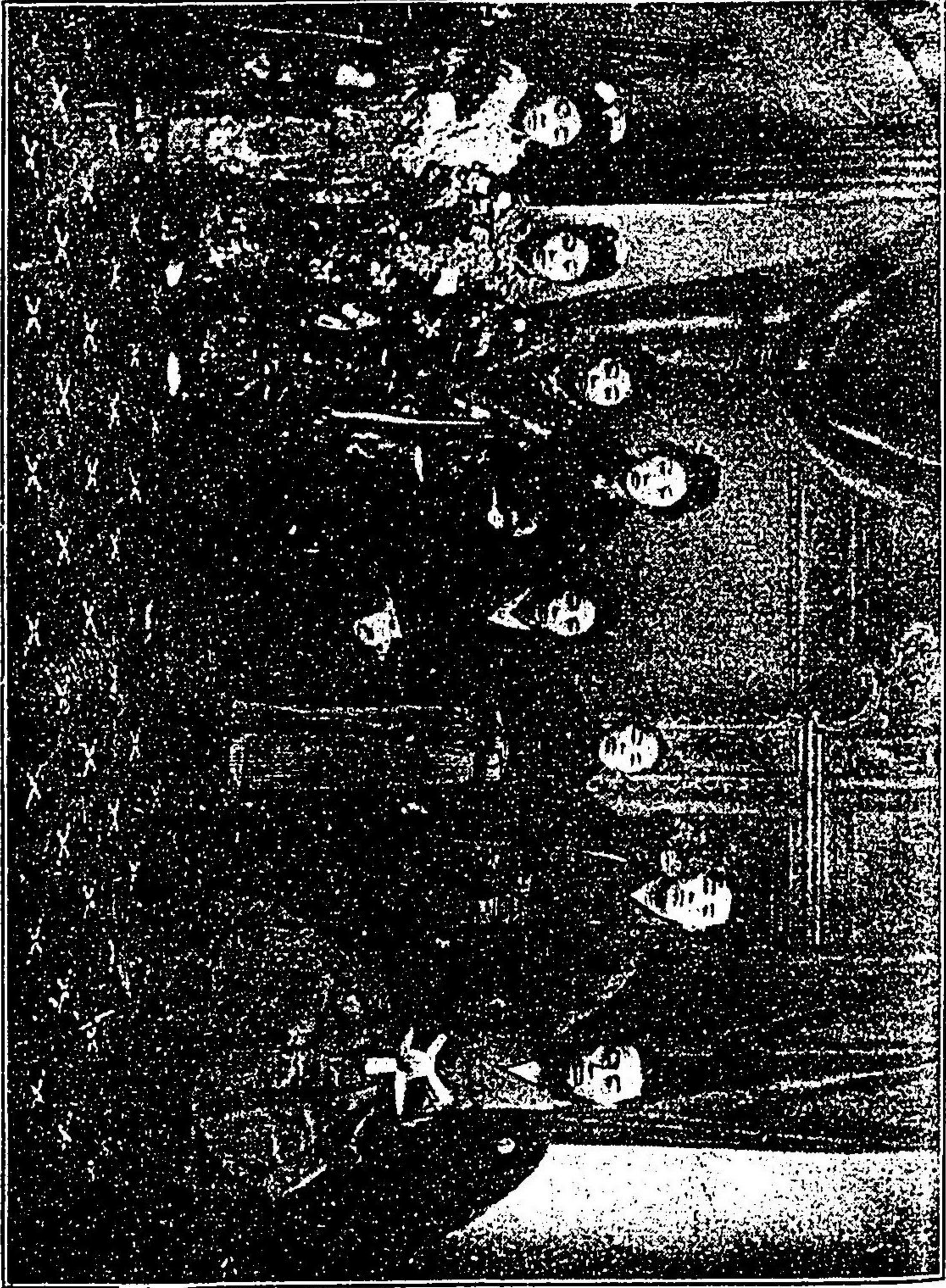


寺乘大町市余



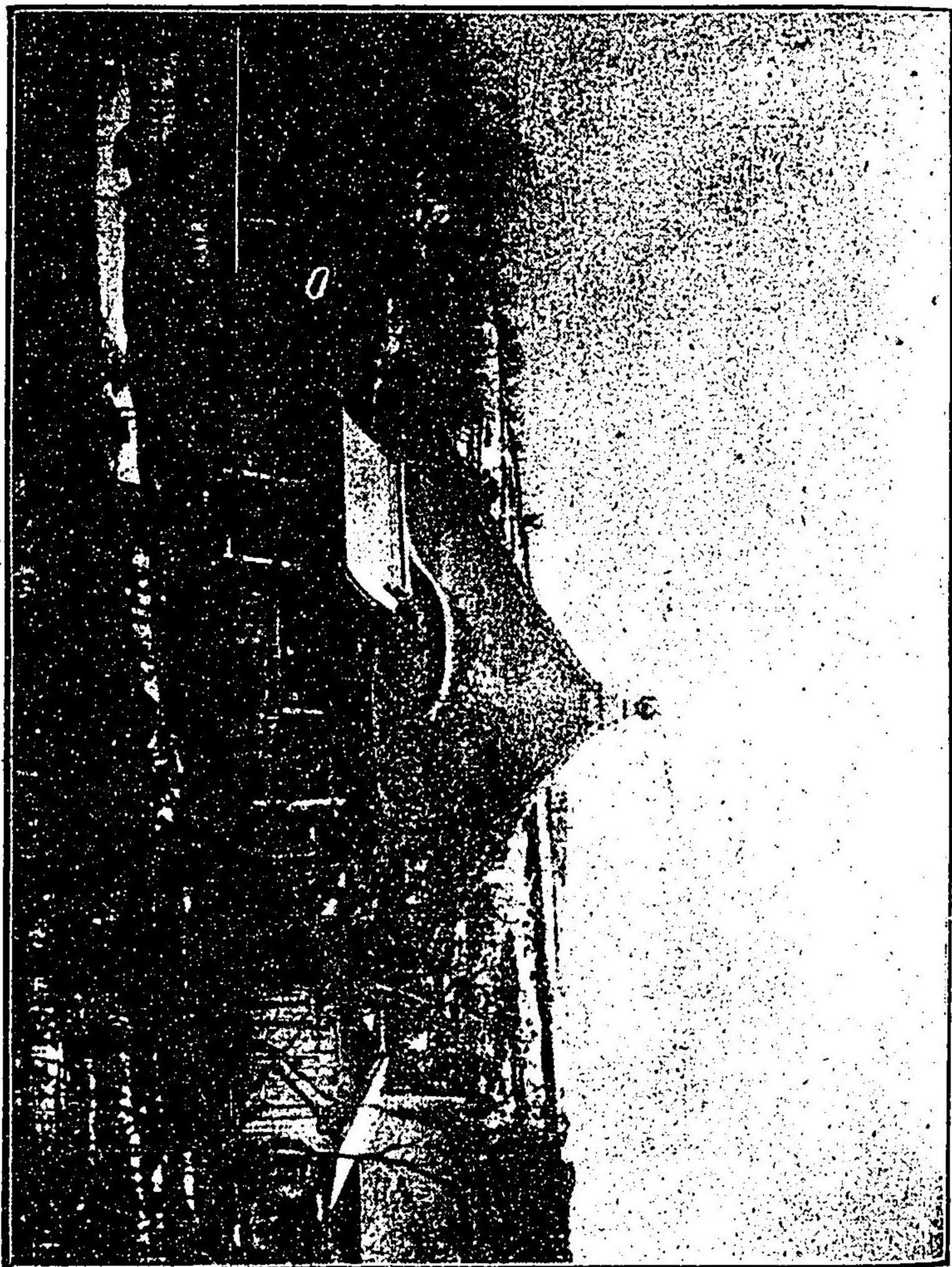
君外玄澤金 職住寺乘大町市余

庭家ノ君斯太勝谷世町部壽



園邸ノ君秀賢田長世 村泊郡宇古

寺輪法山龍瑞 村泊部宇古



店藥堂盛大田池 町內岩



余市町醫師 今村省哉君



余市町醫師 吉川省三君

內外科

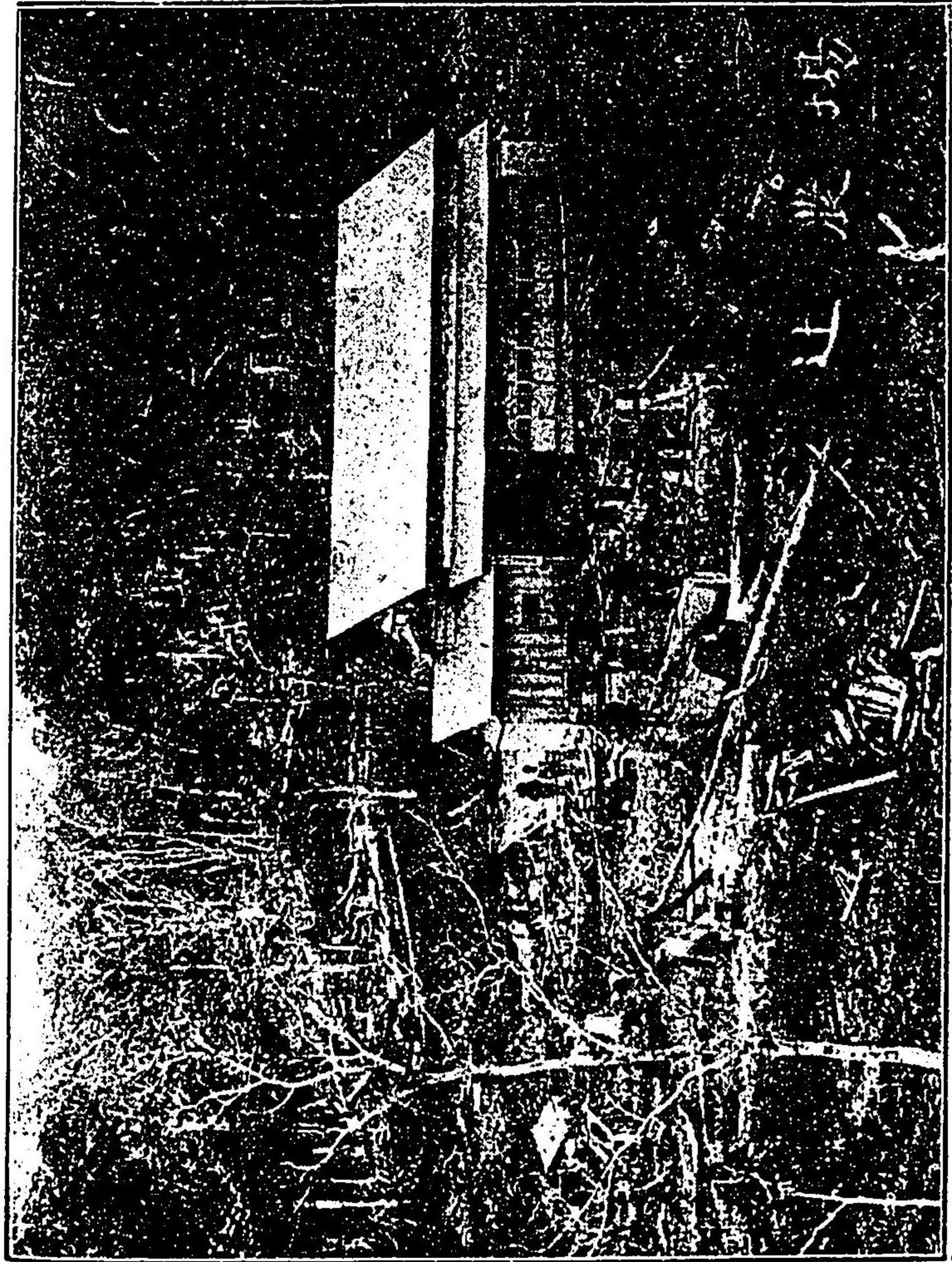
余市町字大川町

共濟病院

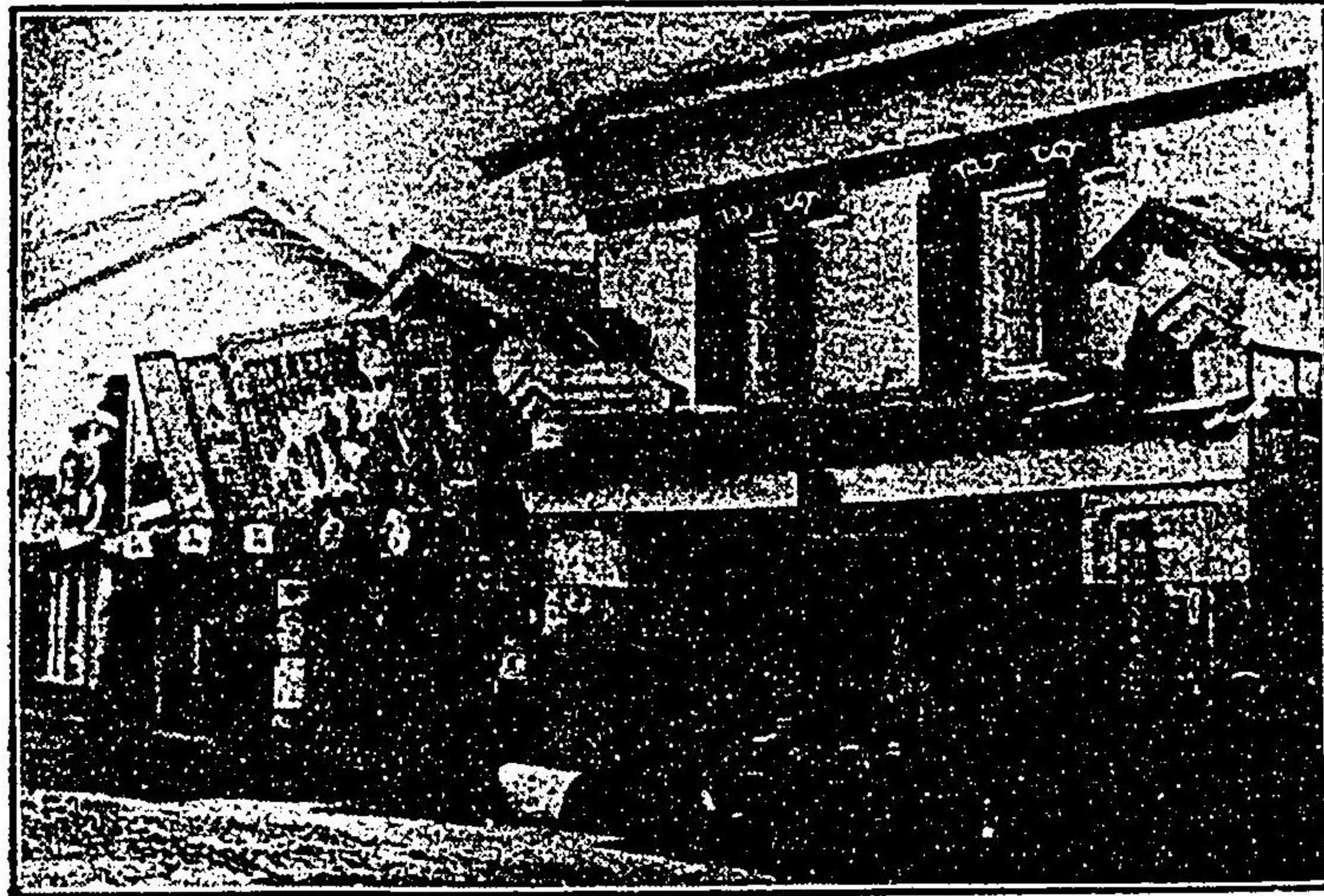
電話(六十九番)

院長 吉川省三

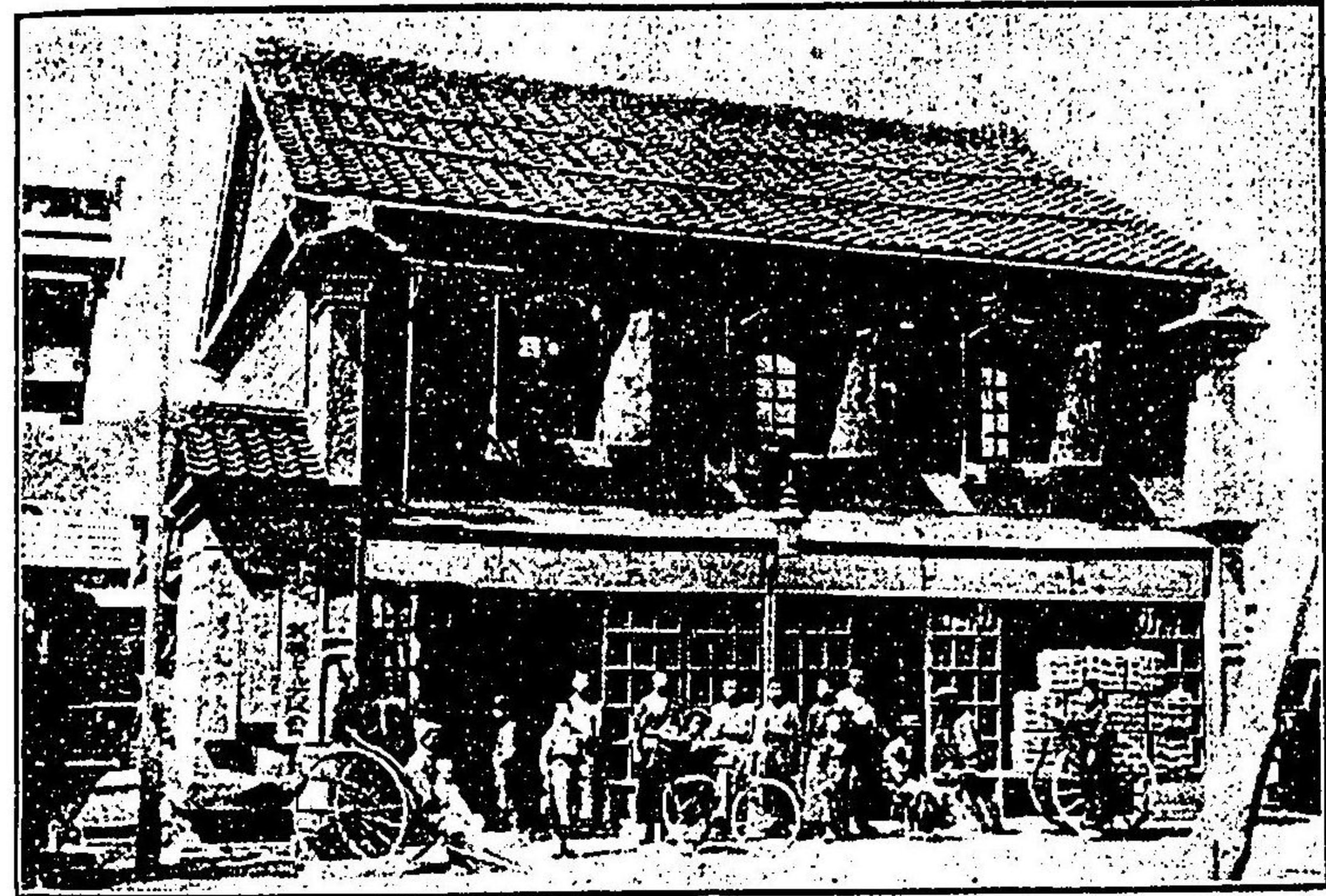
副院長 今村省哉



南 氏吉本 法名目村別尻尻 湯場



余市町花輪商店



壽都町中田吳服店

商 品 目 次

藥種賣藥化粧品
寫真用器並ニ材料
醫療用諸器械
和洋紙洋酒罐詰
雜貨日用品

余市町大字澤町六番地
電話(六十八番)
花輪藥種店

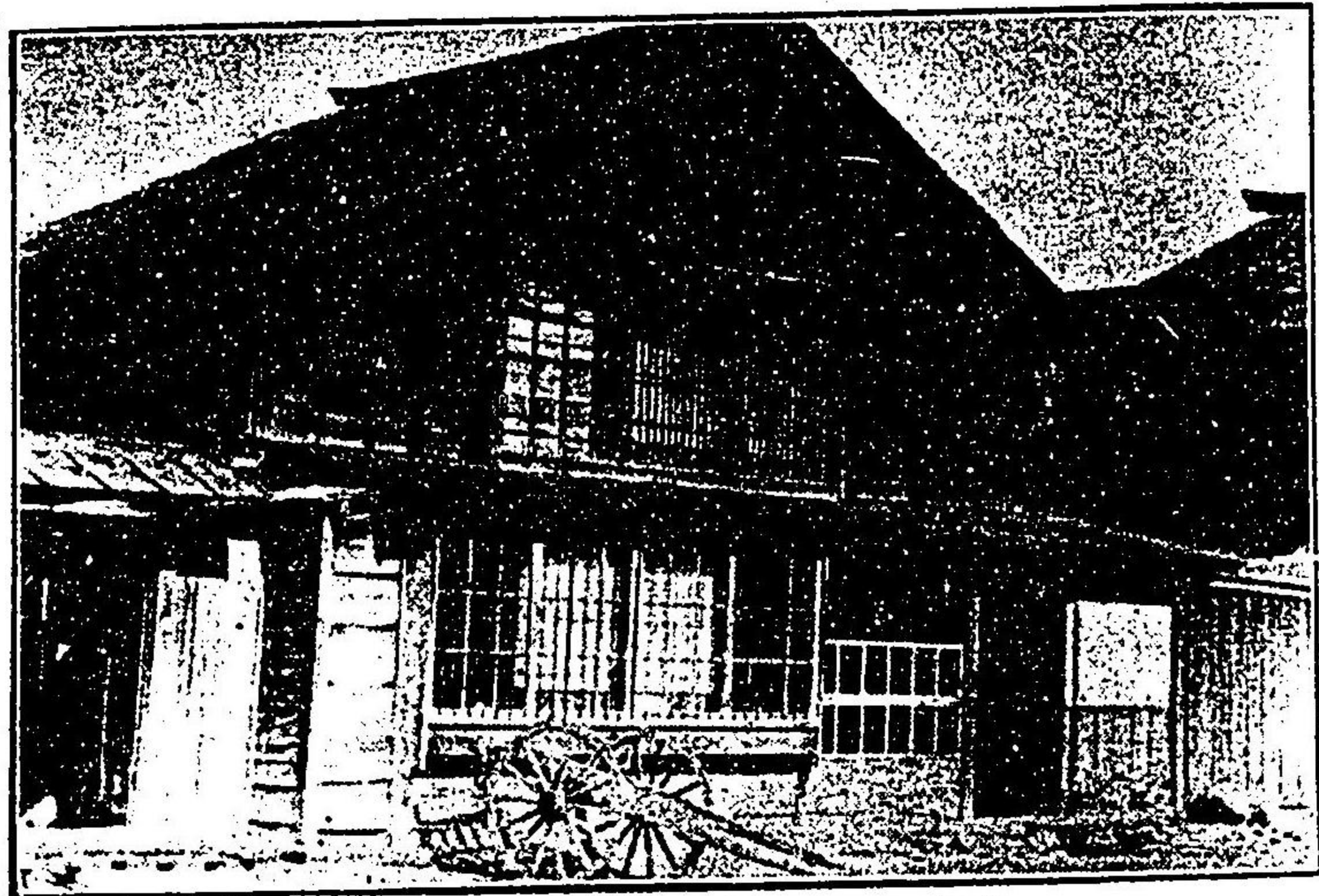
銅鐵打刃物
岩糸口一ツ
釣道具漁器具
板硝子塗料材料

余市町大字澤町六番地
電話(六十八番)
花輪金物店

吳服太物和洋小間物
洋酒罐詰卸小賣
度量衡器販賣

壽都港大磯町
電話二番
中田商店

煙草元賣捌商
東京海上保險株式會社代理店
帝國火災保險株式會社代理店
大日本生命保險株式會社代理店
愛國



余市町一山キ印 本間支店



壽都港 梅本吉三郎君

高等
旅館

◎客室清楚

誠實勉強

壽都港大磯町

吉梅本吉三郎

海陸物産商

電話(二十一番)

電路(ムメト)又ハ(ムメ)

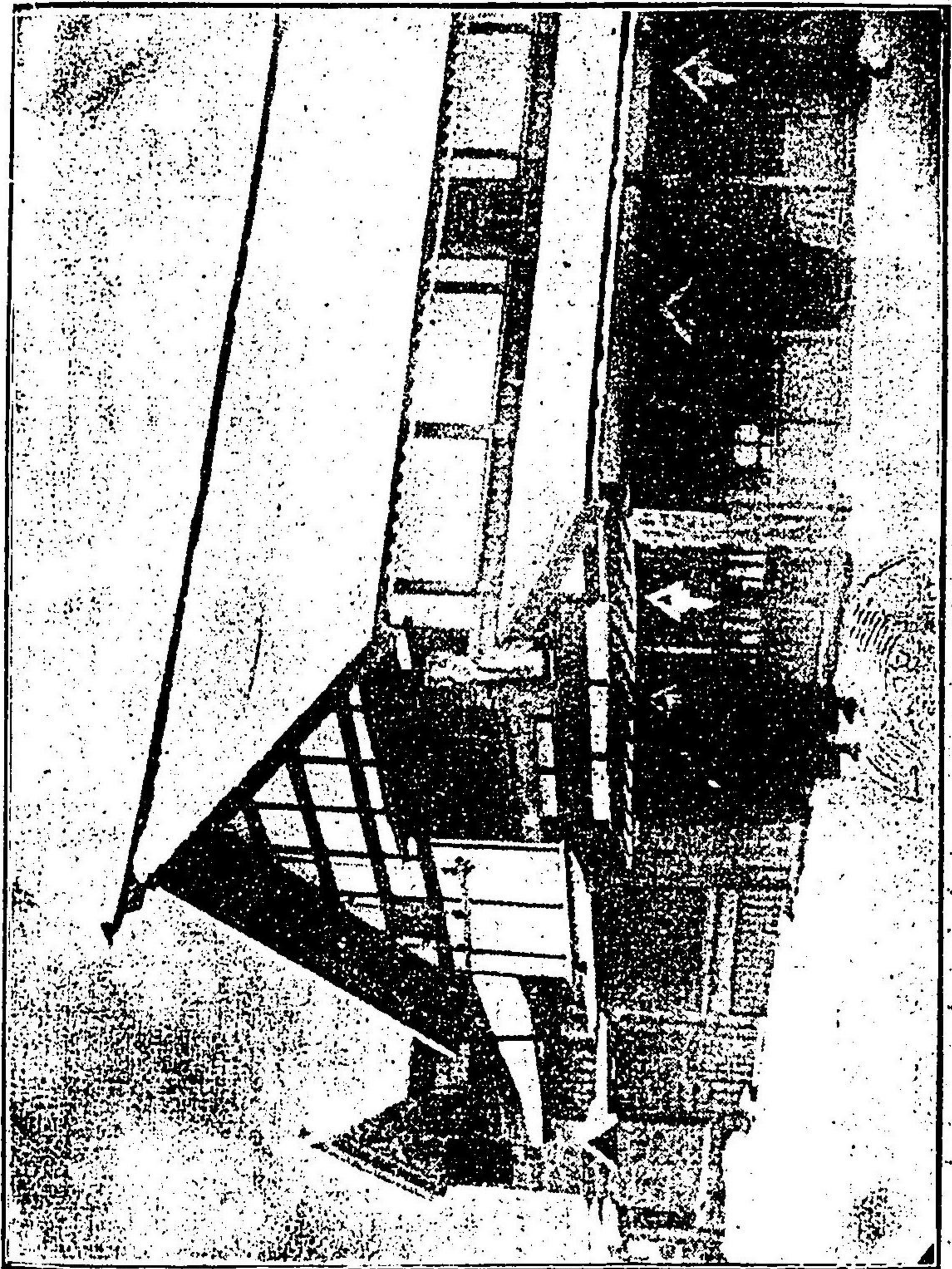
海陸
物産
商

余市町大字濱中町

本間支店

電話(三十一番)

余市町 金澤呉服店



今金澤呉服店

は極めて確實に極めて廉價に總て御得意
大切を旨として營業をなせり

今金澤呉服店

は意匠豊富極めて敏捷に嶄新に流行の粹
を集めて需用に應ず

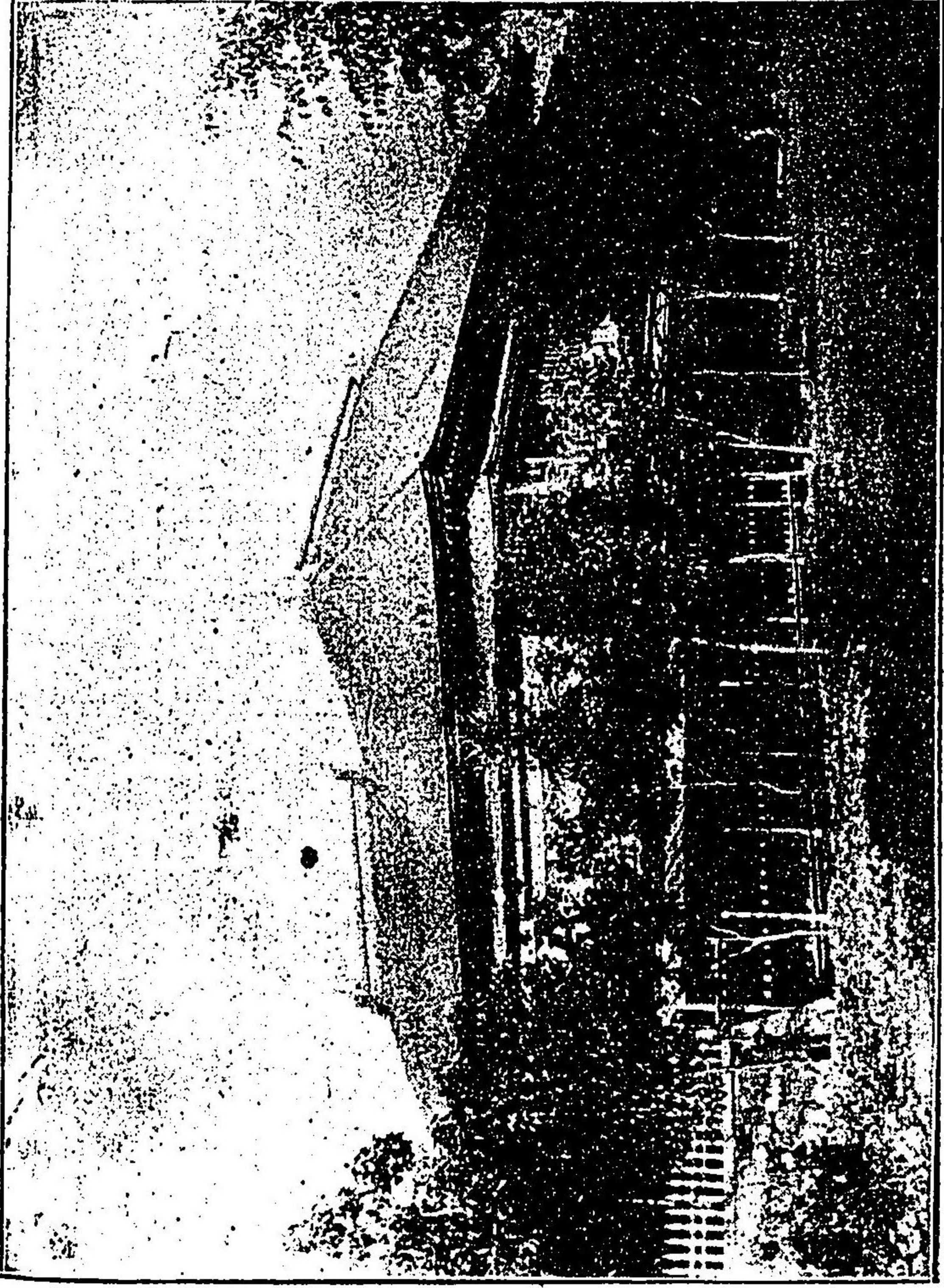
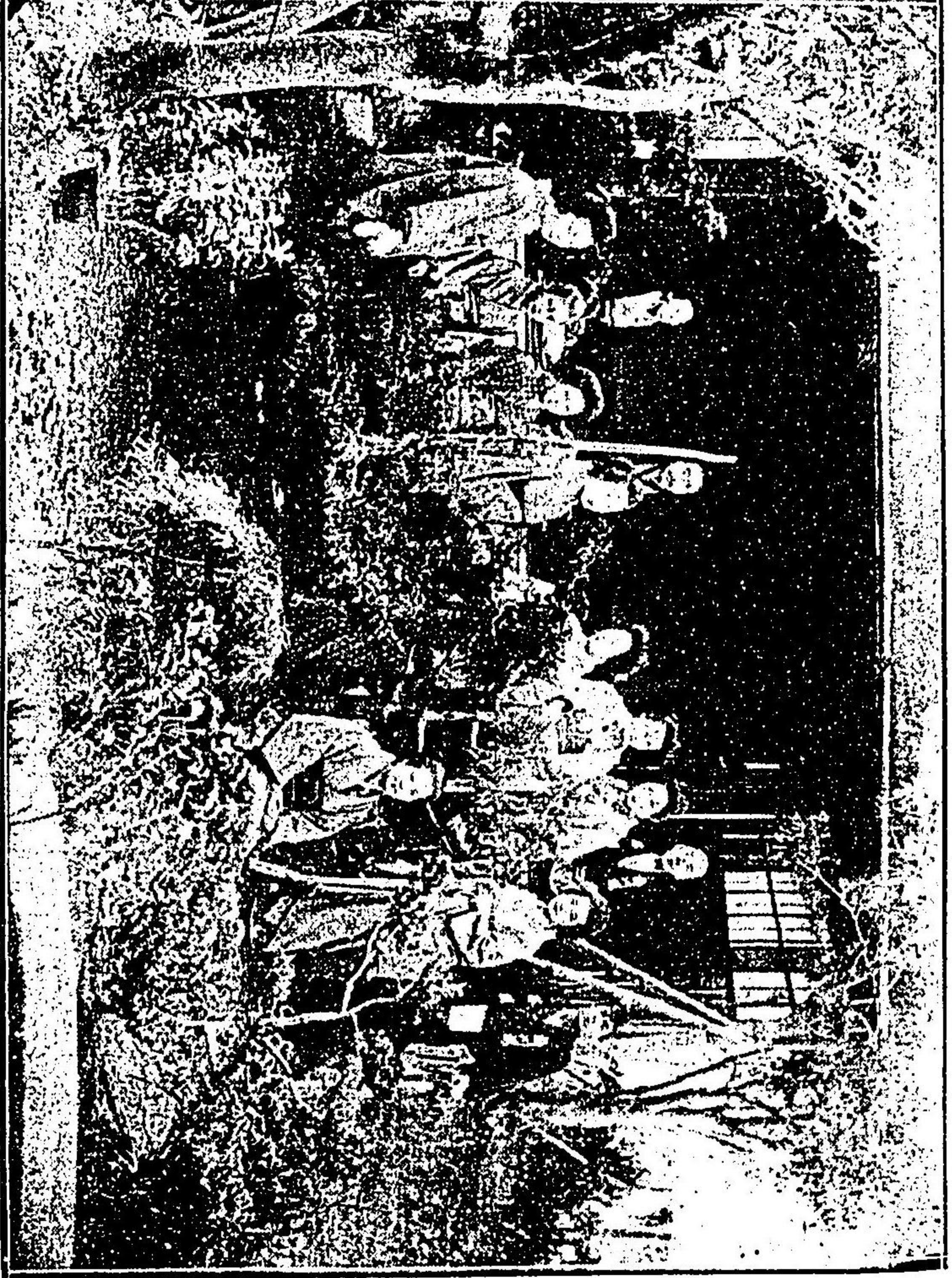
今金澤呉服店

は萬般の商品を精撰し極めて便利に極め
て迅速に調達せんことを期す

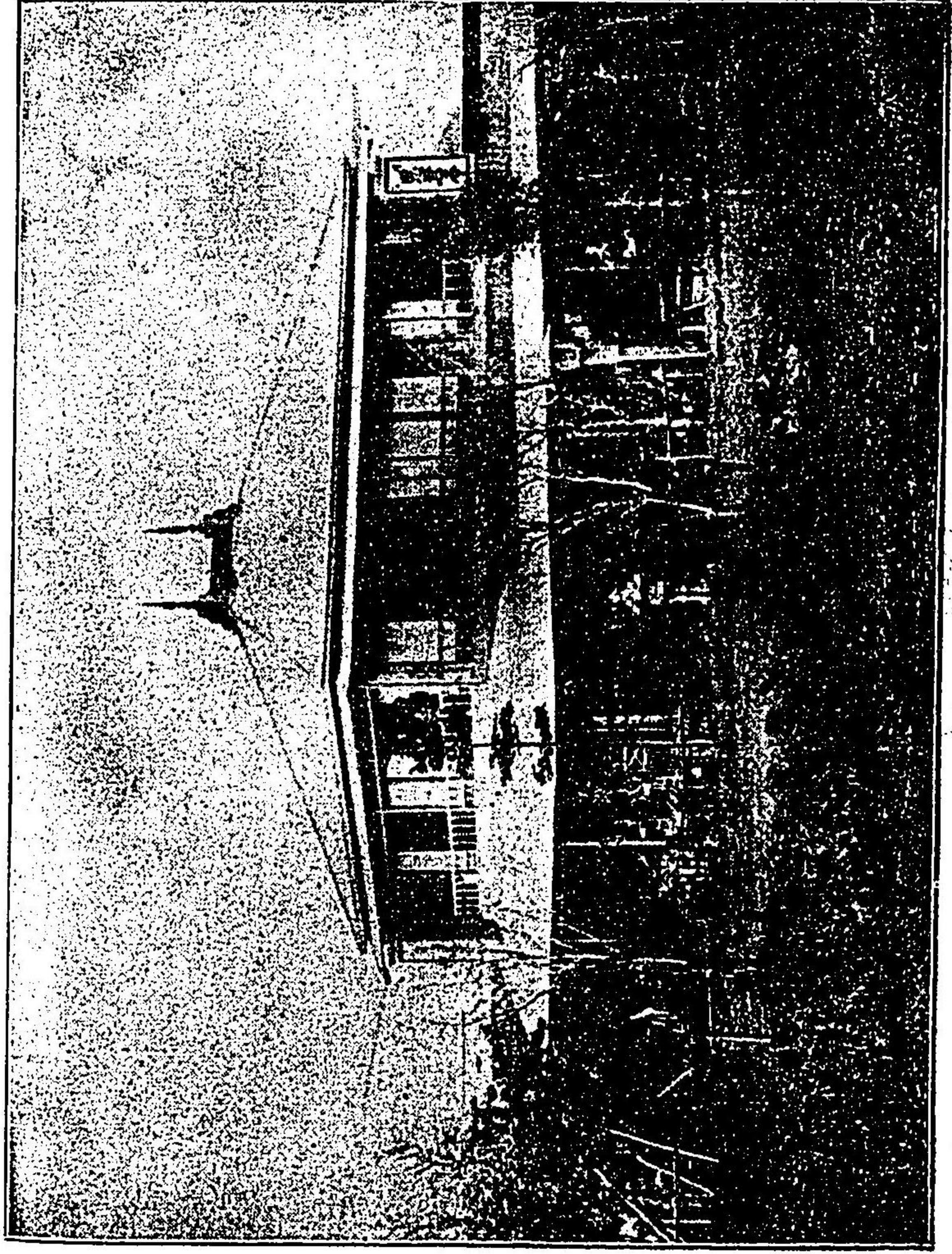
今金澤呉服店

は柿屋縞を販賣し最も徳用なる手織なり
噴々たる好評世上に定論あり

横川梅町市余



横川梅町市余



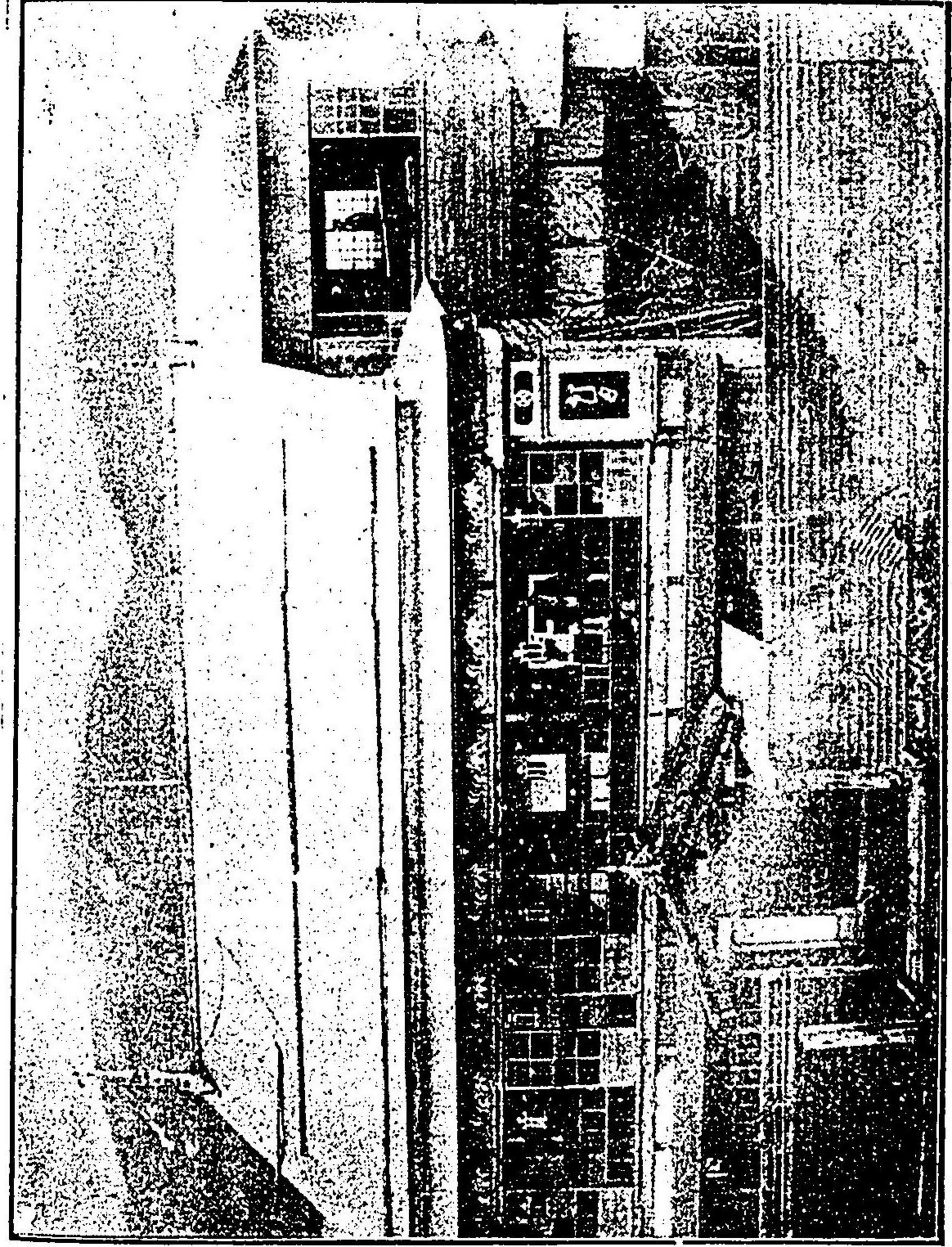
余市町停車場前 思君亭



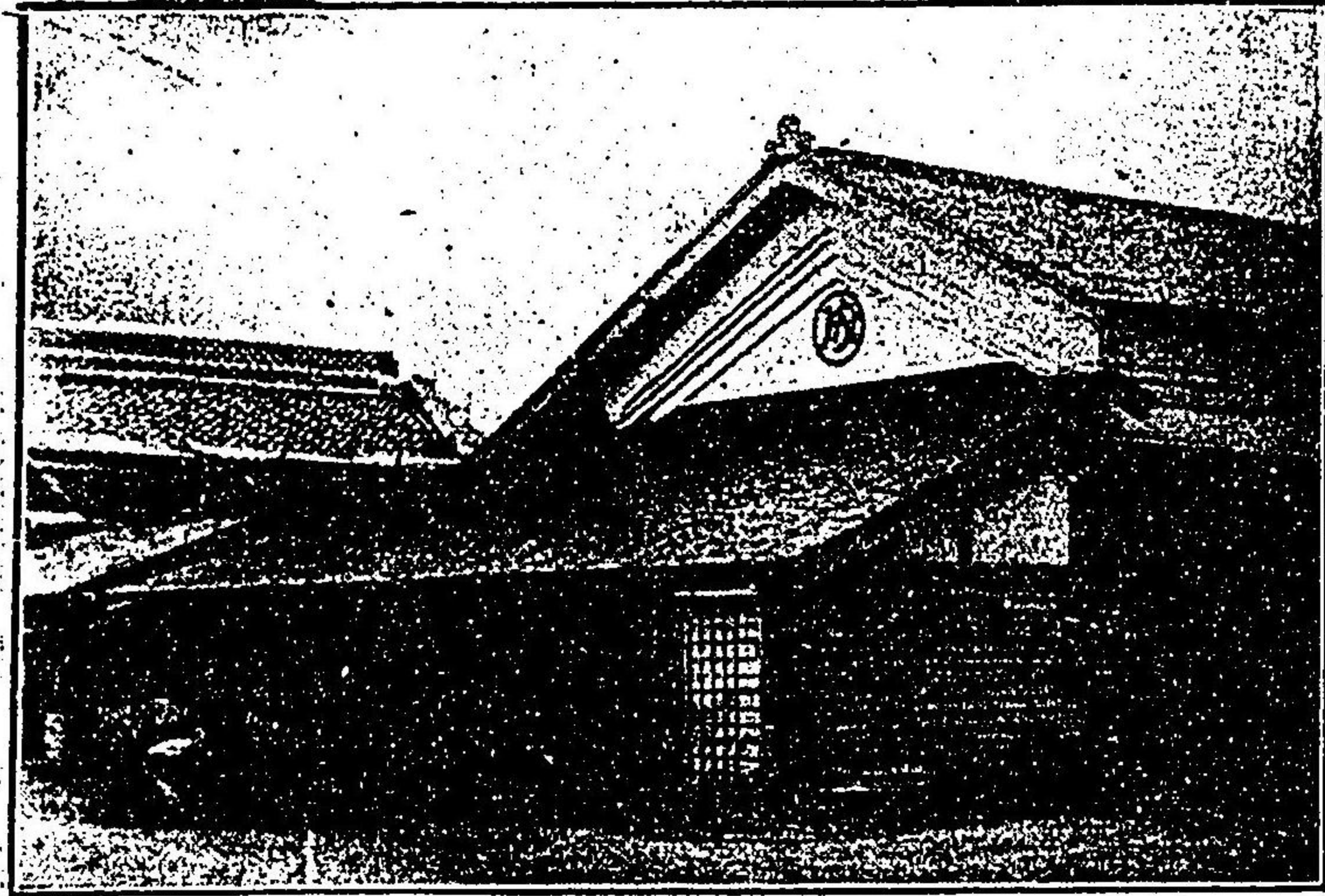
余市町 青柳權上女將



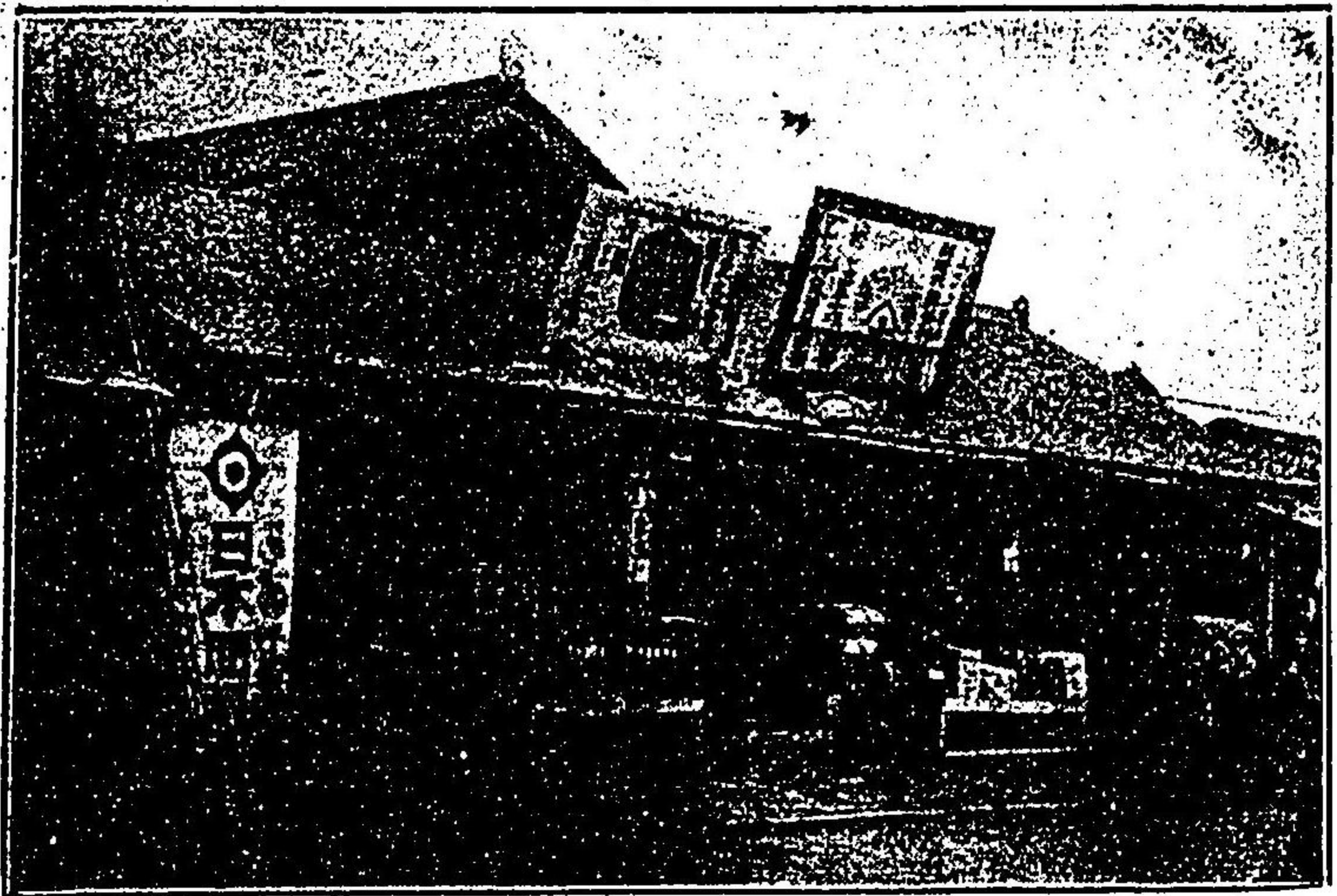
冬小内櫻月花 港都 齋



番八十二話電 や、さの上月花 港都 齋



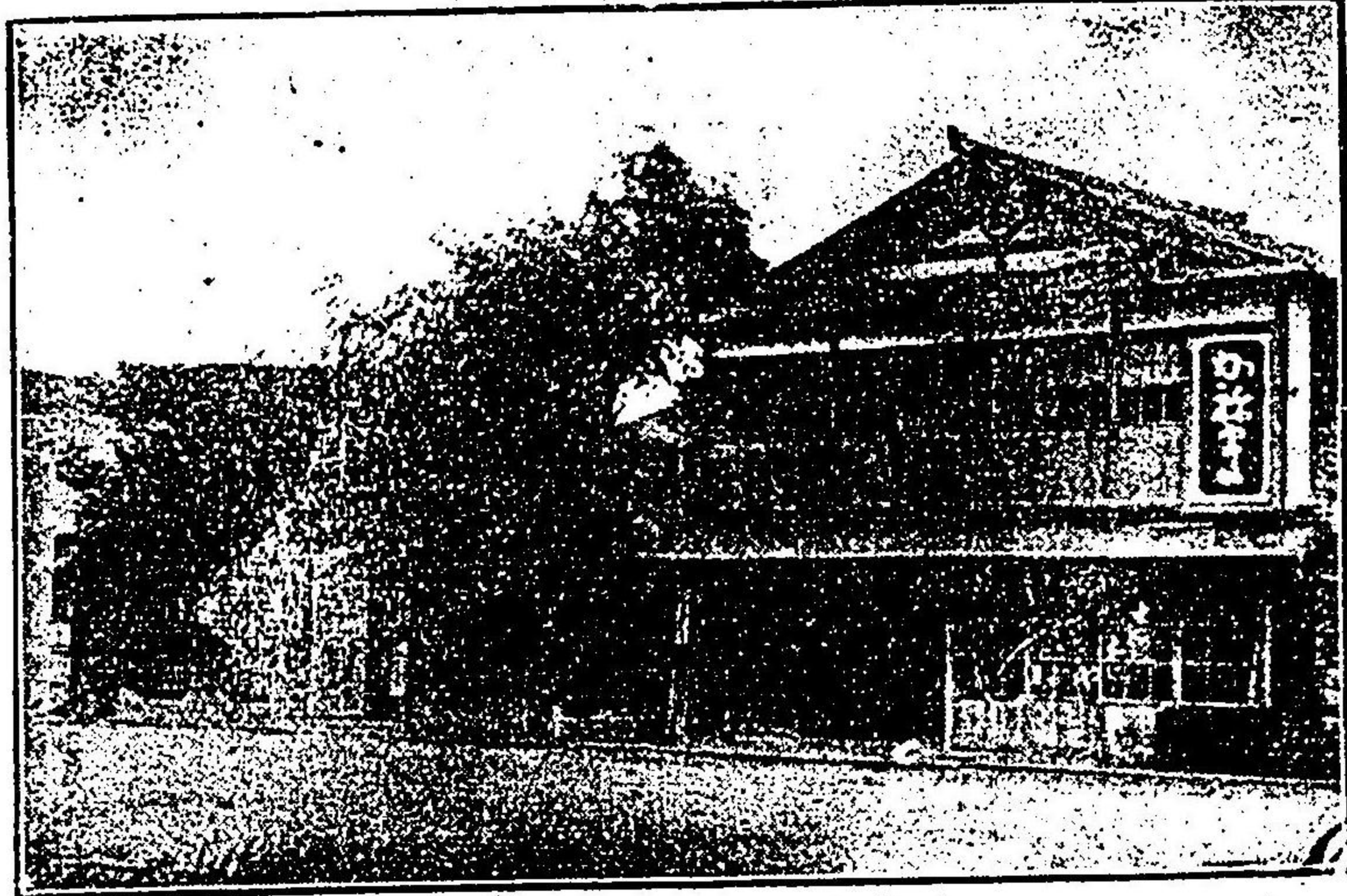
店支市余社台式株成共 町市余



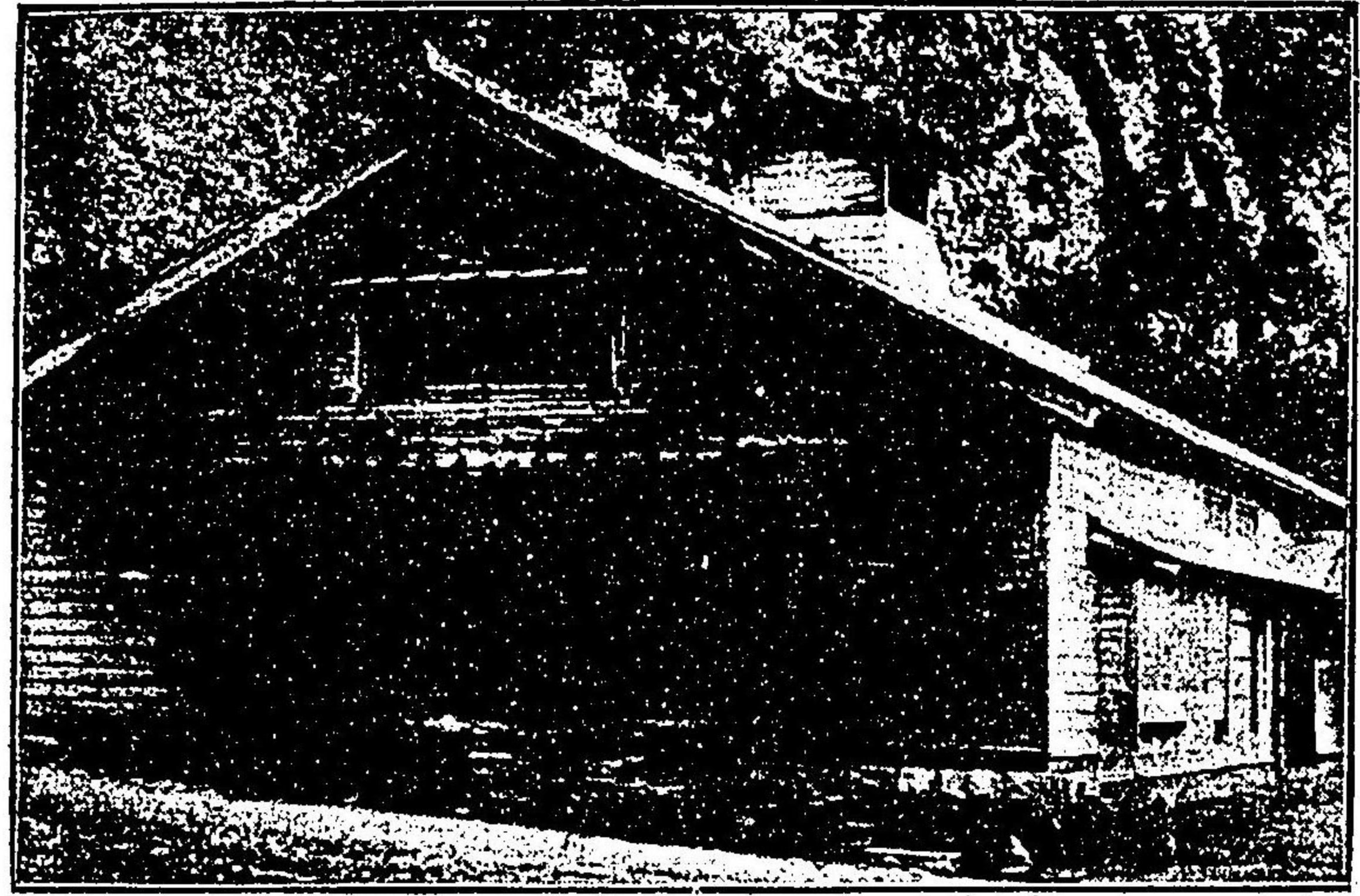
店商藏賢生二羽 町市余



家津梅町市余



館族部印又曲 町市余



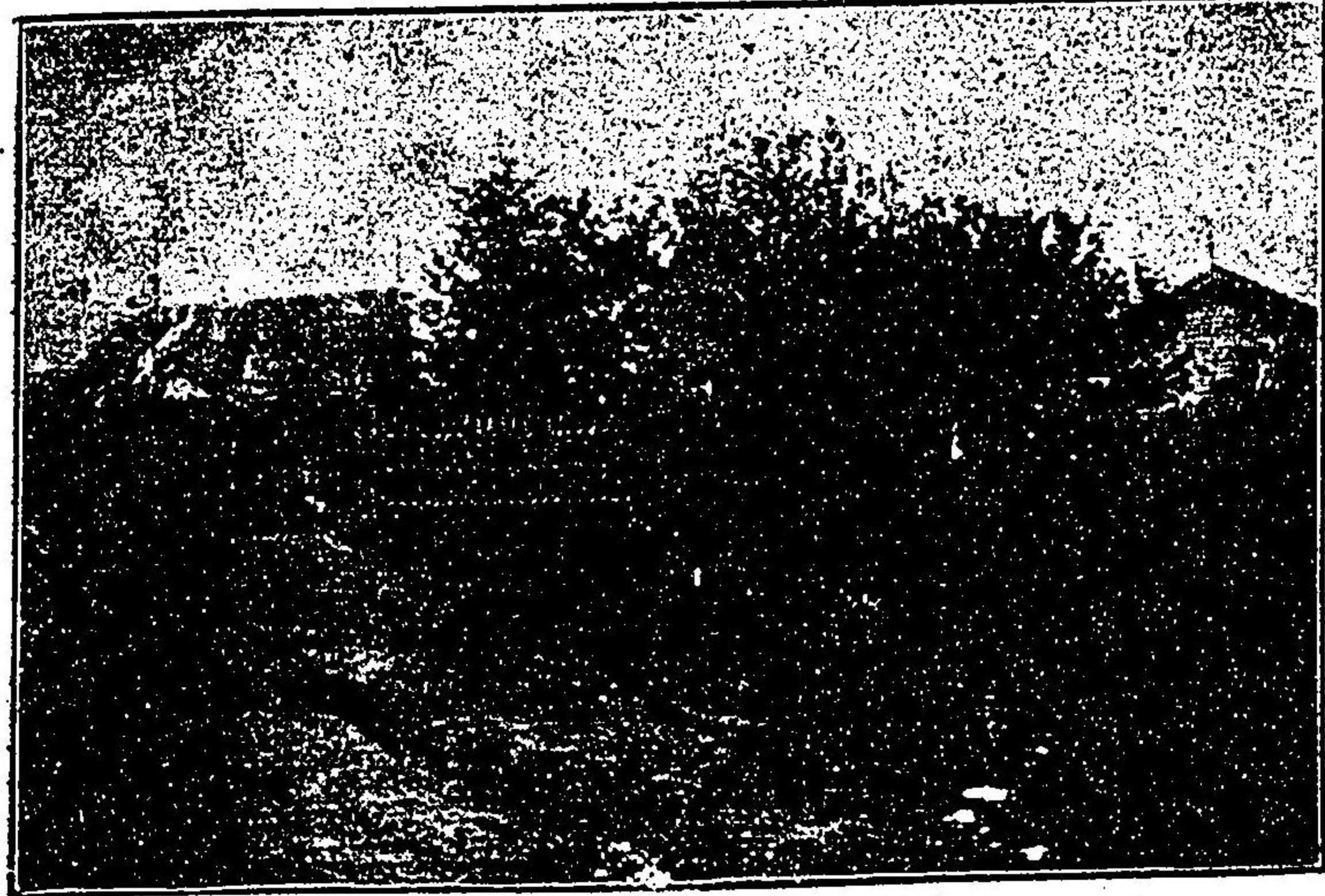
場漁ノ岩耶太由村大 泊島字町市余



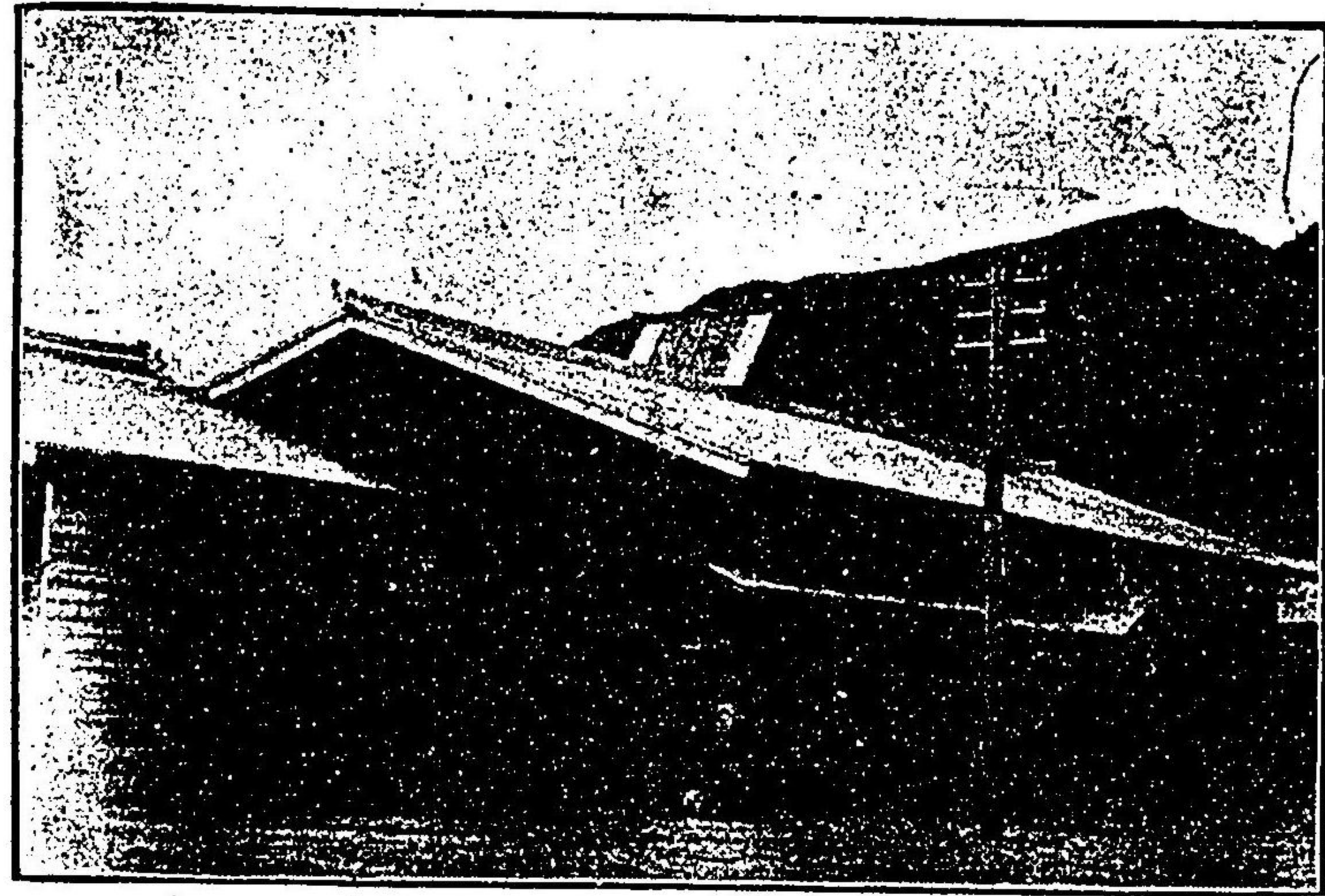
店商吉彌藤後 町市余

北海道余市町字大川町
又 服部旅館
 二電話(三十八番)
 余市停車場前
又 待合所
 二電話(六十二番)

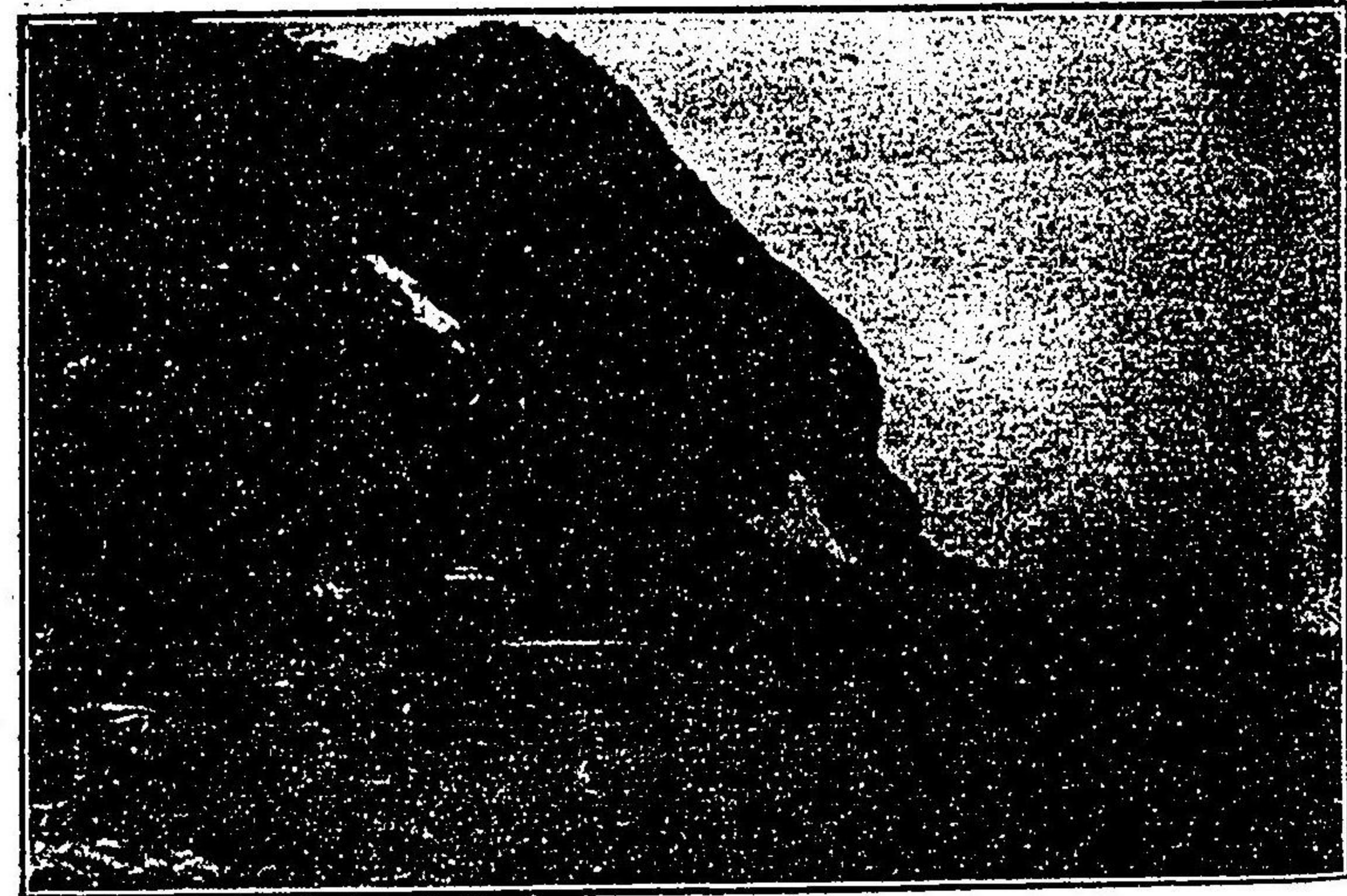
國油卸販賣
 林檎問屋
 印醬油
 卸販賣
服部商店部



院病市余 町市余



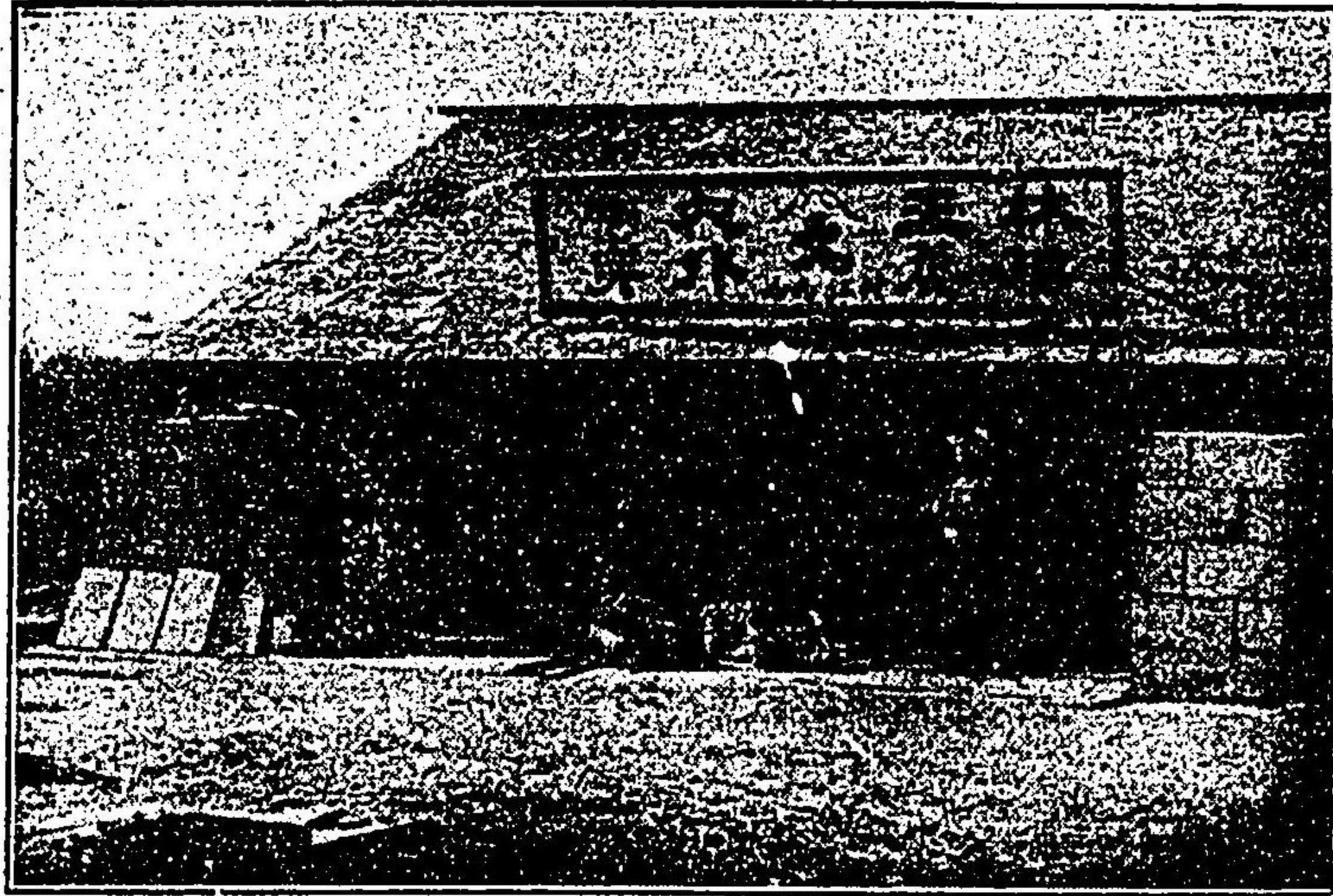
宅邸ノ君耶太徳村奥 家業漁町市余



場漁ノ君耶次藤内川 平足出字町市余



宅住ノ君次林上井 家業漁町市余



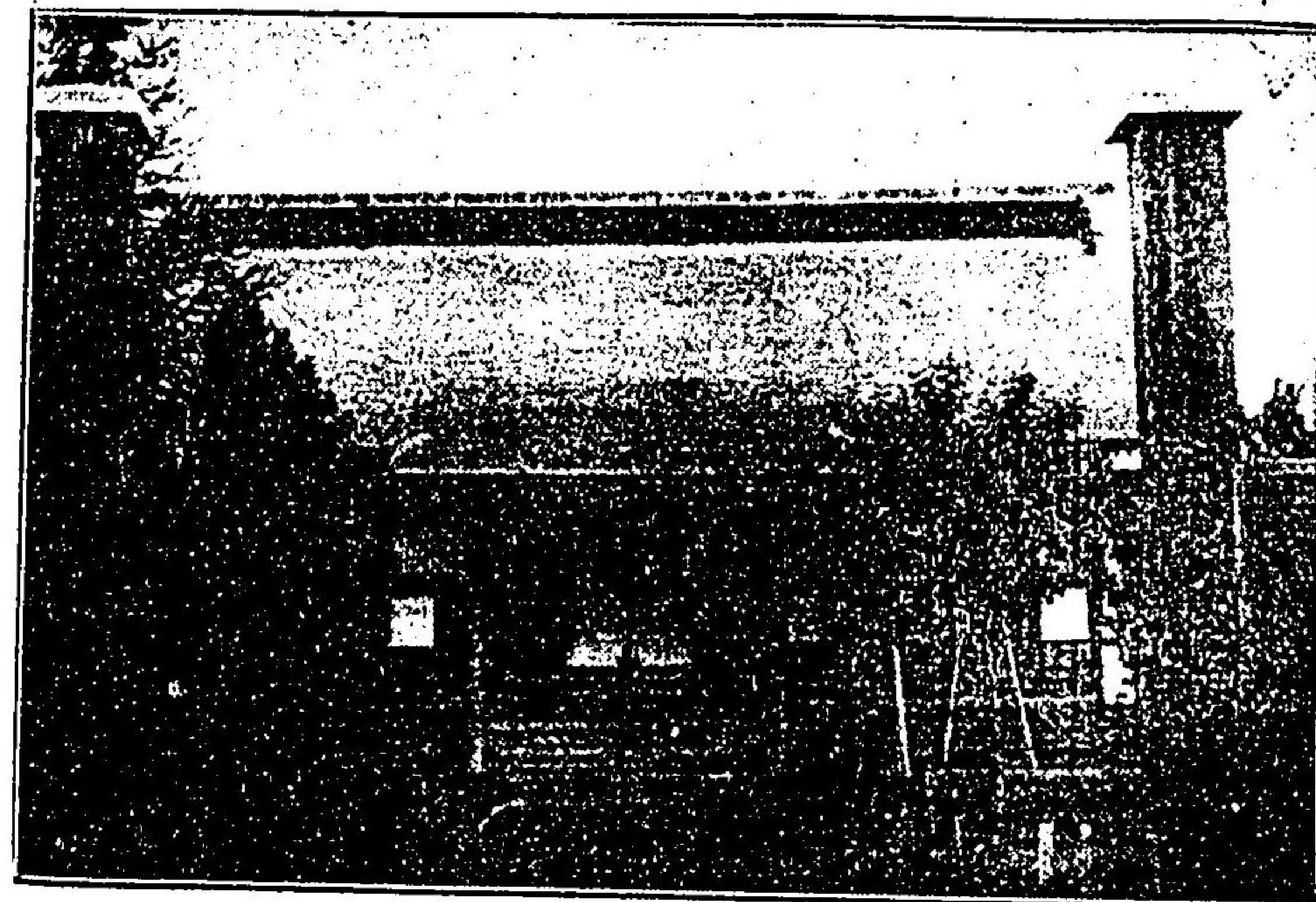
店商松村 前場車停町市余



店支間本 印本丸町市余



寺華法 町市余



寺真即 町市余



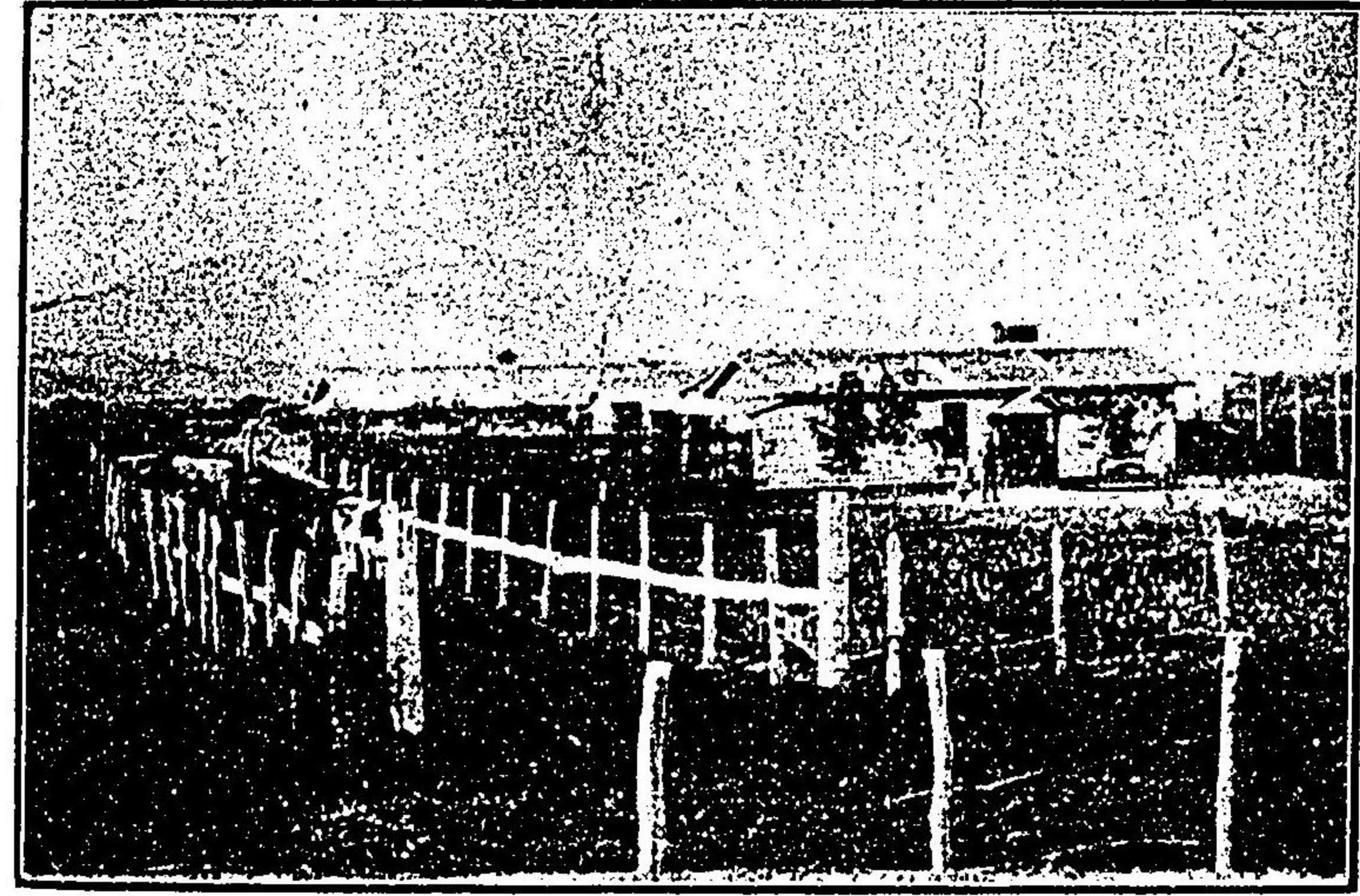
屋野日町市余



店商越北 通場車停町市余



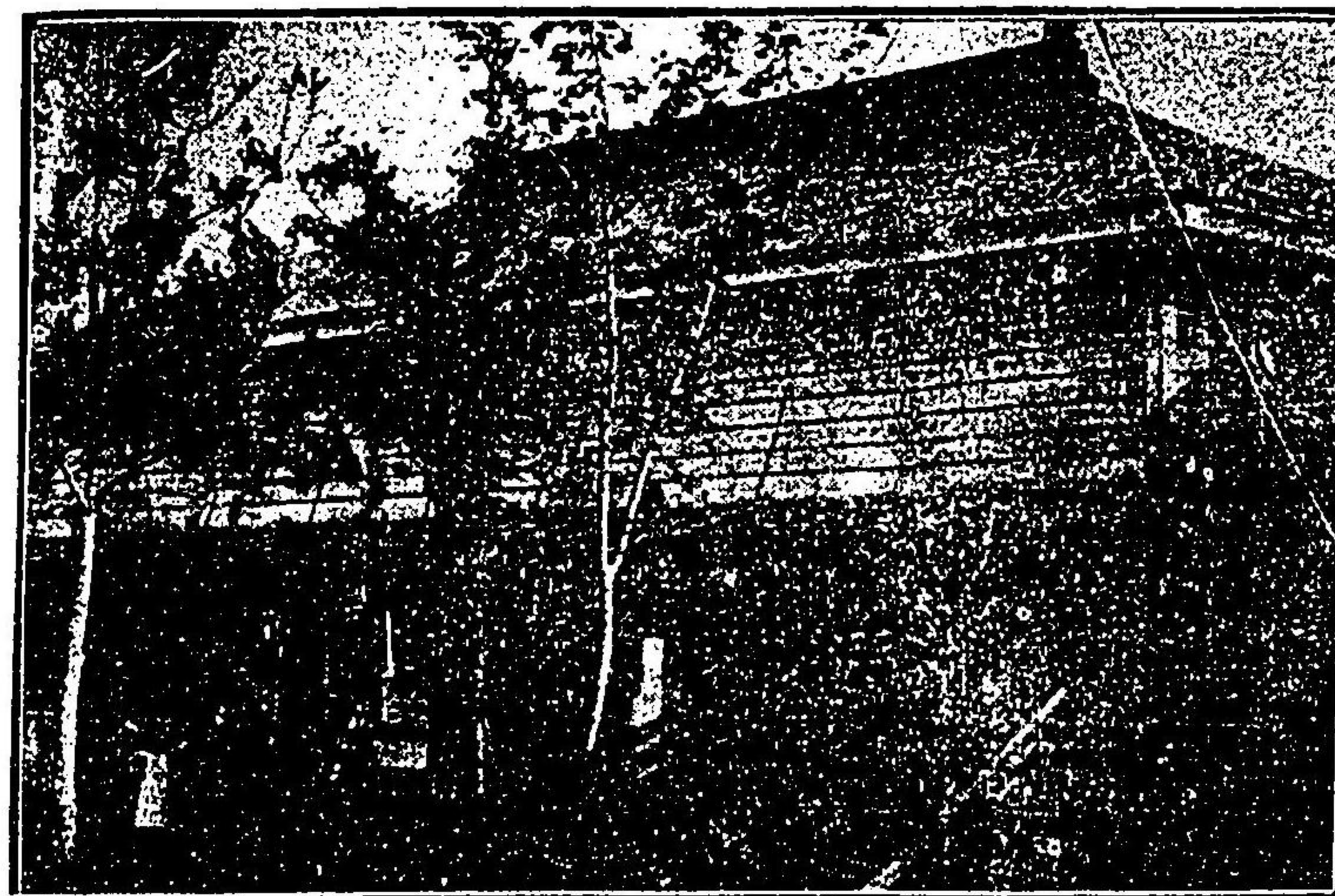
所合待店支又曲 前場車停市余



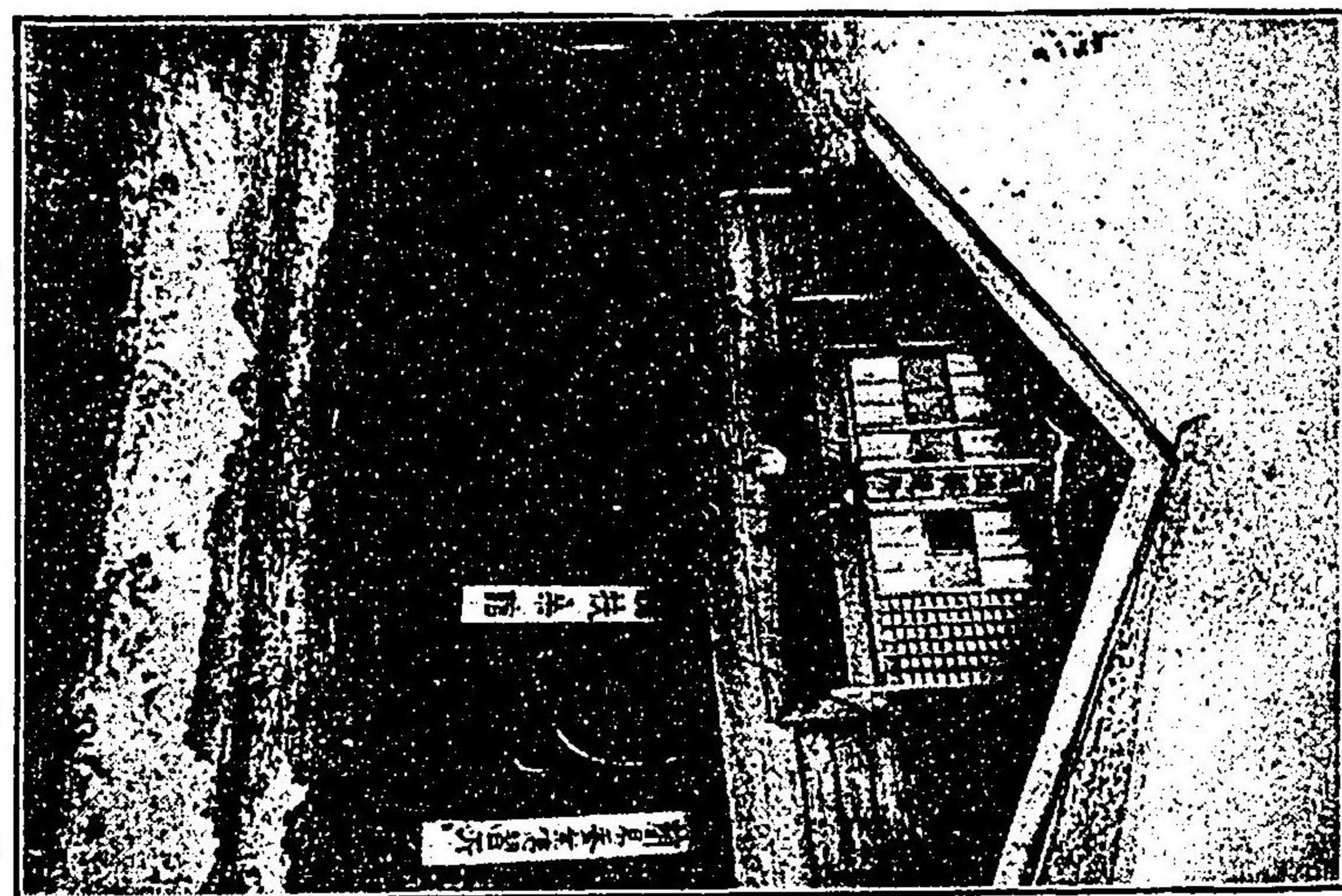
場畜牧ノ氏藏文垣板 町市余



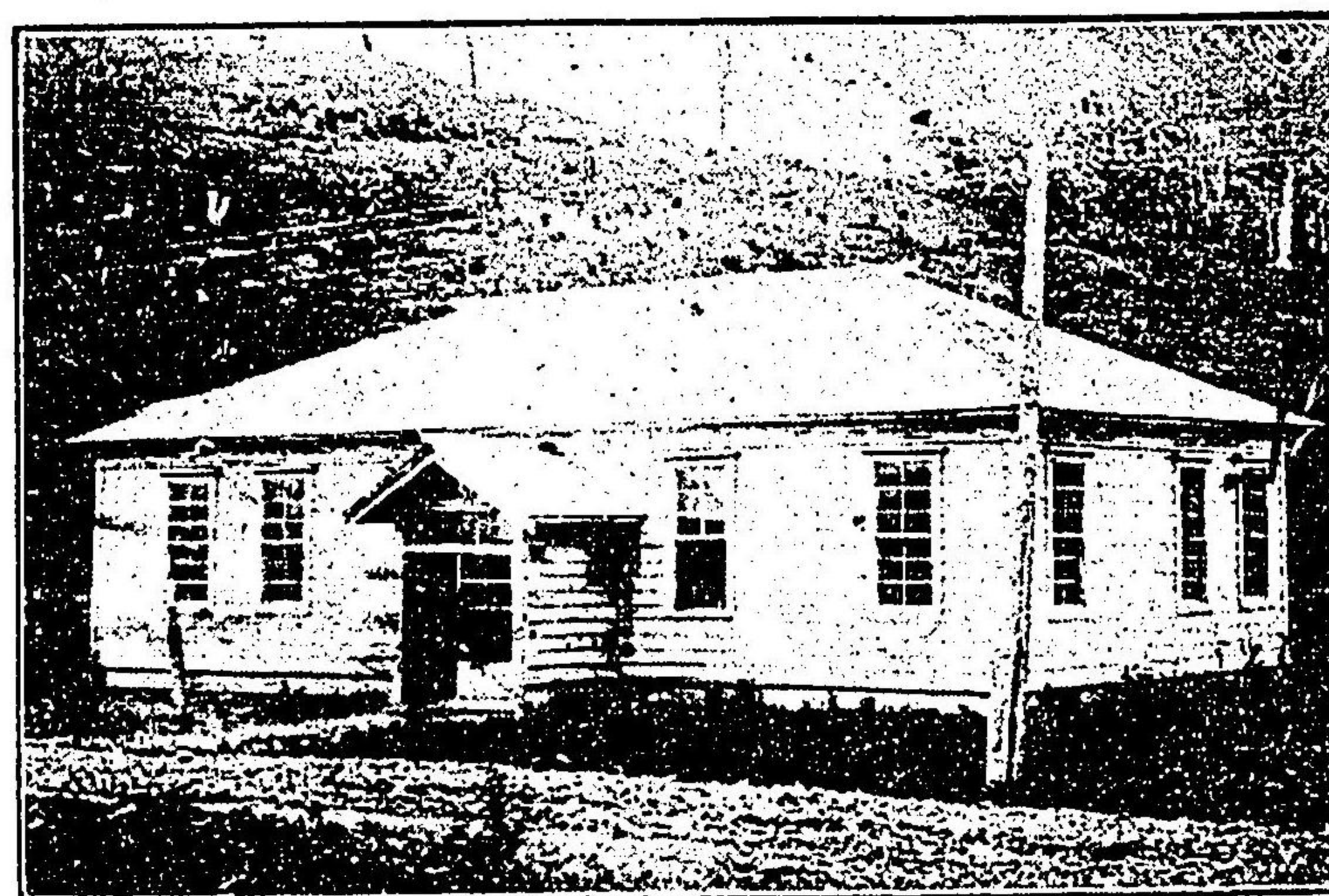
場市魚内岩港内岩



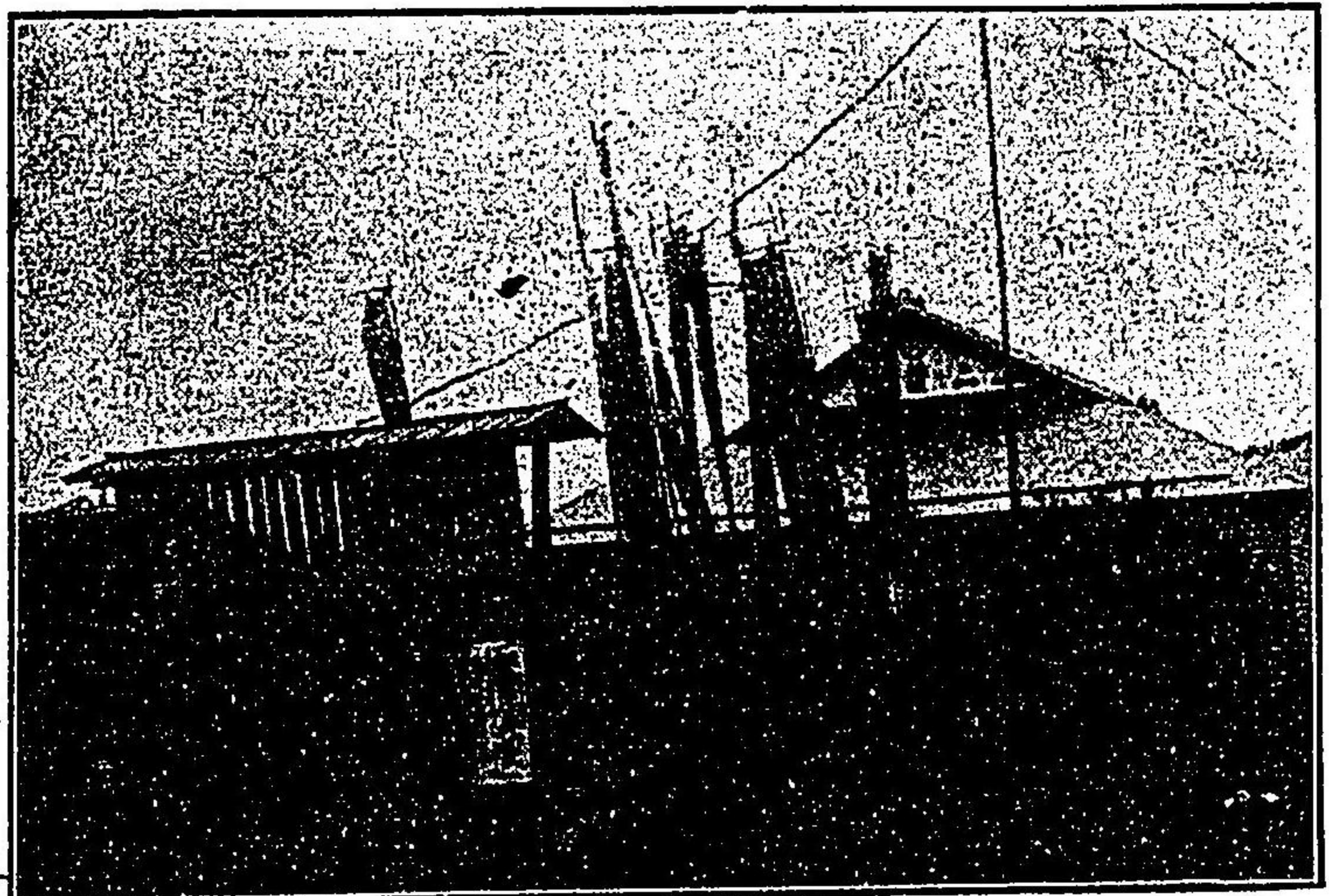
店支村辻印本角 町市余



宅ノ氏重清本北所習傳業越易簡町内岩



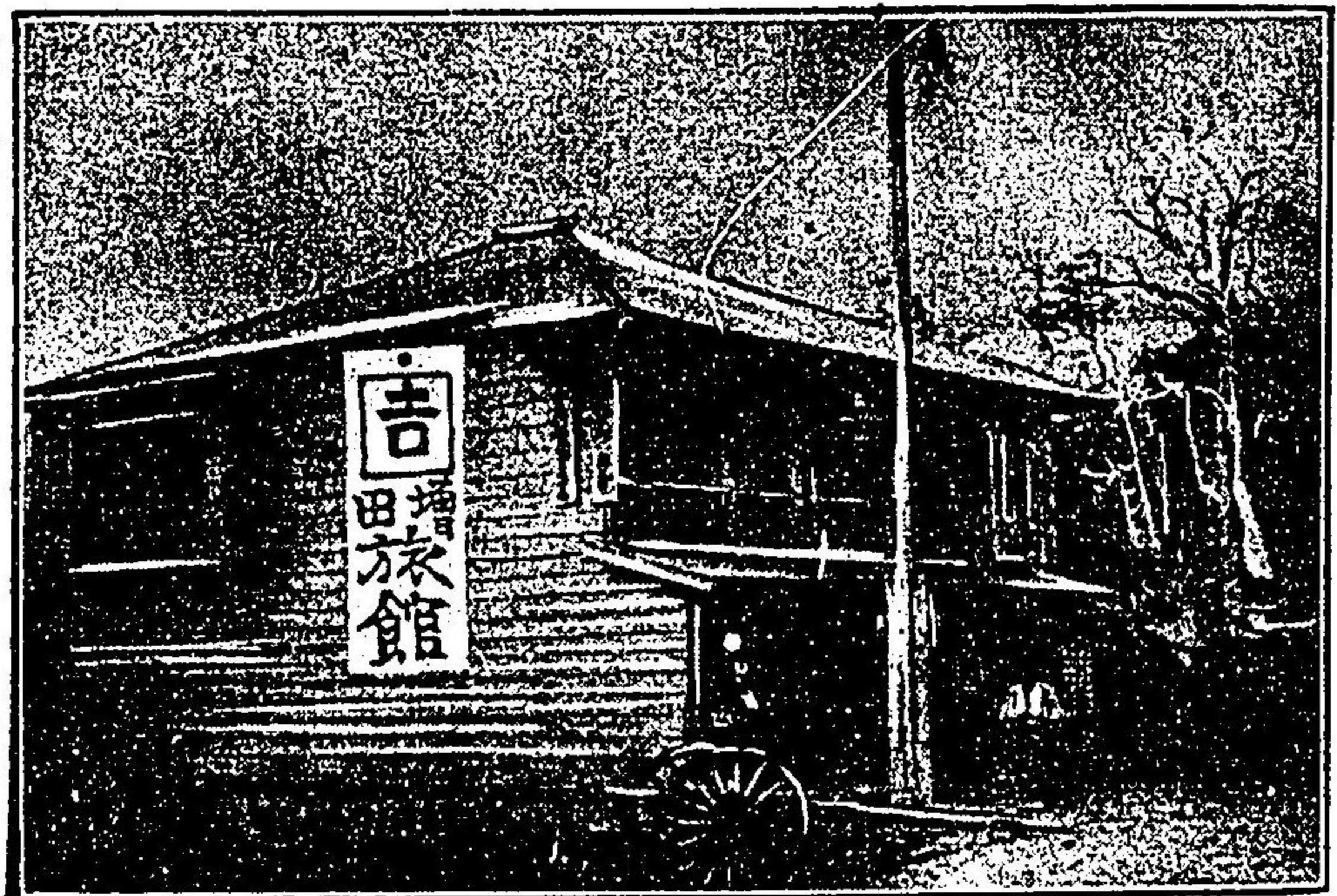
院醫郡太比具須 村澤小



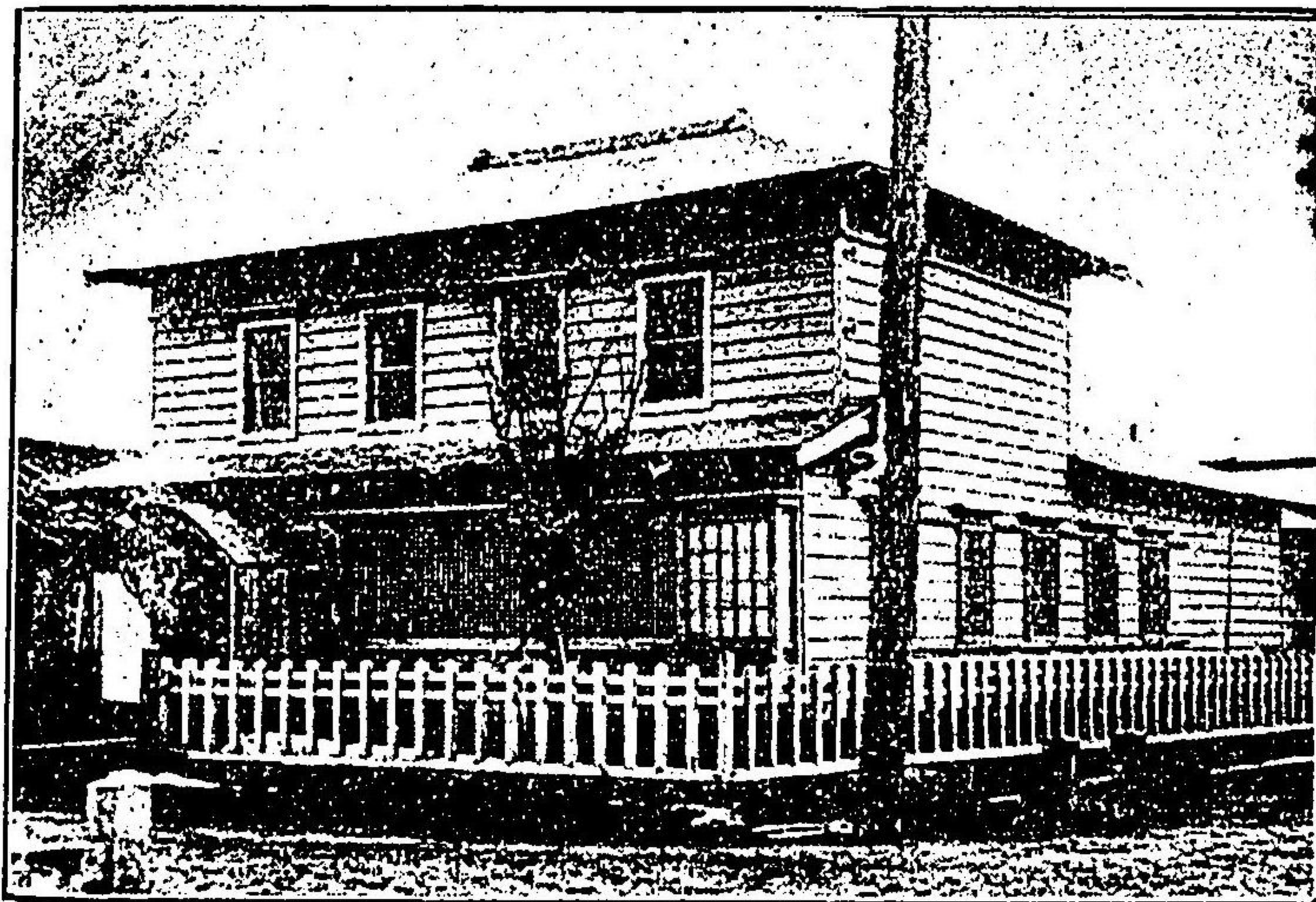
岩内港 二葉庄



岩内港 金精樓



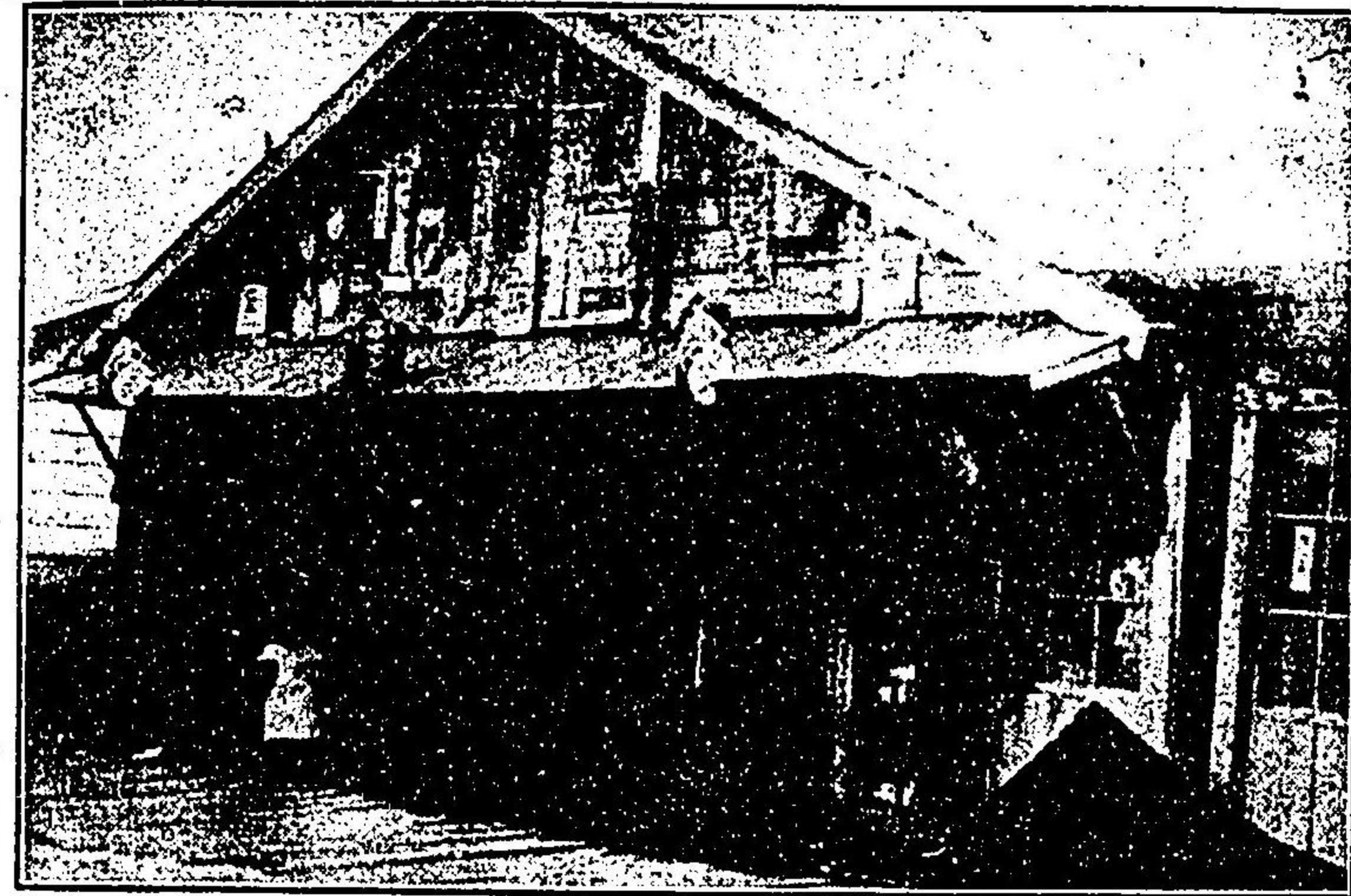
岩内港 增山旅館



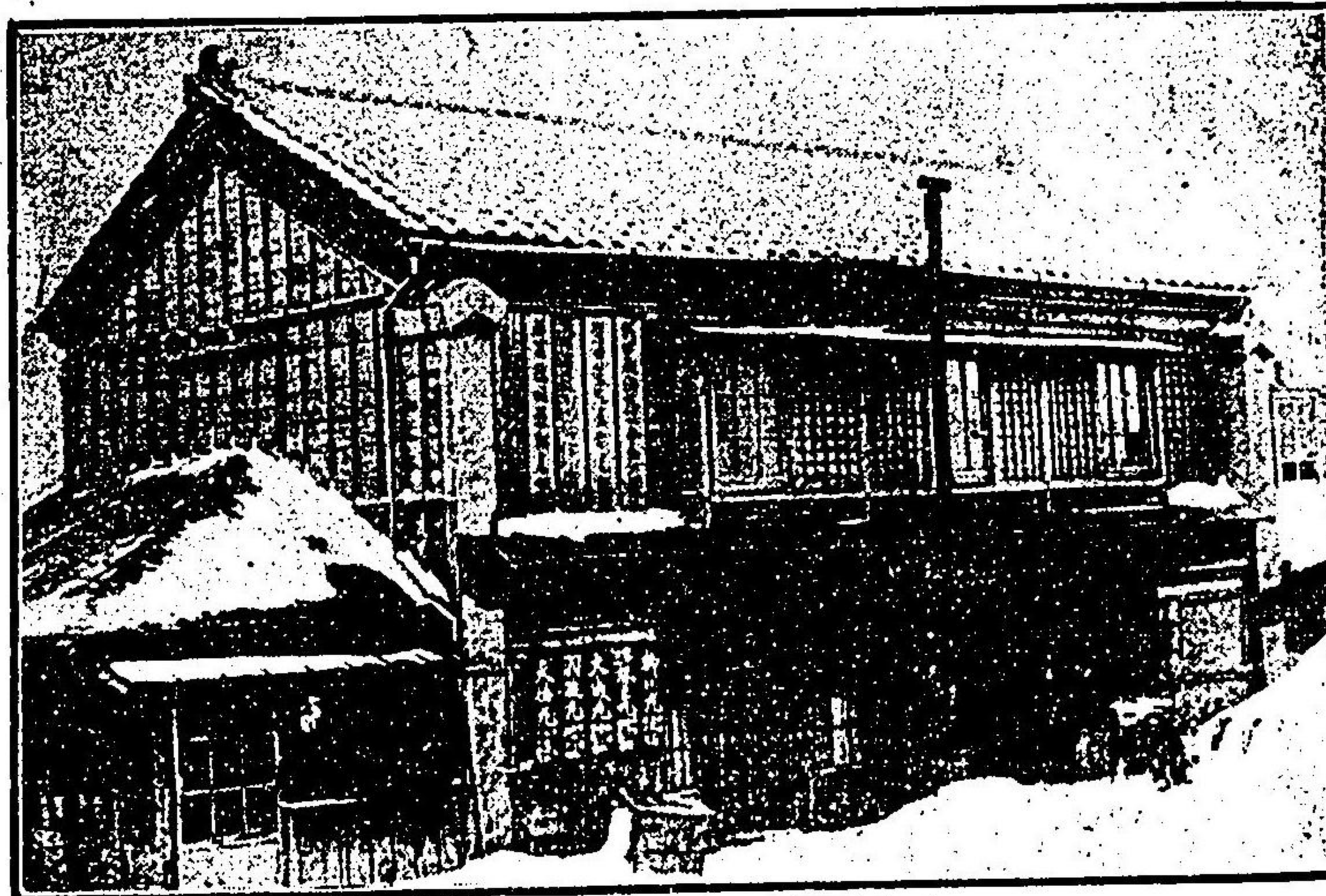
岩内港 岩内番



店商耶一喜四小 港都壽



店商藤齋 驛布昆



店漕回岡西 港都壽

和洋紙筆墨類	和洋煙草鹽	和洋小間物	瀬戸物下駄	各種	昆布驛	吳服太物	諸藥種類	和洋酒鏝詰	米穀荒物	各種
					三					
					齋藤商店					
					電署(〇三)又ハ(廿)					

土木建築
請業負

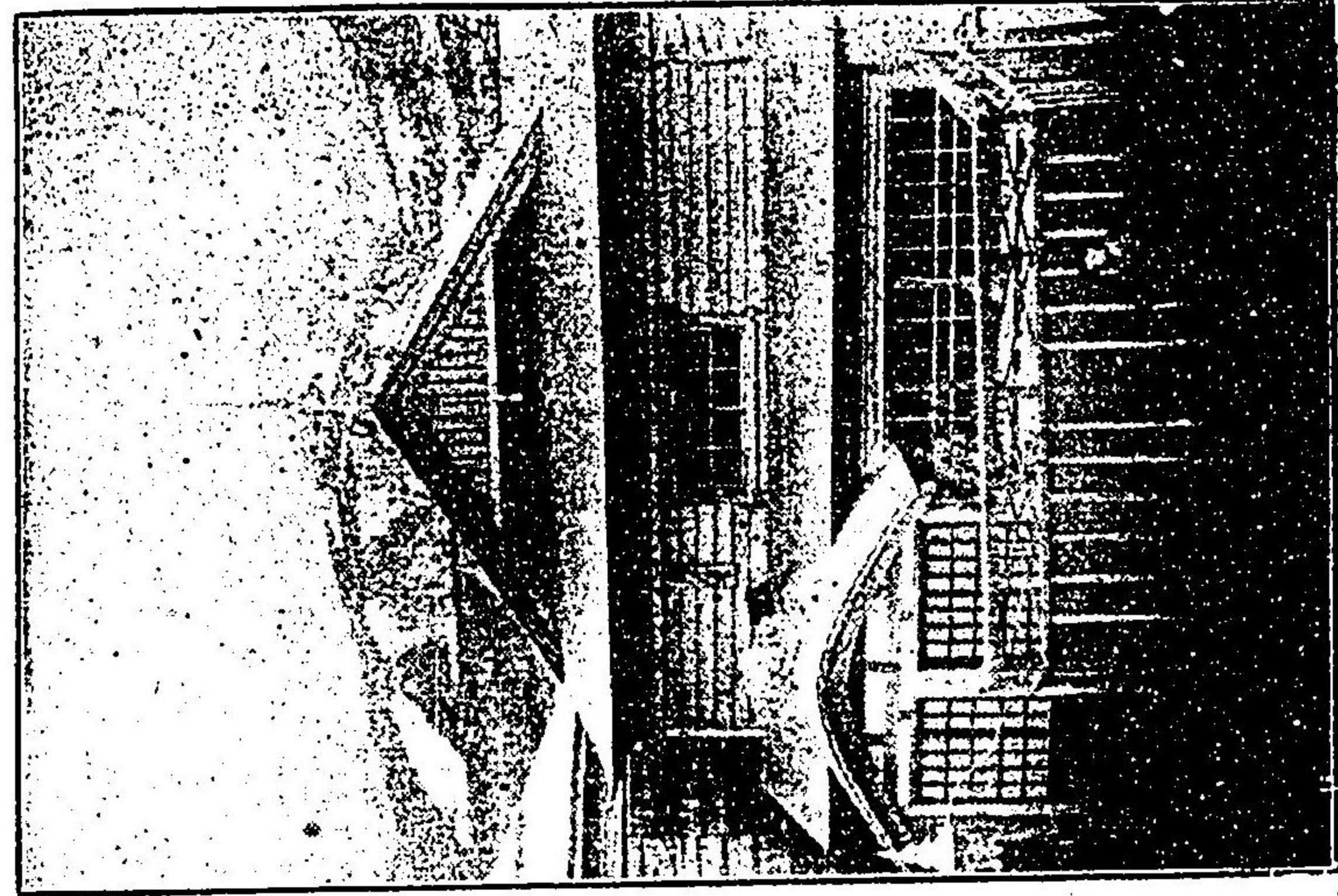
のの

壽都町開進町

吉岡嘉吉
吉岡林藏



吉岡嘉吉君



壽都港三曲松ノ家



壽都町石井旅館

告白

野澤善郎

後志要覽成る、上梓に臨んで顧みて過去を想ふ感慨眞に無量ならずんは非ず、「善郎」力微にして識淺く、才弱ふして覺乏薄し、豈に自ら出版者を以て自任せんや、而かも一度圖書出版の文明的事業にして、殊に本道の地に其の急なるを感するや、微力菲才を顧みず出版事業に従事する多年幸にして大過なく、若々其の目的に向て進みつ、昨夏後志要覽發行を企て、より、月を閱す十有餘ヶ月、其の難、其苦、内は乃ち同志者の反目離散となり外は乃ち種々なる迫害の落下と成り、經營殆んど失望に歸せんとせり、去れど余を激勵し余を鼓舞し、余をして本書發行の目的を達せしめたるものは、社會の同情と、有志の援助と是れなり、豈に自己の奮闘を云はんや、其の各支廳長各町村長並に町村有志の與へられたる同情と援助とは、余の忘れんとして忘る能はざるの處、然り本書を刊行し、余の目的を達せしめたるものは、是等各位の力なり是等各位の同情と援助との賜物なり乞ふらくは余の微力をも顧みず、單身獨歩獨力を以て事を處したるの一事が本書發行を遅延たらしめし罪を恕せよ若し夫れ本書内容の完備に至りては再刊の期あらんと期し茲に續々與へられたる各位の同情と援助とを謝す。



野澤善郎

◎弊店ハ商品凡テ正札附ニテ至極御買上ニ便利ナリ

◎弊店ハ自己之利益ヲ貪ラズ薄利勉強ニ勉メリ

吳服太物

三馬場合名會社 岩内本店

岩内御銚内町七拾二番地

電話(五番)

洋反物各種

小樽區港町壹番地

卸小賣商

三馬場合名會社 小樽支店

電話(三八九)

◎弊店ハ流行品之嶄新ナルト品質堅牢ナルハ特色ナリ

◎弊店ハ御進物用ニ吳服切手之便宜アリ

温泉効能

◎慢性多關節痲質私◎筋痲質私◎腺病◎貧血◎消化不良
 ◎慢性胃及腸加多兒◎慢性氣管支加多兒◎慢性胸膜炎◎肝臟
 及脾臟病◎慢性子宮病及卵巢炎◎梅毒
 其他諸疾患の恢復期後に効あり

◎客室清潔 ◎親切勉強

舊北鐵線昆布驛字ユサンベツ

當温泉ノ案内者ハ昆布
 停車場前荒木旅館ニテ
 御案内仕リ候

成田温泉場

温泉元 旅館 成田元吉

外科 婦人科 内科

岩内港 鷹臺町

濟生病院

院長 栗山英哉

電話(百十八番)

●入院隨意●

東
京
人
造
肥
料
株
式
會
社
製
品

岩
內
港
大
字
鉢
內
町

各
種
北
海
道
販
賣
組
合
店

大
大
嶋
幾
三
郎

海
陸
物
産
委
托
販
賣
業

電
話
(五
〇
番)

電
署
(オ
シ
マ)
又
ハ
(オ)

東人造肥料株式會社製品

岩内港大字鉾内町

種北海道販賣組合店

大鳴幾三郎

陸物産委託販賣業

電署(オシマ)又ハ(オ)
電話(五〇番)

水産業
海産業

古字郡神恵内村
八橋村茂八



醬油
味噌

醸造販賣元

古字郡泊村字糸泊

藤原作平

和洋銅鐵

其他

岩糸ロープ

金

農漁船具

物

製造販賣

式

度量衡器販賣所

古字郡神恵内村



富山三治郎

電話(サキロ)又ハ(サ)

古宇郡

吳服

近江屋號

稻葉光次郎

太物

神惠内村

藥種賣藥
和洋小間物

古宇郡神惠内村

信照堂 乾野増太郎

電話(夕)

學校用品
玩具類

米穀荒物
雜貨海産商

古宇郡神惠内村

高田與惣次郎

電話(夕)

水産業

古宇郡神惠内村

池田ハツ

酒類
鹽越川

醸造販賣

古宇郡興志内村

高井徳太郎

電話(夕)

肝油
沃度
製造業

古宇郡神惠内村

北井長作

電話(夕)

米穀荒物雜貨

商

海産仲買

古宇郡興志内村

坂井周平

吳服太物商

古宇郡神惠内村

小倉兵助

米穀荒物雜貨

海產 仲買 商

古宇郡泊村

久深津糸藏

電話(フカリ)又ハ(ク)

和洋小間物

商

其他雜貨

古宇郡泊村

伊藤伊之吉

和洋小間物

書籍玩弄物

雜貨御小賣

岩内港御餘内町

池田友一郎

電話(二五三三番)

各國 汽船 取扱

回漕業



由利回漕店

岩内港

電話(ユリ)又ハ(ユ) 電話(五十三番)

日本郵船株式會社岩内代理店
各國 汽船 取扱 業
貨物 乘客 取扱 所

岩内港

合資 會社 橋本回漕店

電話(ハシ)又ハ(ハ) 電話(十三番)

各國
汽船
取扱

回漕業



由利回漕店

岩内港

電路(ユリ)又ハ(ユ)
電話(五十三番)

日本郵船株式會社岩内代理店
各國汽船取扱業
貨物乘客取扱所

合資
會社

岩内港

橋本回漕店

電路(ハシ)又ハ(ハ)
電話(十三番)

商標 **平**

醬油 味噌

松竹梅 印

◎安價販賣多少三不拘御
購求願舛

岩內港稻穂崎町

梅澤釀造部

電話(二十五番)

內外科一般

回陽堂醫院

院長 佐々英達

岩內港橋町

吳服古着
太物洋反物
外套鳶肩掛
毛織物一式

五

岩內港鷹臺町二十番地
丸五商店

各地接續荷物取扱

海陸物産

岩內港御鉾内町

力柿崎運送店

(電話百四十六番)